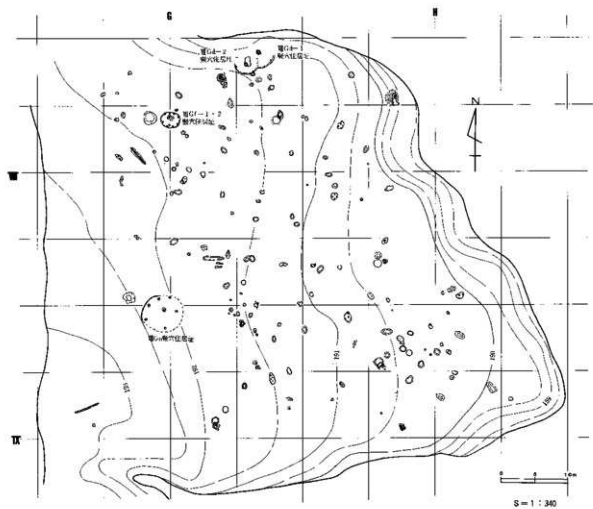


8 区

略 号	YH 8
調査面積	7,040㎡
調査機関	滝沢村教育委員会



第1图 N区遗址配置图

I 地形と地質

1. 地形

本区は、湯舟沢遺跡を東へと横切る市兵衛川支流の南岸・西端に位置する、西から伸びる丘陵の東端の台地である。南半を小さな沢の浸食によって南北に二分されており、それぞれ、8 N区・8 S区として調査した。北と東は段丘崖で、沢との比高は5m前後である。

8 N区は、東西・南北とも70mほどのD字形の台地であり、西側調査区外は、道路を隔ててすぐに丘陵となっている。全体にほぼ平坦だが東に向かって緩く傾斜しており、東西端比高は2～2.5mを計る。中心部水準192.5m、面積は約4,460m²である。

8 S区は、8 N区から前述小沢を隔てて、遺跡南側を東に伸びる丘陵に登る北向きの緩斜面である。東西に100mと長い、南北は広い所で30mと細長い。ほぼ平坦だが、中央付近に北から入り込む緩い凹地がある。東端と西端・南端と北端の両比高とも2m程度、沢との比高は5mほどである。中心部水準193m・面積2,570m²。

8 N区北東には沢を挟んで3区、北西には70mほど奥に2区がある。8 S区の北東は、3区・5区・10N区に囲まれるように4区の低湿地が接している。

2. 基本層序(第3・4図)

本調査区の層序は、N区・S区・および両区各地点において、基本的には大差無い堆積状況である。各層の厚さも大きい変化は無く、安定した様相を示している。

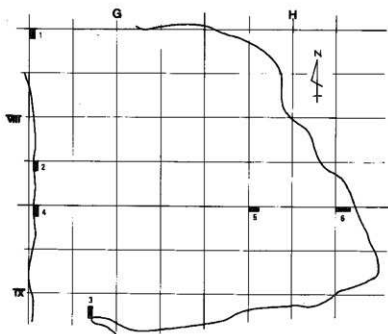
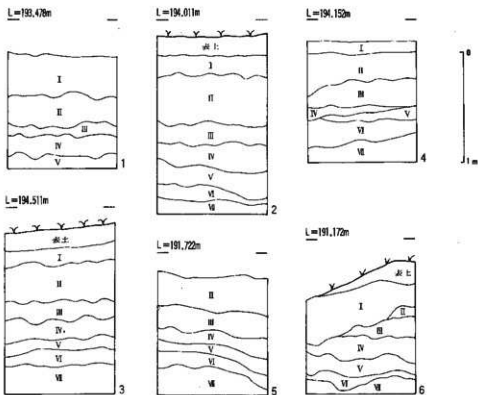
各層の土性・土質を、以下に記す。

表七:

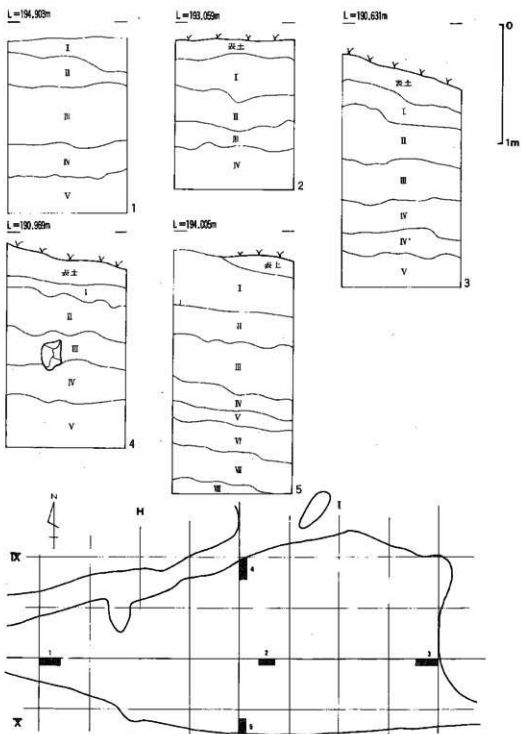
I層: 10Y R3/1 黒色土 やわらかい。場所によっては、下位に粉状バミスを微量含む所もある。

II層: 10Y R1.7/1 黒色土 やわらかい。弱い粘性を持つ。

III層: 10Y R3/3 暗褐色土 やわらかく、弱い粘性を持つ。橙色を呈する小径(1～2



第3图 基本层序(1)N区



第4图 基本層序(2)S区

mm) のバミス粒を全体的に含んでいる。

IV層：10Y R5/6 黄褐色土 幾分やわらかく、粘り弱く、脆い。上記バミス粒や細砂が、若干量混入している。

V層：10Y R3/4 暗褐色土 やや硬くなる。粘りは弱く、脆い。上記混入物の他、径5mm前後の黄褐色のバミスが少量入る。

VI層：7.5Y R5/8 明褐色土 硬い。小礫を多く含み、脆い。

VII層：10Y R4/4 褐色土 硬い。赤褐色を呈する粘土質土のブロックが、若干入りこんでいる。

VIII層：10Y R4/6 明褐色土 径2mm前後の黄褐色を呈するバミス粒、径5mm前後の黄褐色を呈するバミス粒を、多量に含む。場所によっては全体に赤褐色に変化する。

IX層：10Y R4/6 明褐色土 非常に硬くしまっている。

II 発見された遺構と遺物

1. 竪穴住居址

VIII Gd - 1 竪穴住居址 (第5図・第1表・写真図版3)

位置：調査区北端の急斜面(段丘崖)上にあり、西南に重複してVIII Gd - 2 竪穴住居址がある。本住居址が切られている。

検出：地表下30cmのII層中より、炭化粒子の若干の分布域として検出した。

埋土：大略3層に分類される。中位層には炭化粒子を多く含み、遺物は中位層以下に出土している。自然堆積。

形態・規模：西南の一部を、壁の上半のみVIII Gd - 2 住居址により切られている。北半は沢に削られて消失しており、北東一部、試掘の際のトレンチにより欠失している。残存部にては最大径4.3m、推定長径は4.5mほどの、幾分楕円がかった平面形と思われ、長軸方向はN30°Eあたりと推定される。床面積推定値15.2㎡。

壁：II層より掘り込まれ、やや外傾して立ち上がっている。壁高は、残りの良い南端部分で30cmほどである。

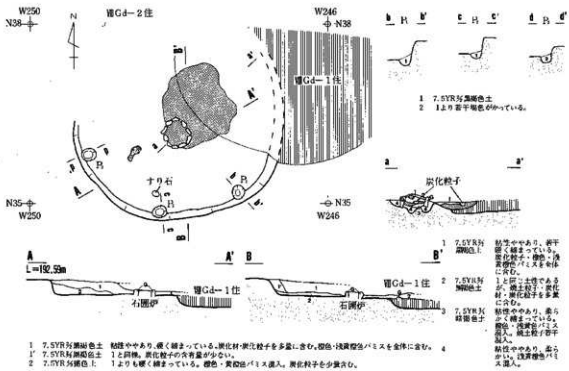
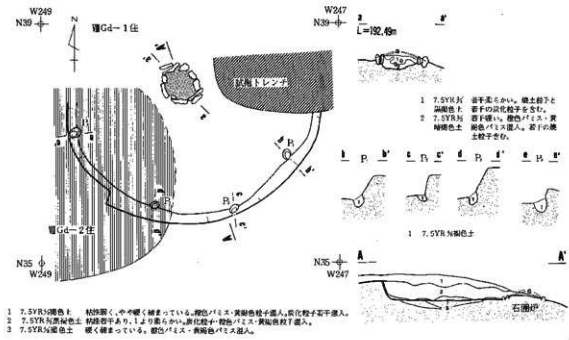
床：IV層上位を床面とする。ほぼ平坦で、全体にあまりしまっておらず、貼床等はない。北半は沢に削られ、不明である。

柱穴：残存する南半床面にて、4基検出している。開口部は12~21cm、深さ7.8~13.6cmと小規模だが、何れも竪穴の中心に向かって傾いた立ち上がりを示す。各柱穴間の距離は、1.26m、1.32m、1.82mとバラつきが見られるが、8本前後の柱穴を想定し得る。壁沿いにめぐると思われる。柱穴埋土は単層であり、いずれも、竪穴埋土の3層土に類似した土質・土性のものである。

炉：竪穴残存形態から判断すると、中央やや西よりに 第1表 VIII Gd - 1 竪穴住居址
位置するものと思われる。楕円がかった長方形の石囲炉 柱穴計測値一覧

であり、長軸93cm短軸64cm、長軸方向はN39°Wである。構造は、床面から深さ6cmほどに掘りくぼめ、そのへりに石を貼りつけたものようである。炉内は焼土粒子・炭化粒子を含む土で埋っており、石の内面は若干の火熱を受けた痕跡はあるものの、長期にわ

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
口径 (cm)	16×15	17×12	16×12	21×17
深さ (cm)	8	8	12	14



第5図 W249・W247・W250・W246 整穴住居址

たる炉の使用を裏づけるものはない。

VII Gd - 1 竪穴住居址出土遺物 (第6図・写真図版20)

埋土中より若干の土器片が出土しているが、いずれも小片である。2はより糸と沈線によるすり消し文、3は三叉文を持つ口縁部片である。床面からは鉢形土器1点(1)と、すり石1点(4)が出土している。鉢形土器は断面内そぎの平口線を持つもので、全面に2段単節のLR斜行縄文を施す。4のすり石はやや楕円がかったものであり、よく使用されている磨面が2ヶ所、同じく打面が2ヶ所にみられる。

出土遺物からは、縄文時代後期の住居址と思われる。

VIII Gd - 2 竪穴住居址 (第5図・第2表・写真図版3)

位置：前述VII Gd - 1 竪穴住居址と同様である。VIII Gd - 1 住を切っている。

検出：II層面にて、炭化粒子・焼土の分布域として検出。焼失家屋である。

形態・規模：全体の1/2程度の残存だが、ほぼ円形のプランを持つと推定される。VIII Gd - 1 竪穴住居址同様、やはり北半は沢に削られ、又北東一部をVIII Gd - 1 住の調査の際に誤って壊している。残存部最大径は3.48m、推定径は3.6m前後と思われる。

壁：全周の1/3程度の検出である。幾分外傾気味に直立し、残存部壁高は20~30cmである。

埋土：おおむね2層は大別される。1層は基本層序II層の土質に似るが、家屋焼失時の炭化材を多量に含む。2層は床面上に堆積しており、基本層序III層土に近い。1・2層ともにその中から若干量の土器片が出土している。自然堆積。

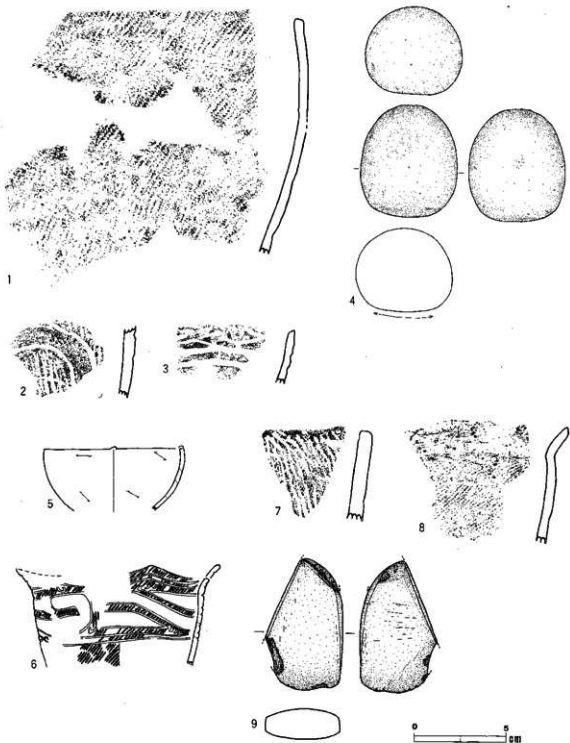
床：ほぼ平坦であり全体に硬くしまっているが、貼床等は施工されていない。推定床面積は約10㎡ほどと思われる。

第2表 VIII Gd - 2 竪穴住居址柱穴計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃
□径(cm)	22×21	24×20	21×21
深さ(cm)	9	8	10

柱穴：残存部において3本検出している。いずれも壁沿いにやや中心に向けて建てられてあったと思われ、規模は開口部で22cm前後、底部で10~15cm、深さは9cm前後と小型のものである。各柱間の距離は1.36m、1.52mと大差は無く、推定プランからは7基前後の柱穴が、壁沿いにめぐっていたものと思われる。柱穴の埋土は、竪穴住居埋土2層のものと同じか、もしくはよく似たものである。

炉：住居の中央南寄りに位置し、長径50cm、短径42cm、長軸方向N23°Wの、楕円形の石囲炉。住居床面に深さ20cmほどの掘込みを入れ、襖を一列に並べて埋置した構造を持つ。炉内の焼土は床面下5~10cmに分布し、炉直上の、住居焼失時のものと思われる焼土中より、若干の土器片が出土している。



第6圖 WGD-1・WGD-2 豎穴住居址出土遺物

Ⅷ Gd - 2 竪穴住居址出土遺物 (第 6 図・写真図版 20)

埋土中より若干の土器・石器が出土している。口縁部に B 形突起を持つ、外面をみがき、内面をヘラナデした碗形の土器(5)。7~8 個と推定される山形突起の口縁を持ち、平行沈線と L R 縄文によるすり波を持つ鉢形土器(6)。R のより糸文の口縁片(7) 1 点出土している。破損した基部に、使い易くする為か、又は砥石として再利用したものか、大きく磨きなおされた痕がある。刃部は何度も砥ぎなおされており、使いこまれたものである。

出土遺物から、縄文時代後期前葉の住居址と思われる。

Ⅷ Gf - 1 竪穴住居址 (第 7 図・第 3 表・写真図版 4)

位置: 本洞区北西寄りの平坦地に位置する。Ⅷ Gf - 2 竪穴住居址と同一の平面を持ち、同住居の床を覆う形で、本住居址の床面が乗る。北西 11~16m に、前達Ⅷ Gd - 1・2 住居址が、又、南 30m にはⅧ Gn 住居址が存在する。

検出: II 層上面にて、炭化粒子を含む黒色土の分布域として検出した。

形態・規模: 東西 3m、南北 2.4m の楕円形の平面を持つ。

壁: 床面よりほぼ直立して立ち上がる。壁面は全体にやや硬く、しっかりしている。壁高は 30~35cm で、やや南西に高く北東に浅い。

埋土: 大別 3 層に分類される。上層は基本層序 I 層土、中位層は II 層土、下層は II 層土に種々の混入物といったあり方を示す。下層の混入物には焼土粒子、炭化粒子が多く認められ、焼失家屋であった可能性もある。

床: 中央で若干(3cm 程度)下がるものの、ほぼ平坦と言える。中央北寄り、炉の東側に、径 80cm ほどの範囲で非常に硬化した面を持つ。他はややしまった程度に、ほぼ均一である。

柱穴: 9 基検出しているが、うち 1 基 (P_9) は壁に沿わず、規模、深さ等も他とは異なり、必ずしも柱穴とは認め難いものである。他の 8 基は壁沿いにめぐる。柱間距離は、北側 4 本間は短く(66~77cm) 南側 4 本間は、それよりはやや長い(80~89cm)。又、 $P_4 \cdot P_5$ 間は、105cm、 $P_1 \cdot P_8$ 間は 119cm と、東と西に大きく開く配列となっている。柱穴内埋土はいずれもほぼ似た

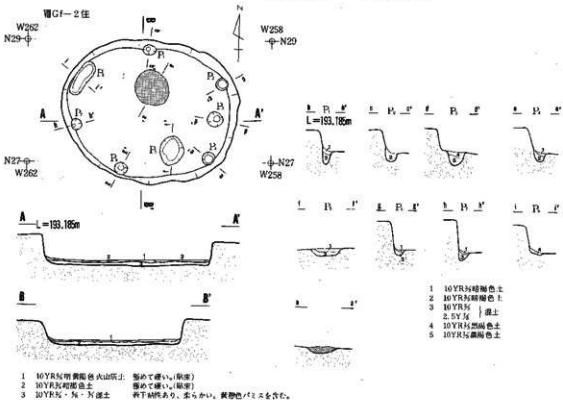
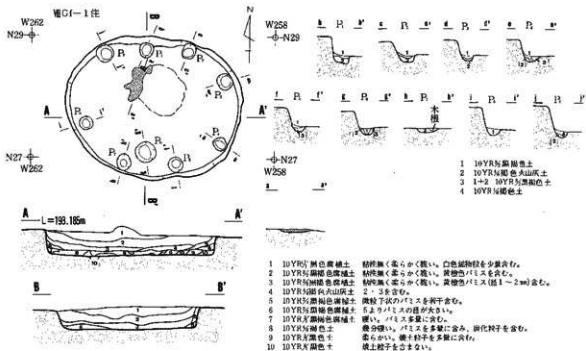
第 3 表 Ⅷ Gf - 1 竪穴住居址柱穴計測値一覧

	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9
口縁 (cm)	25×28	25×22	26×21	26×23	23×22	24×23	27×22	23×22	25×29
深さ (cm)	12	12	9	11	9	11	11	10	7

ようなものだが、柱穴底面は、 $P_6 \sim P_1$ の西側 4 基が特に硬化しており、 $P_2 \sim P_9$ の東側 4 基と明

確なちがいを見せている。

炉: 竪穴住居床面の北西寄りに地床炉を持つ。明確な掘り込みも無く平面形も不定であるが、焼土は硬く焼きしまっている。南北 60cm、東西 30cm ほどの規模である。



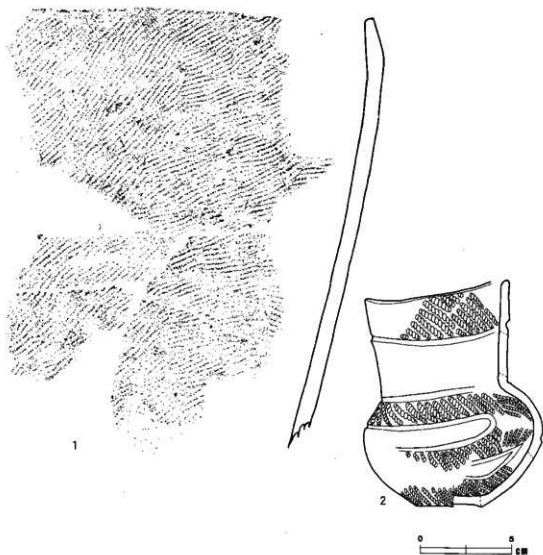
第7図 ⅧGf-1・ⅧGf-2 竪穴住居址



VII Gf-1 竪穴住居址出土遺物 (第8図・写真図版20)

埋土下位より2段卑節のLR斜行縄文を全体に施した大形の深鉢1点(1)。同じく埋土下位の壁際よりRL原体による地文に沈線区画を用いたすり消し文を持つ小型の壺が1点(2)出土している。

出土した遺物から、縄文時代後期中葉の住居址と推定される。



第8図 VII Gf-1 竪穴住居址出土遺物

VII Gf-2 竪穴住居址 (第7図・第4表・写真図版4)

位置・検出・形態・規模・壁：以上はVII Gf-1 竪穴住居址と同じである。

埋土：VII Gf-1 住の貼床の下に、やわらかい混土が入っている。同住居址の床を構築する際の埋め土と思われる層である。

床：ほぼ平坦であり、一様

第4表 VII Gf-2 竪穴住居址柱穴計測値一覧

に硬い。

柱穴：8基検出している。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
口徑(cm)	22×16	20×19	25×24	21×20	49×40	20×20	18×17	22×41
埋さ(cm)	24	35	23	10	23	9	17	5

そのうちP₃・P₅の2基は壁

沿いにめぐらず多少内側に寄っており、P₃・P₅は平面形が特異であり、以上3基は柱穴とは異なる可能性もある。

炉：竪穴住居址の北寄りに地床炉を持つ。若干の掘り込みを持っていたらしく、幾分やわらかい焼土が10cmほどの厚さで円形に広がっている。

VII Gf-2 竪穴住居址出土遺物

遺物の出土はなかった。VII Gf-1 住居址の推定時期からは、縄文時代後期前葉後半より古い時期とのみ、判断される。

VII Gn 竪穴住居址 (第9図・第5表・写真図版5)

位置：N区の中央両西よりに位置する。北東に向かって緩やかに傾斜しており、傾斜の小さい平坦地に立地するピット群は、東に10mほど離れている。北西1mに第24号ピットがあるが、周辺に他の遺構は認められない。但し、配石は東に隣接して多く存在する。

検出：地表下35cmほどの基本層序II層中にて、遺物の散布と一部床面の露出により検出した。

形態・規模：北東一部のみ壁の立ち上がりを確認しており、明確な規模は不明だが、床面の広がり(硬くしまっている部分)からは、径6mほどの円形であったと推定される。

埋土：厚い場所でも10cmほどの確認に終わったが、基本層序I層土とII層土との混土の様相を示している。

壁：北東側に最高13cmの高さで確認されたのみである。全周の4分の1ほどであり、残りは不明であるが、立ち上がりからは外傾ぎみの壁であったと思われる。本遺構の時期が、周辺他遺構と大差ないものとする、本末掘り込みの大変浅い竪穴であったと推測される。

床：やや東に傾斜してほぼ平坦であり、全体に硬くしまっている。その硬い広がり床とした場合、床面積は、およそ32㎡前後と推定されている。

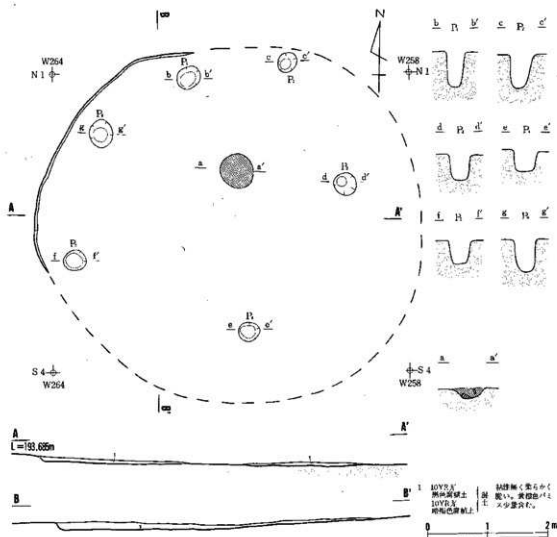
柱穴：6基検出している。いずれも垂直に掘り込まれた同規模のもので、床の下がっている東側では、それに応じて浅くなっている。埋土は、竪穴のものと同じである。P₁・P₅は、想定

した床の広がりからは大きく内側へ入り込む形となる。又、柱穴間距離は、 $P_1 \cdot P_2$ 間、 $P_2 \cdot P_3$ 間が1mほどなのに対し、 $P_3 \cdot P_4$ 間、 $P_4 \cdot P_5$ 間は1.3mと、南側が北側の倍近い間隔を持つ。

第5表 VII G_n 竪穴住居柱穴計測値一覧

	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6
口横(m)	30×24	26×20	23×20	25×23	23×20	34×23
深さ(m)	38	35	28	23	25	34

炉：中央部やや北寄りに地焼炉を持つ。38cm×34cmのやや楕円形のプランを持ち、床を10cm

第9図 VII G_n 竪穴住居址

ほど皿状に掘り穿めて炉としている。焼土は幾分固く、炭化粒が多く含まれる。

Ⅷ Gn 竪穴住居址出土遺物（第10図・写真図版20）

床面より多くの遺物を得ている。平行沈線を多用し、口縁には4ヶ1組の波状突起を4組持ち地文を持たない深鉢(1)、同じく平行沈線を多用しているが、LR原体による地文を持つもの(3)、口縁部は欠損して不明だが、体部は全体ナデであり無文としたもの(2)などがある。又、小片ではあるが、刺突を持つもの(4・5)、すり消しを持つ口縁片(6)なども出土している。11は吊りひもを通す穴があり、底部とすると不安定なため、図のような上下とし装飾品とみなしたが、ミニチュア土器ともとらえ得る。石器は小型の石斧の剝離片が1点出土している。

出土遺物より、縄文後期前葉の竪穴住居址と推定される。

2. 柱 穴 列

Ⅷ Go 柱穴列（第14図・第6表）

位置：調査区の中央やや南寄りの平坦地に位置する。Ⅷ Gn 竪穴住居址の東10mに当り、同住居址とは異なり、ピット・焼土群の域に入り込んでいる。

検出：Ⅱ層上位面を精査の後、掘り下げた段階でⅢ層上位面にて検出。

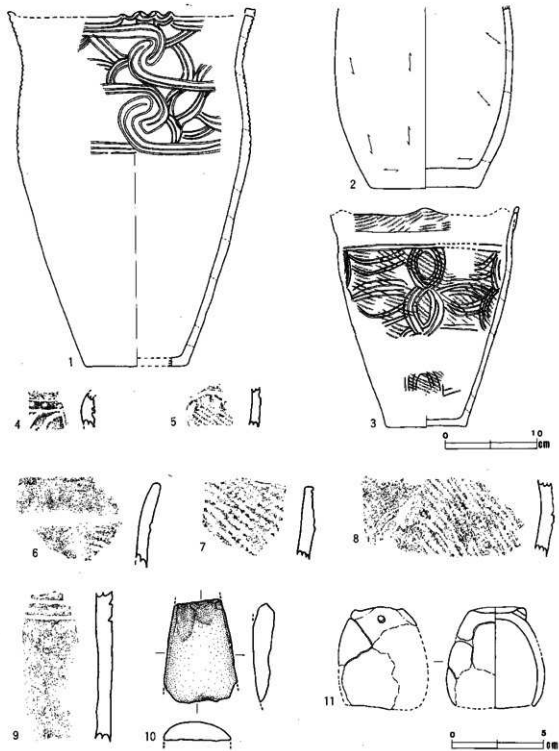
形態・規模：各柱穴外縁をつなぐ線からは、南北に長い楕円形が想定される。その場合、南北長5.4m、東西長4.5mほどと推定し得る。しかしながら、掘り下げの際残したⅠ層からのベルトには、竪穴らしき埋土や、壁・床面のセクションは何ら観察されない。だが柱穴の掘り込みはⅡ層以上から始まっていると考えられ、柱穴配置の持つ本来の意味は推定し得なかった。

第6表 Ⅷ Go 柱穴列各柱穴計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
口径(m)	20×18	19×16	19×17	47×36	20×20	17×16
深(m)	11	10	10	18	12	11

柱穴：6基礎確認された。P₁は周辺の攪乱が激しく、平面形が不明確だが、本来は口径25cm～20cm程度であったと思われる。埋土はⅡ層土である。柱間距離は1.1m～2mまでまちまちである。

焼土：柱穴範囲内に2基礎確認されたが、焼土1はⅢ層を掘り込む形で検出されており、又P₅に極端に近い。焼土2はⅡ層中位に浮く形になってしまい、両者とも本遺構にとまなうものとは考えにくい。



第10圖 ⅧG n 竪穴住居址出土遺物

3. 焼土遺構群

(1) 各焼土遺構 (第12・15~17・24回・第7・8表・写真図版10・15)

本調査区においては、N区にて58基、S区にて6基の独立した焼土遺構を検出した。個々の遺構記述は避け、観察表に一括して掲載する。焼土遺構の分類・群としての把握・他遺構との関連は後に記述する。

第7表 N区焼土遺構計測値一覧

焼土番号	長軸×短軸 (cm)	厚さ (cm)	形 態	備 考	焼土番号	長軸×短軸 (cm)	厚さ (cm)	形 態	備 考
1	28×28		円 形		30	172×80	12	不 定 形	縄文後期土器片出土
2	42×28	8	長 円 形		31	104×60	8	#	
3	56×40		不 定 形		32	84×54	8	円 形	
4	34×90	8	長 円 形		33	78×16		長 円 形	
5	106×72	16	ひょうたん	縄文後期前期土器片出土	34	6.62×32 9.48×44	10 6	不 定 形 円 形	
6	42×42		円 形		35	126×88	14	不 定 形	
7	88×68	12	#		36	108×100	24	円 形	縄文後期土器片出土
8	80×68	8	不 定 形	縄文後期前期土器片出土	37	28×30		不 定 形	
9	52×48	8	円 形		38	136×72	8	#	縄文後期土器片出土
10	46×36	6	#	縄文土器片出土	39	72×68	8	円 形	縄文後期土器片・不定形 白磁片
11	66×36	4	不 定 形		40	104×76	12	長 円 形	縄文後期土器片・弥生中 期土器片・すり石出土
12	52×48	16	円 形		41	98×54	4	円 形	
13	60×48	6	#		42	106×68	4	長 円 形	
14	60×36	12	長 円 形		43	124×96	10	#	土器片出土
15	112×72	14	#		44	70×62	16	円 形	縄文後期前期土器片出土
16	88×84	14	不 定 形		45	154×80	10	不 定 形	
17	48×44		#		46	96×42	4	#	土器片出土
18	48×56	8	#		47	44×40	4	円 形	
19	8.114×28 9.106×20	19 4	#	縄文土器片出土	48	92×60	4	不 定 形	縄文後期前期土器片出土
20	76×70	6	円 形		49	40×32		#	
21	118×56		不 定 形	縄文後期土器片出土	50	128×84	12	#	
22	76×76	8	#		51	92×48	10	長 円 形	土器片出土
23	68×64	12	円 形		52	64×56	12	円 形	縄文後期前期土器片出土
24	64×64		不 定 形		53	68×56	10	不 定 形	
25	72×52	8	長 円 形	すり石2点出土	54				
26	56×52	22	#		55				
27	56×36		不 定 形		56				
28	52×36	16	長 円 形		57	124×96	12	不 定 形	
29	(3.7) 28.38	4	長円形(3.7)		58				

第8表 S区焼土遺構計測値一覧

焼土番号	規模 (cm)	厚さ (cm)	形 態	備 考
1	121.5×81	9	長 円 形	
2	90×56	13.5	不 定 形	縄文後期前期の土器片出土
3	14×36	11.2	#	
4	40.5×27	6.7	#	
5	48.5×40.5	4.5	#	
6	236.5×111.5	18	#	

第9表 N区石厩炉計測値一覧

焼土番号	規模 (cm)	厚さ (cm)	形 態	備 考	No.	検 出 層 位	傾 配 度	風 向 (cm)	長軸方向	積 炭 方 法
1	121.5×81	9	長 円 形		1	目録上位		100×60	N31°W	掘り込みの壁に立石。
2	90×56	13.5	不 定 形	縄文後期前期の土器片出土	2	#	#	88×72	N0°	#
3	14×36	11.2	#		3	#	#	68×50	N20°E	立石の角隅方を敷ける。
4	40.5×27	6.7	#		4	#	#	83×40	N75°E	#
5	48.5×40.5	4.5	#		5	#	#	96×72	N23°W	土器を埋没し、蓋石。
6	236.5×111.5	18	#		6	#	#	55×50	N60°E	掘り込みの外に立石、蓋石。

(2) 出土遺物

少数ではあるが、遺構にともなって土器・石器が出土している焼土がある。これらは各焼土遺構ごとに、その出土遺物を以下に詳述したい。

1. N区焼土遺構出土遺物**第5号焼土遺構出土遺物 (第38図38・写真図版21)**

小型の深鉢土器1点が焼土直上の覆土より出土している。外面全体にLR原体による斜行縄文を施した後、その大部分を口縁部横方向、体部縦方向のヘラナデで消してしまっている。縄文時代後期の遺物と思われる。

第10号焼土遺構出土遺物 (第39図45・46・写真図版22)

小片が2点出土している。磨滅が激しく、施文や時期など不明である。45は焼土中より、46は焼土下より出土している。

第19号焼土遺構出土遺物 (第39図47・写真図版22)

LR縄文を、斜位・横位に施す小片1点が、焼土直上より出土している。時期は不明である。

第21号焼土遺構出土遺物 (第39図48・写真図版22)

深鉢形土器の底部近くと思われる破片が、焼土中より1点出土している。RLR複節の斜行縄文を施している。縄文時代後期の遺物と思われる。尚他にエノコログサと思われる種子(岩手県農業試験場鑑定)が8点出土している。

第22号焼土遺構出土遺物 (第39図49・50・写真図版22)

49は焼土中よりの出土で、RLR複節の地文に沈線文を施す小片。50はLrの撚糸文を施す小片であり、焼土直上の覆土中から出土している。縄文時代後期前葉の遺物と思われる。

第23号焼土遺構出土遺物 (第39図51・52・写真図版22)

2点とも焼土内から出土している。51はLRLの複節、52は直線及び弧状の沈線が何本か施されている。縄文時代後期前葉の遺物と思われる。

第25号焼土遺構出土遺物 (第39・40図53・54・写真図版22)

扁平円形の小さなすり石及び長円形の多少大きなものが2点、焼土内より出土している。両者ともほぼ全面がツルツルに使用されている。但し、54は片方の端部が破損している。敲打使用の為と思われる。時期等は不明である。

第30号焼土遺構出土遺物 (第40図55・写真図版22)

焼土中より R1 のより糸文を持つ深鉢の小片が出土している。縄文時代後期のものと思われる。

第36号焼土遺構出土遺物 (第40図56～59・写真図版22)

焼土中より土器の小片若干が出土している。57は山形突起を持つ口縁部に、沈線文が入る。56・59は同一個体で複合口縁を持ち、RL 原体の地文を沈線で区画し、すり消している。55は L のより糸文、58は刷目状の平行沈線文で曲線を描いている。いずれも焼土内からの出土。縄文時代後期前葉の遺物である。

第38号焼土遺構出土遺物 (第40図60・61・写真図版22)

焼土内より LR の斜行縄文を全面に施す深鉢の体部が出土している。(61)、60は L のより糸文を持つ小片で、これも焼土内からの出土である。縄文時代後期前葉の遺物と思われる。

第39号焼土遺構出土遺物 (第40図62～65・写真図版22)

口縁部横1条に Lr のより糸痕をめぐらすもの (62)、沈線と隆帯を用いている壺の胴部小片 (63)、LR 縄文を施す深鉢体部小片 (64) が出土している。又、鋭角を為す薄い縁片部に不規則で細かい剝離による調整で刃をつけた、不定形石器が1点出土している (65)。土器片は縄文時代後期前葉のものと思われるが、出土は焼土上、もしくは焼土周辺である。

第40号焼土遺構出土遺物 (第40図66・第41図67～72・写真図版22)

66は Lr のより糸文を全面に施した深鉢。口縁部は欠失している。67・69は同一個体であり、RL の斜行縄文を施す。68は平行沈線をめぐらす小片。70は連続刺突を持つ隆帯とボタン状貼付、沈線を施した体部片で、地文は LR の斜行縄文である。71は器面に LR 縄文を施し、底外面に1対1の網代痕を持つものである。他にすり石1点 (72) が出土している。すべて焼土中からの出土であり、時期は縄文時代後期前葉のものと思われるが、68の小片のみ弥生時代中期と推定される。

第43号焼土遺構出土遺物 (第41図73・写真図版22)

焼土内より深鉢の体部小片が1点のみ出土している。Lの附加糸縄文を施しており、時期は不明である。

第44号焼土遺構出土遺物 (第41図74・78・写真図版22)

焼土直上の覆土より、土器の小片2点が出土している。74はLR斜行縄文を地文とし、沈線文を描いている。78はR1のより糸文を施している。遺物は、縄文時代後期前葉のものと思われる。

第46号焼土遺構出土遺物 (第41図77・写真図版22)

焼土の覆土より土器の小片が出土している。外面を篋状工具で撫でており、その際の傷が沈線上にみえている。器形・時期等不明である。

第48号焼土遺構出土遺物 (第41図75・76・写真図版22)

焼土内より、小型の鉢の口縁部片1点(75)、深鉢体部片1点(76)が出土している。75はごく細く浅い沈線が縦に走り、76は格子状の沈線を持つ。いずれも縄文時代後期前葉のものと思われる。

第51号焼土遺構出土遺物 (第41図79・80・写真図版22)

焼土内より無文の府部小片1点(79)、LRの縄文を持つ体部片1点(80)が出土している。時期は不明である。

第52号焼土遺構出土遺物 (第41図81~84・写真図版22)

焼土内より土器の小片4点が出土しているが、いずれも胎土中に繊維を含む。81はLRの地文を持つが口縁部にはループ文が認められる。82-83はともに2段単節のLR原体による縄文を斜行させている。84は小片で明確には判別できないが、口縁部にRRの反擦りと思われる原体を用いて施文し、体部にRLの斜行縄文を施している。遺物の時期はすべて縄文時代前期前葉である。

2. S区焼土遺構出土遺物

第2号焼土遺構出土遺物 (第44・45図8~10・写真図版24)

焼土内・焼土直上の覆土より大型の深鉢が一括して出土(8)、同じく焼土内より、深鉢の体

部と思われる小片2点(9・10)が出土している。8の深鉢は、口縁に山形突起を持つが欠失部が多く、その数は不明である。ただ文様の単位数がパターンから6～7ヶと推定されるので、口縁突起も対応して同数であろうと思われる。文様は、2段単節のRLの原体を用いた斜行縄文を地文とし、口縁直下から体上半にかけて、平行沈線・蛇行沈線と沈線による小同心円とで構成される。底部は欠失している。内面全体でいねいなナデ。9は2段単節のLR、10は同RLの原体による斜行縄文とその上からの沈線文が施されている。3点とも、縄文時代後期前葉の遺物と思われる。

4. 炉 址

(1) 遺構 (第12図・第14図・第9表・写真図版6・7)

N区にて6基の石組炉を検出、調査している。個々の遺構記述は避け、観察表に一括して掲載する。炉の分類・群としての把握・他遺構との関連は、後に記述する。なお、S区からは検出されていない。

(2) 出土遺物 (第42図・写真図版23)

第1号炉址出土遺物 (第42図85・86・写真図版23)

深鉢2点の出土をみた。85は頸部から上を欠失している。LR原体を用いた斜行縄文に、浅く幅広い沈線とすり消しを加えている。沈線のはじには2ヶの凹みをつける。沈線・凹みとも、指で直接施したものと思われるが、大人の男性の指よりは幾分細めのものである。86は、R1のより糸圧痕で格子文を施している。85は炉内から、86は炉の直上からの出土である。時期的には85は縄文時代中期末から後期初頭のもの、86は後期前葉のものと推定される。

第5号炉址出土遺物 (第42図87～89・写真図版23)

87は深鉢の体～底部で、2段単節RLの原体を用いて施文している。底外面は笹の葉様の圧痕がある。88は87と同一個体の頸部片と思われるが、接合はしなかった。地文の上に沈線により文様を描いている。口縁部は欠失。89はともに出土した小片であり、沈線と浅い竹管刺突で施文されている。どちらも縄文時代後期前葉のものと思われる。

5. 土器埋設遺構群

(1) 遺構 (第2図・第12図)

N区に3基・S区にて3基の計6基が確認・調査されている。それらは各離れており、位置的には相関的なものは見出し得ない。各遺構に関し、以下に記述する。

N区

第1号土器埋設遺構 (第14図・写真図版7)

位置：N区の北西に位置する。最も近接する他遺構は、南2mに第16号焼土、北西3mに第10号ピットがある。いずれも本遺構と同一面(基本層序第II層上位面)における検出であるが、それ以上に時期・性格等本遺構との関連は見出し難い。又、配石との関連は、北西に4m離れて、VIII Gf 配石およびそれにとりまわるとされる遺物群があるが、本遺構とは関連づけ得ない。

形態等：径30cmほどの円形のピットを掘り、土器を正立させそのまま埋め戻したものである。ピットの深さは36cmを測り、土器底部はピット底面に直接乗っている。土器周辺5cmほどに、ピットの埋土・いうなれば本遺構の掘方が、20cmほどの深さまで観察される。土器周辺埋土は基本層序のII層上位土であり、埋め戻しによるものと思われるが、埋設された土器内の埋土はそれとは異なり、より黒色の土が自然堆積したものである。これは基本層序I層の土に近似しており、埋設当初は土器内は上が入っていなかったものと推定される。

第2号土器埋設遺構 (第14図・写真図版8)

位置：N区台地の南東部・IX Hb 4グリッドにある。本遺構の周辺には他の遺構が多くあり、第3・4号フラスコピット、第43・48～50ピット、第44・45・46・48号焼土などが5m以内の距離に散在する。但し、いずれも本遺構との関連は不明である。又、近くには配石がほとんどなく、遺物も少ない。小規模に遺物が集中する地点が北・東・西の三方を囲むものの、いずれも距離は5m以上と離れており、やはり本遺構との関連は不明である。

形態等：大きくピットを掘り込んで、その中に埋置する形をとっている。ピットの平面形は卵形を呈し、81cm×70cmの規模を持つ。深さは36cmを測る。ピットを半分近く埋め戻してから土器を正立に埋置したものであるが、ピットの埋土の上半部(1層十)は自然堆積にも見え、土器の埋設手順を正確には推定し難い。又、土器内の土も同じI層土である。土器は、ピットの底から10cm上に埋置されており、底部付近の欠失が多い。損壊土器の、ピット内への投

げ込み等の可能性も否定はできない。

第3号土器埋設遺構 (第14図・写真図版3)

本遺構は第5号石組炉と一体のものである。石組炉の項では個々の遺構の記述は省略しており、本遺構のみ、ここに詳述する。又、第5号石組炉出土遺物として掲載・記述したのからは、図版作成時の手ちがいから木埋設土器がもれており、併せて詳述することにする。

位置：本遺構は、N区台地東寄りの中央部に位置する。グリッド名は、Ⅷ Hn 1である。接するように、東に第2号フラスコピットが存在するが、本遺構は基本層序第Ⅱ層上位面を検出面とするのに対し、同フラスコピットは、同層下位面を検出面としている。北東1mには第40号ピット・北3mに第42号焼土が、本遺構と同一面上に検出されている。又、配石は北西5mにⅧ Hi-2配石が存在し、やはりこれも同一検出面であり、配石全体のあり方、本遺構の構成石の構造等から、本遺構自体配石の一部とも捉え得る。

形態：遺構は東西80cm・南北50cmほどの楕円形ピットの西半に土器が埋設され、東半は焼土が埋まっている。焼土の広がりには56cm×50cmで東西に長く、焼土部の深さは15cm、焼土厚は8cmほどである。埋上からは一体のものかどうかあまいともとれるが、焼土の広がりや土器の加熱状態などから、一体のものと判断した。土器埋設部のピットの深さは21cm。上に配された石は、ピットのへりにただ並置されただけのものである。

S区

第1号土器埋設遺構 (第24図)

位置：東西に伸びるS区の、西側山沿い(南寄り)緩斜面にのる。グリッド名はX Hcである。周辺には、同一面上(基本層序Ⅱ層上位面)で多くの焼土やピットが検出されている。

形態：平面楕円で長径70cm・短径57cm・深さ26cmのピットの中心に、土器を正立斜めに埋設してある。ピットの北壁は、一部木炭による攪乱を受けている。土器はピット床面に接してはおらず、4cm～5cmほど浮いている。

第2号土器埋設遺構 (第24図)

位置：第1号土器埋設遺構の西5mほどに位置する。やはり基本層序Ⅱ層上位面における検出である。

形態：第1号土器埋設遺構と同様の形態を示す。ピットは長径70cm・短径62cm・深さ20cmほどである。土器は、ピットの床上10cmほどの高さに横位に浮いており、又、草根による攪乱が

多く埋土の堆積が自然のものか人為的なものか、明確にはし得なかった。第1号土器埋設遺構や、本調査区第20・21号ピットなど人為堆積の埋土を持つ遺構と類似する点が多いことから、本項で取り上げた。

(2) 出土遺物

1. N区土器埋設遺構出土遺物

第1号土器埋設遺構出土遺物 (第43図90・91・写真図版23)

90は無文の深鉢であり、内外面ともヘラ状の工具でていねいになでである。91はLRの原体を用いて施文した深鉢の体部破片。断定はし得ないが、ともに縄文時代後期前葉の遺物である可能性が大きい。

第2号土器埋設遺構出土遺物 (第43図92・写真図版23)

口縁に山形突起を6ヶ持つ深鉢である。口縁部から頸部にかけては、竹管刺突を持つボタン状貼付、LRの押圧縄文および沈線を用いて、口縁突起に対応する単位で施文されている。体部はLR斜行縄文を地文とし、上半にのみ平行沈線とすり消しを用いて、これもほぼ対応する単位で施文されている。内面はていねいな横ナゲ。底部外面に笹の葉様の圧痕が認められる。縄文時代後期前葉のものと考えられる。

第3号土器埋設遺構出土遺物 (第43図93・写真図版23)

口縁に山形突起を5ヶ持つ深鉢。口縁部から頸部にかけて、突起に対応した文様を平行沈線を用いて描く。体部はLR原体を用いた斜行縄文。内面はていねいになでている。縄文時代後期前葉のものと思われる。

2. S区土器埋設遺構出土遺物

第1号土器埋設遺構出土遺物 (第45図11・写真図版24)

平行口縁と思われる深鉢であり、LRの原体による斜行縄文を全面に施している。縄文時代後期前葉の遺物と思われる。

第2号土器埋設遺構出土遺物 (第45図12・写真図版24)

口縁に7ヶの山形突起を持ち、それに対応して頸部から下に、平行沈線とすり消し、竹管刺

突の文様が描かれている。地文は2段単節 RL 斜行縄文。縄文時代後期前葉のものと思われる。

第3号土器埋設遺構出土遺物（第45図13・写真図版24）

欠失部が多く断定はできないが、体部文様のパターンから、口縁部は5つの山形突起を持つものと思われる。口縁部・体部上半部には沈線で区画されたすり消し文様が入る。地文は2段単節 LR 斜行縄文。内面は縦方向にいいいになでであり、底外面には笹の葉様の圧痕を持つ。縄文時代後期前葉のものと考えられる。

6. ビット群

(1) 遺構（第13・19～23・25～27図・第10～15表・写真図版11～14・16）

本調査区では、多数のビットが検出・調査されている。内わけは、N区小ビット56基・同フラスコビット4基・同陥し穴状遺構3基、又S区は小ビット35基・陥し穴状遺構2基・溝状遺構1基である。個々の遺構の記述は避け、観察表に一括して掲載する。

(2) 出土遺物

N区

第7号ビット出土遺物（第36図1・写真図版21）

細かい縄文を施す深鉢の口縁部片が埋土中より1点出土している。口縁直下にて原体を横に転がし、以下は縦方向に転がしている。

時期は不明である。

第10号ビット出土遺物（第36図2～4・写真図版21）

2と4は同一個体と思われる。なでで無文とした口縁から頸部に平行沈線を用いて施文している。平行沈線の交点にはボタン状の貼付けを持つ。体部地文はRL原体による斜行縄文である。3はLのより糸を施文した体部片である。2・4はビット底部、3は埋土中位からの出土であった。

出土遺物から、縄文後期前葉のビットと考えられる。

第11号ビット出土遺物 (第36図5・写真図版21)

土偶の顔面のみ出土している。扁平にした顔面に貼付けにより目鼻をあらわし、鼻孔を意味する刺突が施されている。首から下は欠損。縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての遺物と思われるが、ビットの埋土中位からの出土であり、遺構の年代決定の参考になる。

第17号ビット出土遺物 (第36図6・写真図版21)

鉢の口縁部片である。LR 2段単節の縄文を地文とし、平行沈線を施す。埋土中位からの出土である。縄文時代後期中葉の遺物と思われる。

第26号ビット出土遺物 (第36図7・8・写真図版21)

ビットの埋土から、隆帯に刻目を持ち、何条もの平行沈線を斜行させた施文をもつ小片(7)、およびLR 原体による斜行縄文と沈線区画によるすり消文様をもつ小片(8)が出土している。出土遺物は縄文時代後期前葉のものである。

第39号ビット出土遺物 (第36図9・写真図版21)

埋土から石匙が1点出土した。縦型の左右両縁に片刃を施している。刃部加工は、どちらも端部から基部へ向かっての順で施されている。

第40号ビット出土遺物 (第36図10~12・写真図版21)

山形突起を持ち、内湾した口縁を有する深鉢の破片(10)は頸部より下にRL 縄文の地文と沈線による文様がみられる。11はボタン状貼付と平行沈線、12はLR 斜行縄文のみを施した。どちらも深鉢の口縁部片である。いずれも縄文時代後期前葉の土器片であるが、すべて埋土中位より上で出土している。

第43号ビット出土遺物 (第36図13~16・写真図版21)

深鉢の小片が出土している。口縁部に平行沈線をめぐらせるもの(13・15・16) LR 原体による縄文と平行沈線で施文し、一部にすり消しも用いるもの(14)などである。いずれも縄文時代後期前葉のものと思われるが、すべて埋土上位よりの出土である。

第44号ビット出土遺物 (第36図17~19・写真図版21)

隆帯に刻目を有するもの(17)、沈線で区画し、すり消しを施すもの(19)がある。18は19と同一個体の破片と思われる。地文はすべて2段単節のRL 原体を用いている。縄文後期前葉の遺

物であるが、すべて埋土中位より出土している。

第47号ビット出土遺物 (第37図20・21・写真図版21)

20は深鉢の体部片と思われ、2段単節のLR原体による縄文が、全面に施されている。21は付け高台を持つ鉢で、外面縦方向、内面横方向に、いずれもへら状の工具でなでて無文としている。縄文時代後期前葉の遺物であり、ビットの埋土中位より出土している。

第50号ビット出土遺物 (第37図22~25・写真図版21)

台付の小鉢1点と、深鉢の小片3点が出土している。台付鉢(22)はLrの無節の原体によって施文されている深鉢片は23・25がLRの斜行縄文のみであり、24はRLの地文に沈線文を施している。いずれも縄文時代後期前葉の遺物と思われるが、台付鉢は埋土上位、他は中~下位の出土である。

第51号ビット出土遺物 (第37図26)

大型の深鉢と思われる上器の底部のみ出土している。LR原体による斜行縄文が施文されており、底外面には1対1に網んだ網代痕が残る。これも縄文時代後期の遺物と思われる。ビットの埋土下位より出土している。

第54号ビット出土遺物 (第37図27)

RIの単節の原体を用いてより糸疋痕を施した小片が出土している。時期は不明。ビット下位からの出土である。

第2号フラスコビット出土遺物 (第38図28~31・写真図版21)

縄文のみを施した深鉢口縁部片2点(28・31)と沈線文を施すもの2点(29・30)が出土している。前者2点はいずれも2段単節のLRの原体を用いており、28は山形突起を持つ。29はRLの、30はLRの原体を地文に用いている。いずれも縄文時代後期前葉のものと思われるが、ビットの埋土上層からの出土である。

第4号フラスコビット出土遺物 (第38図32~37・写真図版21)

小片のみの出土である。沈線と撚糸(32)、撚糸文のみのもの(35)、沈線と縄文(34)、縄文のみのもの(33)、沈線文のみのもの(36)、無文のもの(37)がある。より糸の原体は2点ともR、縄文の原体は33がLR、34がRLである。時期はいずれも縄文時代後期前葉のものと思わ

れるが、32は埋土上位、33～36は中位、37は下位からの出土である。

S 区

第1号ピット出土遺物 (第44図3・写真図版24)

2段単節のLR原体を用いた斜行縄文を施す鉢と思われる体部小片が1点のみ出土している。時期は不明。

第8号ピット出土遺物 (第44図1・2・写真図版24)

深鉢と思われる体部の小片2点が出土している。1はRfのより糸文を持つ底部近く。2はLRの縄文を持つものである。内面はどちらもていねいになでられている。時期の断定はできないが、縄文時代後期前葉か、それに近い時期と推定される。

第9号ピット出土遺物 (第44図4・写真図版24)

2段単節のLR原体を用いた斜行縄文を施す鉢と思われる体部小片が1点のみ出土している。時期は不明。

第32号ピット出土遺物 (第44図6・写真図版24)

2段単節のLR原体を用いた斜行縄文を施す鉢と思われる体部小片が1点のみ出土している。時期は不明。

第34号ピット出土遺物 (第44図5・7・写真図版24)

2段単節のRL原体を用いた斜行縄文を地文とし、沈線文を施した鉢の体部と思われる小片が1点(5)、および同じくLRの原体を用いた底部近くの小片1点(7)が出土している。縄文時代後期前葉のものと思われる。

7. 配石遺構 (第28図・写真図版17・18)

本調査区のN区において、人為的な礫の配置が多く見られ、これを一括して配石遺構と呼んだ。全体配置の中から明確な単位として分離し得るものはほとんど無く、第29図から第35図まで掲載したのも礫が比較的濃密に配されている部分と言うほどの意味である。なお、他遺構

との関連は後に記述する。

位置：N区全域に広がっている。但し、北側及び中央部、それに南東側の台地の出っ張りにてはごく薄くなり、明確では無いが、北北東に開いた馬蹄形を呈すと云える。東西40m・南北35mほどの範囲である。

検出：基本層序のI層を除去している段階で礫の露頭が見られ始め、配石のほとんどはII層上位面にて完全に露出する。

VIII Gf 配石 (第29図)

各単位として区分した配石の中で、大きい礫(30cm以上)を最も多用する配石である。南北二グループに分け得るが、不明確なので一括している。台地の北西部にあって、北東から南西に礫が配され、馬蹄形の西側開口部を構成している。付近にはVIII Gf 竪穴住居址、焼土遺構、ピットなどが散在するが、いずれの遺構とも直接的には関連が無い。

VIII Gh 配石 (第30図)

台地北側の、馬蹄形開口部に当る礫希薄地帯に位置するが、やはり北東から南西に礫が配され、それに焼土(第12号焼土)と石刀(第98図134)が絡んでいる。近接する礫底と、石刀・焼土が大体同レベルにあり、ほぼ同一時期のものと考えられる。しかし、礫・焼土・石刀を関連づけるそれ以上の根拠は認められなかった。近接する遺構は、他には無い。

VIII Gj 配石 (第30図)

台地東側にあって、VIII Gf 配石に平行し、やはり北東から南西に礫が配されている。小礫(10~20cm)が多く、単位としてあまり明確な配石では無い。付近に他の遺構が存在しない遺構の空白地域である。

VIII Gk 配石 (第31図)

これも台地東側にあって、前述VIII Gf・VIII Gj 配石と平行し、北東から南西に礫が配されている。但し、南北に並べられた小礫群が幾つかあり、それらの群が並んでいると見ることもできる。VIII Gj 配石同様、周辺に他の遺構が存在しない地域にある。

IX Gd-1 配石 (第31図)

台地のやや南西よりあって、馬蹄形の屈曲部を構成している。散在する大きい礫と、南北に並ぶ小礫群により構成されるが、あまり明確なものでは無い。周辺には焼土遺構・ピットが

散在するが、本遺構との関連は不明である。

IX Gd-2 配石 (第32図)

台地の南西よりあって、馬蹄形の屈曲部の先端を構成している。北東から南西に礫が配され、長2.5mほどの弧を描いており、比較的明確な単位と言える。周辺には、本遺構と同一検出面上に焼土遺構が散在するが、本遺構との関連は不明である。

VIII Hi-1 配石 (第32図)

台地の北半東よりに位置し、馬蹄形の開口部を構成する。やはり北東から南西に礫が配される。近接する他遺構は無く、これも空白地域に存在している。

VIII Hi-2 配石 (第33図)

台地東寄りに位置し、馬蹄形の開口部を構成している。70cm角ほどの大礫のまわりに小礫が散在する形をとっている。近接する他遺構は無く、本遺構も遺構の空白地域にある。

VIII Ho 配石 (第33図)

台地の東へりに乗り、斜面に沿って北西から南東へ小礫が並び、他の配石からも、その他の遺構からも遠く離れている。

VIII Hm 配石 (第34図)

台地の中央東寄りにあって、馬蹄形の一部を構成する。焼土に絡むように礫が散在しており、近接する遺構は他には無い。礫の配置自体は、ほぼ無秩序なものと言える。

VIII Hn 配石 (第34図)

前述VIII Imの東6mにあって、やはり馬蹄形の一部を構成する。配石の中央に焼土を持ち、北西に埋め塞を持つ事から、土器埋設石組炉とし、遺構の構造等は埋設土器遺構で詳述したが、石は配されたのみで埋置されておらず、配石に伴うものとしてここに再掲した。

IX Hb 配石 (第34図)

台地の南東寄りにあり、馬蹄形からは多少はずれて立地している。礫の配置も東西方向であり、他とは異なった形態を示す。南西1mに焼土遺構が存在するが、本遺跡との関連は不明である。

IX Hf 配石 (第35図)

台地の南端東寄りに位置し、馬蹄形からは大きくはずれている。小礫の集まりを中心として、礫が散在している。本遺構の南西1mに、やはり焼土遺構が存在するが、本遺構との関連は不明である。

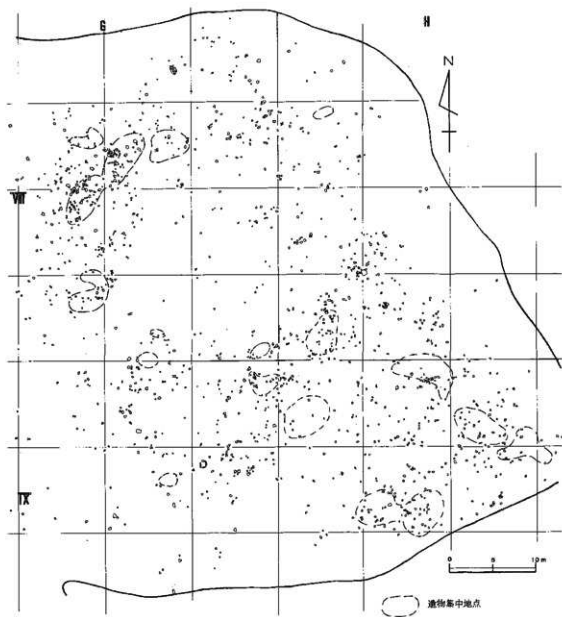
IX Hg 配石 (第35図)

台地の南東端に位置し、これも馬蹄形からは大きくはずれている。礫は北東から南西、もしくは北から南に配されている。本遺構の周辺には、他の遺構は存在しない。

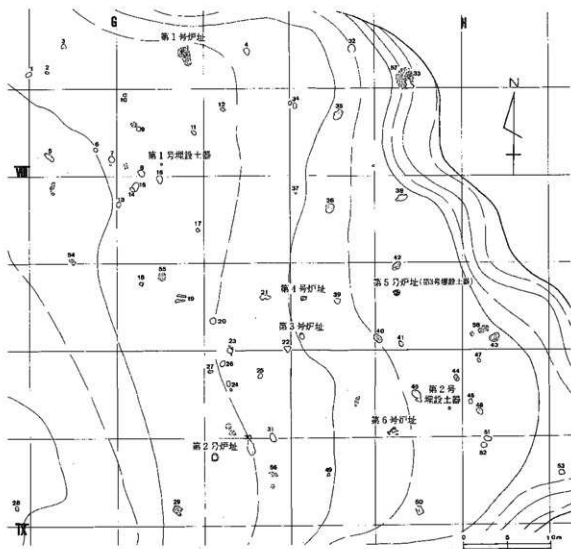
8. IX Ib 堆積礫 (第46・47図)

N区の南東・S区の北の沢中に、自然の営力によると思われる、比高1mほどの小丘を成す礫の堆積があった。表土を除去した状態で、全面の炭化粒子と一部に焼土粒も多く認められ、土器片も散在した事から断ち割って確認する事となった。その結果、2000を越す小礫の自然堆積層と判明した。

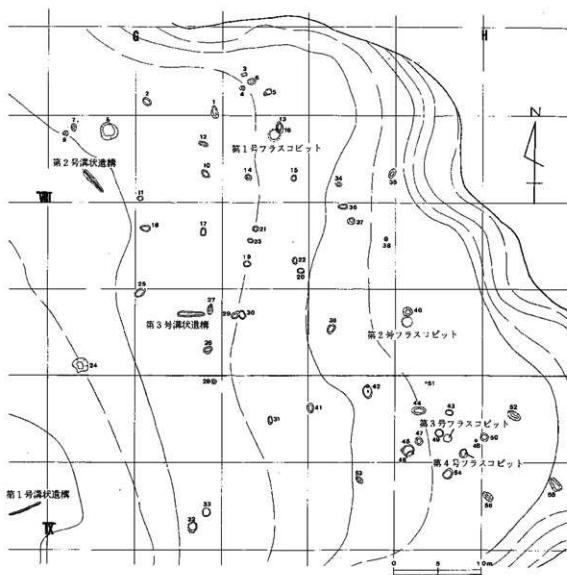
出土遺物：土器小片が多く出土したが、小片で磨滅も激しく、特徴のわかりやすいものを掲載している。それらは縄文時代後期前葉と思われるもの(2・3)から、晩期中葉と思われるもの(1・4)まで混在しており、本遺跡4区の遺物の出土の仕方とよく似ている。おそらく、流れ込んできた遺物と思われる。



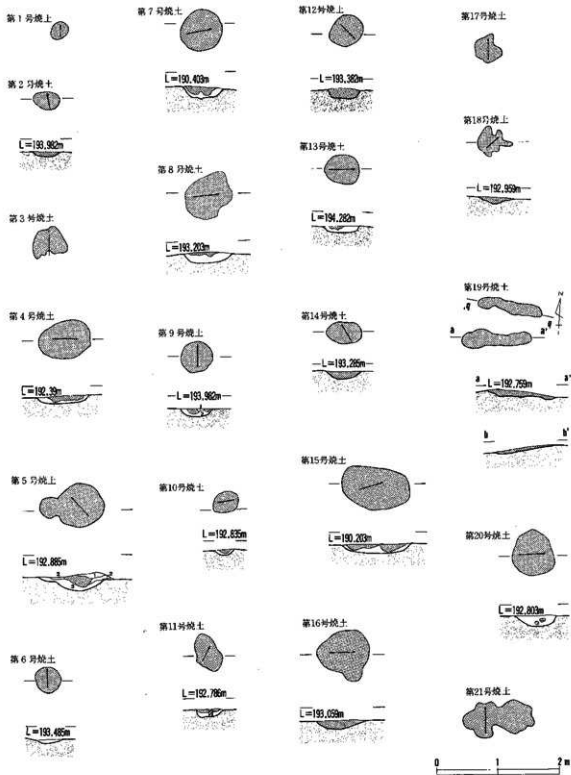
第11図 配石及び遺物集中地点



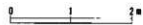
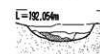
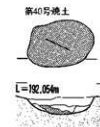
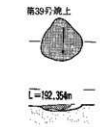
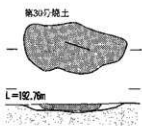
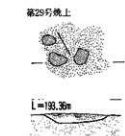
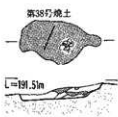
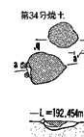
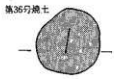
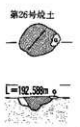
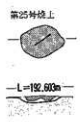
第12图 N区烧土遗構



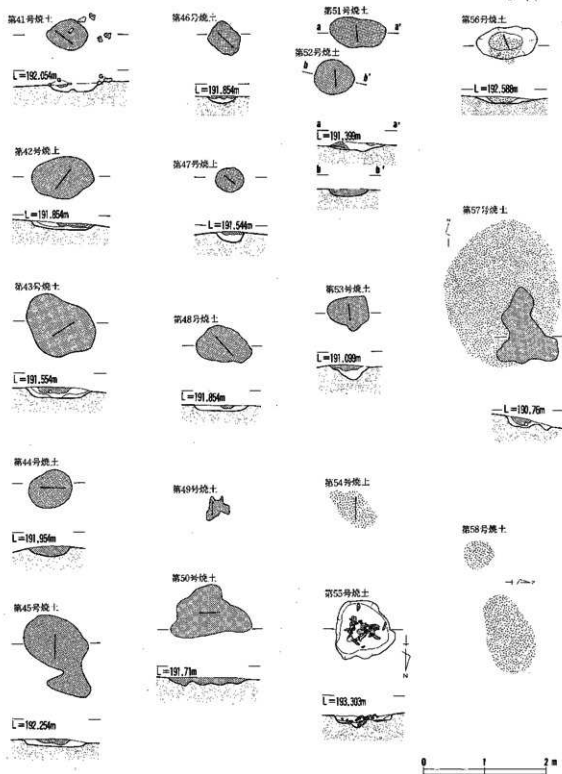
第13図 N区ビット



第15图 N区烧土遗構(1)

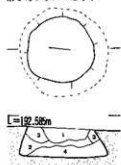


第16图 N区烧土遗物(2)



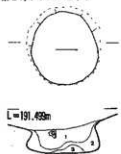
第17图 N区坑土遗构(3)

第1号フラスコピット



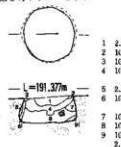
- 1 目層と目層の底土。
- 2 目層と目層の底土。
目層が多い。
- 3 目層と目層の底土。1より目層が多く2より少ない。
- 4 10YR列
暗褐色土。

第2号フラスコピット



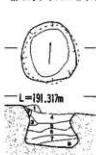
- 1 目層。
- 2 目層と目・IV層の底土。
目・目層が少ない。
- 3 目層と目・目層の底土。
目層が少ない。

第3号フラスコピット



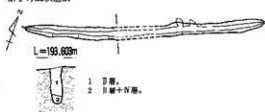
- 1 2.5YR列黄色火山灰土 目層。柔らかい。
- 2 10YR列褐色土 極めて柔らかい。
- 3 10YR列灰褐色土 極めて柔らかい。
- 4 10YR列暗褐色土 極めて柔らかい。
1が少し入る。
- 5 2.5Y列内火山灰土 極めて柔らかい。
- 6 10YR列暗褐色土 極めて柔らかい。
1が少し入る。
- 7 10YR列暗褐色土 極めて柔らかい。
- 8 10YR列褐色土 極めて柔らかい。
- 9 10YR列褐色土 極めて柔らかい。
2.5Y列黄色火山灰土

第4号フラスコピット



- 1 10YR列褐色土 粘性なく柔らかく締まりなし。白色鉱物粒・極小褐色パミス少量含む。目層。柔らかい。褐色パミス少量を含む。
- 2 10YR列黄褐色火山灰土
- 3 10YR列暗褐色土 2が少量入る。強は1と同じ。
- 4 10YR列暗褐色火山灰土 目層。10YR列暗褐色土
- 5 10YR列暗褐色土 2が3より入る。
- 6 10YR列暗褐色火山灰土 目層。4より柔らかい。褐色パミスを全伴に含む。
- 7 目層。6より黄色帯が強い。
- 8 10YR列褐色土 1・3と同じ。

第1号溝状遺構

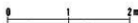


- 1 目層。
- 2 目層+IV層。

第2号溝状遺構

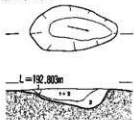


- 1 10YR列暗褐色土 目層
- 2 目層
- 3 10YR列暗褐色土 目層 1より目層が多い。
- 4 10YR列暗褐色土 目層 1より目層が少ない。
- 5 10YR列暗褐色土 目層 1より目層が多い。
- 6 IV層 目層が少ない。
- 7 目層 目層 6より目層が多い。



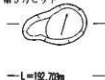
第18回 N区フラスコピット・溝状遺構

第1号ピット



- 1 10YR列 粘性なく柔らかく脆い、黄褐色パミス・白色結核物を微量含む。
- 2 10YR列 1より柔らかい。他、黒褐色土 1と同じ。

第5号ピット



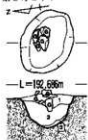
- 1 10YR列 粘性なし。黄褐色暗褐色～黒色土 パミスを含む。

第9号ピット



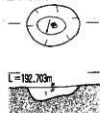
- 1 基本層序7層と同じ。
- 2 基本層序7層と同じ。

第2号ピット



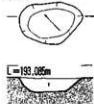
- 1 10YR列 黄褐色土 粘性強い。黄褐色パミスを微量含む。
- 2 10YR列 黄褐色土 10YR列 黄褐色土がブロック状に入る。他は1と同じ。
- 3 2.5VN オリーブ褐色土 10YR列 黄褐色土が塊状に入る。1・2より柔らかい。

第6号ピット



- 1 10YR列 粘性なし。黄褐色パミスを含む。

第10号ピット



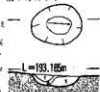
- 1 10YR列 暗褐色土 10YR列 黄褐色土 10YR列 黄褐色土
- ブロック状に侵入 全体に柔らかい。パミスを少量含む。

第3号ピット



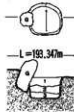
- 1 10YR列 粘性なし。暗褐色～黒色土 黄褐色パミスを含む。

第7号ピット



- 1 10YR列 黒色土 粘性なし。黄褐色パミス少量含む。
- 2 10YR列 黒色土 1と同じ。
- 3 10YR列 黄褐色火山灰土 土

第11号ピット



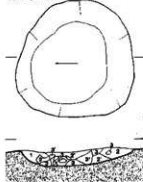
- 1 10YR列 暗褐色土 10YR列 黄褐色土
 - 2 10YR列 暗褐色土 10YR列 黄褐色土
 - 3 1と同じだが10YR列 黄褐色土が塊状になる。
- 塊状粉砕があり、柔らかい。黄褐色パミスを少量含む。 1と同じ。 土人 1と同じ。

第4号ピット



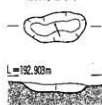
- 1 10YR列 粘性なし。暗褐色～黒色土 黄褐色パミスを含む。

第8号ピット



- 1 10YR列 黒褐色土 極めて柔らかい。黄褐色パミスを少量含む。
- 2 10YR列 黄褐色土 1と同じ。
- 3 10YR列 黄褐色土 1と同じ。
- 4 10YR列 黄褐色火山灰土 土
- 5 10YR列 黄褐色火山灰土 土

第12号ピット

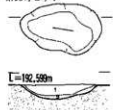


- 1 10YR列 粘性なく柔らかく脆い。暗褐色土 黄褐色パミス・白色結核物を微量含む。

第19図 N区ピット(1)



第13号ピット



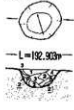
- 1 10YR5/1 粘性なく柔らかく脆い。黄褐色パリス・白色細砂粒を微量含む。
- 2 10YR5/1-1 1より柔らかい。黒褐色土 地は1と同じ。

第17号ピット



- 1 10YR5/1 粘性なく柔らかい。細粒の腐植粒を少量含む。
- 2 10YR5/1 粘性なく柔らかく脆い。パリス少量含む。
- 3 10YR5/黒色土 粘土

第21号ピット



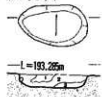
- 1 10YR5/1 粘性なく極めて柔らかく脆い。黒褐色腐植土
- 2 2.5Y/1 粘性なく極めて柔らかく脆い。黒褐色腐植土
- 3 10YR5/1 粘性なく極めて柔らかく脆い。黄褐色パリスを多量に含む。
- 4 10YR5/1 黒褐色腐植土
- 5 2.5Y/1 粘性なく極めて柔らかく脆い。黄褐色パリスを微量含む。
- 6 2.5Y/1 黒褐色腐植土

第14号ピット



- 1 10YR5/1 粘性なく柔らかく脆い。黄褐色パリス・白色腐植粒を微量含む。
- 2 10YR5/1-1 1より柔らかい。黄褐色腐植土 地は1と同じ。

第18号ピット



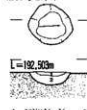
- 1 7.5YR5/1-1 粘性なく柔らかく脆い。腐植粒が小さい。
- 2 7.5YR5/1 1と同じ。
- 3 7.5YR5/1 1・2より粘性を黒褐色腐植土より硬い。

第22号ピット



- 1 10YR5/1 粘性なく柔らかく脆い。黄褐色パリス・白色腐植粒を微量含む。
- 2 10YR5/1-1 1より柔らかい。黒褐色土 地は1と同じ。

第15号ピット



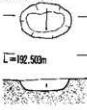
- 1 10YR5/1-1 粘性なく柔らかく脆い。黄褐色パリス・白色細砂粒を微量含む。
- 2 10YR5/1-1 粘土 地は1と同じ。

第19号ピット



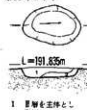
- 1 10YR5/黄褐色土 粘土 粘分粘性があり柔らかい。腐化粒・パリスを少量含む。
- 2 10YR5/黒褐色土
- 3 10YR5/黒色土

第23号ピット



- 1 10YR5/黄褐色土 粘土 10YR5/1-1 黄褐色土

第16号ピット



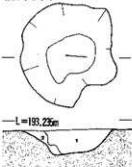
- 1 互層を主体とし互層との腐土。
- 2 互層を主体とし互層との腐土。

第20号ピット



- 1 10YR5/ 粘性なく極めて硬い。白色細砂粒を少量含む。
- 2 2.5Y/1 1より柔らかい。全体均に硬い。黄褐色パリス・腐化粒を微量含む。
- 3 10YR5/ 粘土 粘分粘性より柔らかい。腐化粒を全体に少量。黄褐色パリスを微量含む。3から腐化粒をのぞいたもの。
- 4 10YR5/ 粘土 粘分粘性があり柔らかい。
- 5 2.5Y/1 極めて柔らかい。
- 6 2.5Y/1 極めて硬い。
- 7 2.5Y/1 柔らかい。
- 8 2.5Y/1 黒褐色腐植土

第24号ピット



- 1 互層と同じ。
- 2 互層と同じ。



第20図 N区ピット(2)

第25号ピット



L=192.25m



- 1 5YR/1- 柔らかく湿りあり。赤
- 2 5YR/1- 褐色赤土粒を少量含む。7.5
- 黒褐色土 YR/7暗褐色土が入る。
- 2 10YR/5- 1より柔らかく湿り少ない。
- 黒褐色土

第29号ピット



L=192.803m



- 1 10YR/5- 黄褐色腐植土
- 2 10YR/5- 暗褐色腐植土
- 3 10YR/5- 赤褐色腐植土
- 4 10YR/5- 黒褐色腐植土

粘性なく柔らかく脆い。黄褐色パミスを少量含む。黄褐色パミスを多量に含む。

第34号ピット



L=192.039m



- 1 10YR/5暗褐色土 粘性なく柔らかく脆い。
- 10YR/5-1 黄褐色パミス・白色腐植土 粒を少量含む。

第26号ピット



L=193.003m



- 1 10YR/5- 黒褐色腐植土
- 2 10YR/5- 暗褐色腐植土
- 3 10YR/5- 黒褐色腐植土

第30号ピット



L=192.803m



- 粘性なく柔らかく脆い。
- 粉状パミスが多く混合。
- 粘性なく柔らかく脆い。

第31号ピット



L=192.35m



- 1 黒褐色腐植土 粘性なく柔らかく脆い。黄褐色パミス・炭化粒子を含む。
- 2 黒腐土。黒腐土が少量混入。柔らかく脆い。炭化粒子・焼土粒子を少量混入。
- 3 黒腐土に焼土がブロック状に入る。粘性なく柔らかく脆い。炭化粒子を含む。
- 4 2より黒腐土の量が少な。焼土粒を少量混入。

第35号ピット



L=192.154m



- 1 10YR/5暗褐色土 + 1 10YR/5黄褐色土 + 1 土

第36号ピット



L=192.199m



- 1 5YR/5- 黒褐色土 粘性なく硬い。白色腐植土を少量含む。

第27号ピット

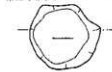


L=192.803m



- 1 10YR/5-1 柔らかく脆い。黄褐色パミス・黒褐色土 白色腐植粒を少量含む。

第32号ピット



L=192.76m



- 1 II層。
- 2 II・III・IV層の腐土。

第28号ピット



L=192.81m



- 1 7.5YR/5- 粘性なく脆く柔らかい。II層の腐土がブロック状に入る。焼土粒子を少量含む。
- 2 7.5YR/5- 粘性なく脆く柔らかい。焼土粒子を少量含む。

第33号ピット



L=192.76m



- 1 II層。極めて柔らかい。
- 2 III層+IV層(少量) 極めて柔らかい。

第37号ピット



L=192.059m



- 1 7.5YR/5- 硬く脆く締まっている。白色腐植土 粒下・小砂粒を少量含む。
- 2 5YR/5- 1より柔らかくしっとりして黒褐色土 いる。白色腐植粒を少量含む。



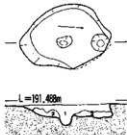
第21図 N区ピット(3)

第38号ビット



- 1 7.5YR 弱粘性なく黄黒褐色土 少ない。

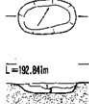
第42号ビット



- 1 10YR 黄褐色土
10YR 黄褐色土
黄土
2 10YR 黄褐色土
10YR 黄褐色土
黄土

幾分粘性があり柔らかい。黄褐色パリスを少量含む。極めて柔らかく軽い。V層十層等の層。

第46号ビット



- 1 10YR 弱粘性黄褐色土 幾分粘性あり、やや柔らかい。上部に軽硬パリスを含む。
2 10YR 弱粘性黄褐色土 幾分粘性あり柔らかい。1部に1が入る。白色粘砂・粘土粒子混入。

第39号ビット



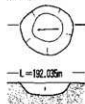
- 1 10YR 弱粘性土 粘りなし。黄褐色
10YR 弱粘性土 パリスを全体に少量に含む。

第43号ビット



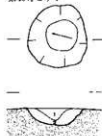
- 1 10YR 粘りなく比較的硬く締まっている。極小のパリスを少量含む。

第47号ビット



- 1 10YR 弱粘性土 粘りなく締まっている。全体に
10YR 弱粘性土 酸化粒子を含む。
10YR 黄褐色土

第40号ビット



- 1 10YR 弱粘性があり、極めて柔らかく黄褐色土。粘土の黄褐色パリスを少量含む。
2 10YR 粘りなく締まっている。極めて柔らかく黄褐色土。黄褐色パリスを少量含む。

第44号ビット



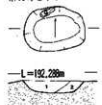
- 1 10YR 粘りなく柔らかく軽い。黄褐色パリスを少量含む。
2 10YR 粘りなく締まっている。黄褐色パリスを1より多く含む。
3 10YR 弱粘性土 2と同じ。
4 10YR 弱粘性土 2と同じ。
5 10YR 弱粘性土 2と同じ。
6 10YR 弱粘性土 10YR 弱粘性土が強い。黄褐色パリスを少量含む。他に2と同じ。

第48号ビット



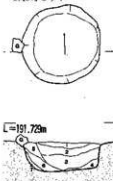
- 1 10YR 弱粘性土 黄土。ブロック
10YR 黄褐色土 状に入る。

第41号ビット

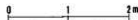


- 1 10YR 粘りなく柔らかく軽い。白色粘砂を少量含む。
2 10YR 粘りなく締まっている。黄褐色パリスを少量含む。

第45号ビット

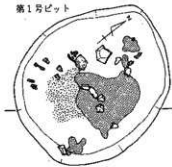


- 1 10YR 弱粘性黄褐色土 粘りなく極めて柔らかく軽い。極小の粘土を含む。
2 10YR 弱粘性黄褐色土 粘りなく極めて柔らかく軽い。木屑を少量含む。
3 10YR 弱粘性土 粘りなく極めて柔らかく締まっている。
4 3-2 粘りなく柔らかく締まっている。
5 10YR 弱粘性黄褐色土 1と同じ。
6 10YR 弱粘性黄褐色土 1と同じ。
7 10YR 弱粘性黄褐色土 幾分粘性があり硬く締まっている。黄褐色パリスを少量含む。



第22図 N区ビット(4)

第1号ピット



L=192.383m



- 7.5YR 5/1 灰褐色土 腐化粒子を含む。少量の腐土粒子が混入。礫層褐色土
- 5YR 5/1 赤褐色土 腐化粒子・腐土粒子を多く含む。
- 7.5YR 5/1 灰褐色土 柔らかく湿っている。砂粒・白色粒子・腐土粒子少量含む。

第2号ピット

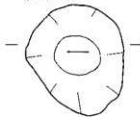


L=192.083m



- 10YR 5/黒褐色土 腐土 粘りなく、柔らかく湿って乾いた。黄褐色パミス・白色腐植物を多量に含む。
- 10YR 5/暗褐色土 土

第3号ピット



L=191.941m



- 1 腐状パミス。
- 2 5YR 5/ 腐褐色腐植土 粘り少ない。1の腐状パミスを含む。
- 3 7.5YR 5/ 赤褐色土 柔らかく湿りあり。
- 4 5YR 5/ 赤褐色土 柔らかく湿りあり。

第4号ピット



L=191.041m



- 5YR 5/ 粘り少なく、柔らかく湿りあり。弾力なし。
- 7.5YR 5/ 粘りがあり、弾力がある。黒色腐植土 砂粒を含む。
- 7.5YR 5/ 粘りあり、湿っている。色より硬い。白と黒の腐砂粒を多量に含む。

第5号ピット



L=192.141m



- 7.5YR 5/ 黒褐色土 腐土 腐状パミスが多い。
- 7.5YR 5/ 暗褐色土 腐土 腐状パミス
- 7.5YR 5/ 暗褐色土 腐土 湿り少なく硬い。腐状パミス少量含む。

第6号ピット



L=191.641m



- 10YR 5/ 黒褐色土 粘りなく柔らかく、腐化粒子を多量に含む。
- 10YR 5/ 暗褐色土 土

第7号ピット



L=192.617m



- 10YR 5/ 浅黄色パミスが腐状に混入。粘りなく柔らかく乾いた。

第8号ピット



L=193.083m



- 10YR 5/ 黒褐色土 腐土 粘りなく硬く乾いた。白色腐植物を少量含む。
- 10YR 5/ 暗褐色土 腐土
- 10YR 5/ 黒褐色土 腐土 粘りなく柔らかく乾いた。白色腐植物を少量含む。

第9号ピット



L=192.753m



- 10YR 5/ 黒褐色土 腐土 粘りなく硬く乾いた。白色腐植物を少量含む。
- 10YR 5/ 暗褐色土 腐土 粘りなく柔らかく乾いた。白色腐植物を少量含む。

0 1 2 m

第25図 S区ピット(1)



- 1 10YR片 粘性なく柔らかく極めて強い。黄褐色パリスを少量含む。
- 2 10YR片 粘性なく柔らかく強い。黄褐色パリスを多量、腐植粒を少量含む。
- 3 10YR片 粘性なく極めて柔らかく強い。黄褐色土



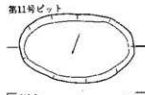
- 1 10YR片 粘性なく硬く強い。黄褐色パリスを極めて少量含む。
- 2 10YR片 腐分粘粒あり柔らかい。黄褐色パリスを中々に少量含む。
- 3 10YR片 極めて柔らかく強い。黄褐色パリスを微量含む。



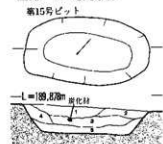
1 目録と同じ。 2 目録と同じ。



1 目録と同じ。 2 目録と同じ。



- 1 5YR片 粘性強く固りをおび柔らかい。赤褐色パリス少量含む。腐分粘粒あり。他は1と同じ。
- 2 7.5YR片 腐分土
- 3 5YR片 粘性あり。1の腐分が見られぬ。
- 4 7.5YR片 粘性あり。硬く締まっている。腐土の中にブロック状に入る。赤褐色パリスを含む。



- 1 10YR片黄褐色土 腐分粘粒あり柔らかい。腐化粒を少量含む。細い黄褐色パリスを多量に含む。
- 2 10YR片黄褐色土 1より強い。細いパリスを多量に含む。
- 3 10YR片黄褐色土 1より強い。腐分粘粒を含む。
- 4 10YR片黄褐色土 腐分が多い。他は1と同じ。
- 5 10YR片黄褐色土 腐分粘粒あり。柔らかく強い。黄褐色パリスを多量に含む。



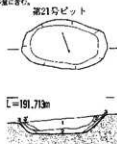
- 1 7.5YR片 粘性なく柔らかく強い。1と同じ。
- 2 7.5YR片 腐分粘粒土
- 3 7.5YR片 腐分粘粒土



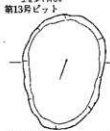
- 1 10YR片黄褐色土 腐分粘粒あり強い。明黄褐色パリスを微量含む。
- 2 1と同じ10YR片黄褐色土を多く含む。



- 1 10YR片 粘性あり。ブロック状に紅色土混入。



- 1 7.5YR片 赤褐色小山頂土を含む。
- 2 7.5YR片 黒色腐植土
- 3 7.5YR片 膠のくずれ。腐褐色土
- 4 7.5YR片 柔らかい。白赤パリス粒を多量に含む。



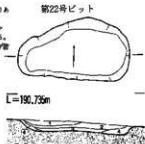
- 1 10YR片黄褐色土 10YR片黄褐色土
- 2 10YR片黄褐色土
- 3 10YR片 赤褐色小山頂土
- 4 10YR片黄褐色土
- 5 10YR片黄褐色土



第17号ピット

L=190.35m

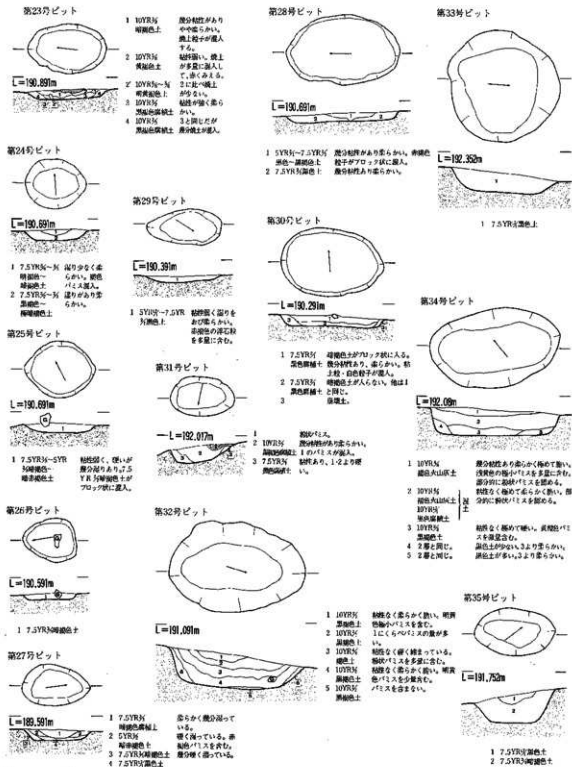
- 1 10YR片 粘性強く石質土
- 2 10YR片 腐褐色土



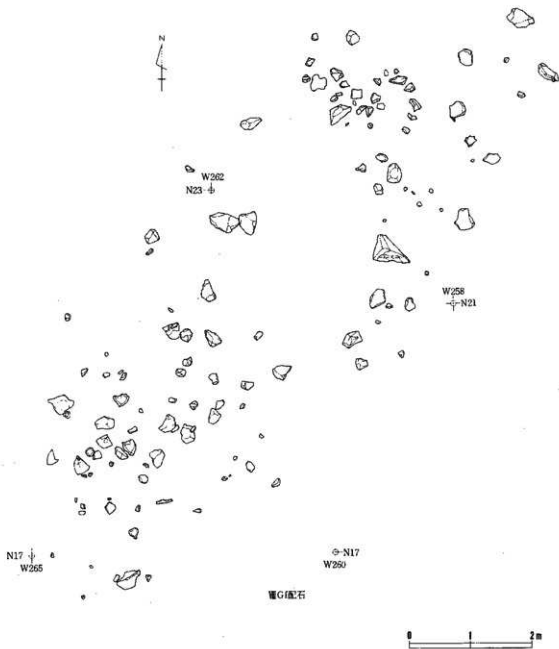
- 1 7.5YR片 柔らかく厚りあり。腐褐色腐植土
- 2 7.5YR片 1より柔らかく厚りもある。
- 3 7.5YR片 深まっているが腐植土
- 4 7.5YR片 柔らかい。

第26図 S区ピット(2)

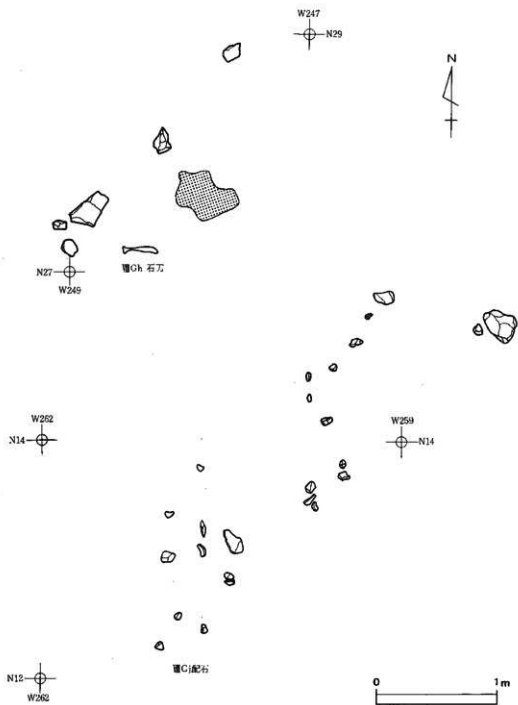




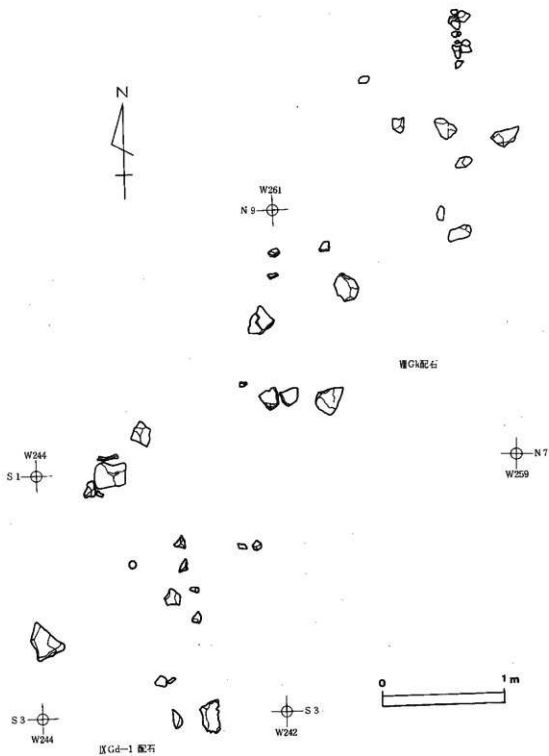
第27図 S区ピット(3)



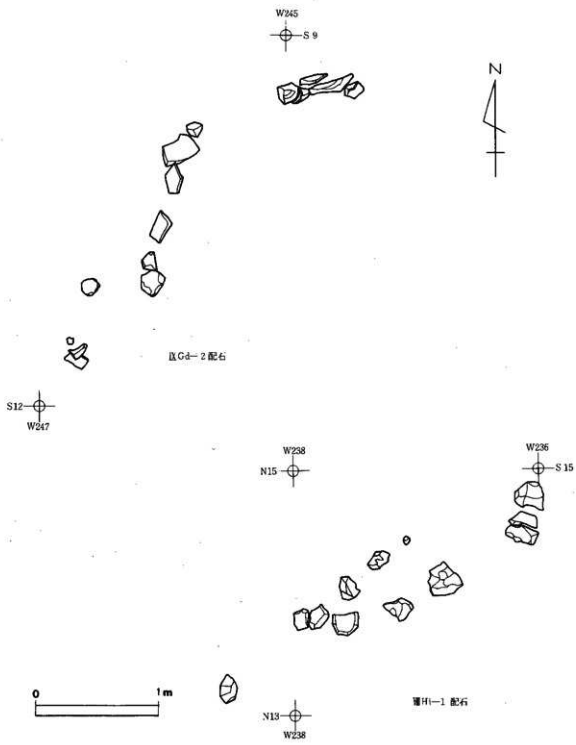
第29回 WG f 配石(1)



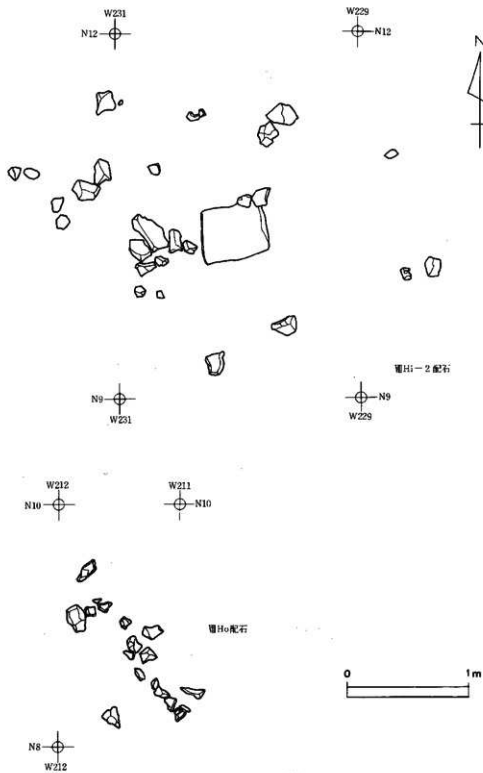
第30圖 ⅤGh石刀・ⅤGj配石



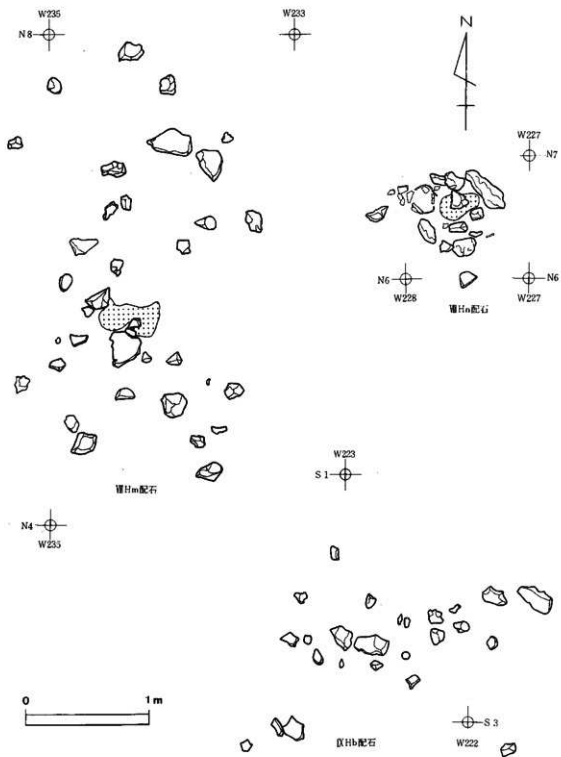
第31图 ⅧGk配石・ⅨGd-1配石



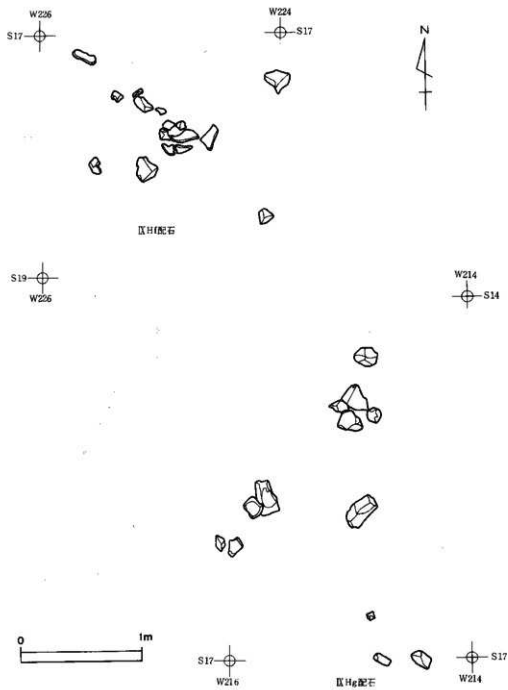
第32図 IGd-2配石・HI-1配石



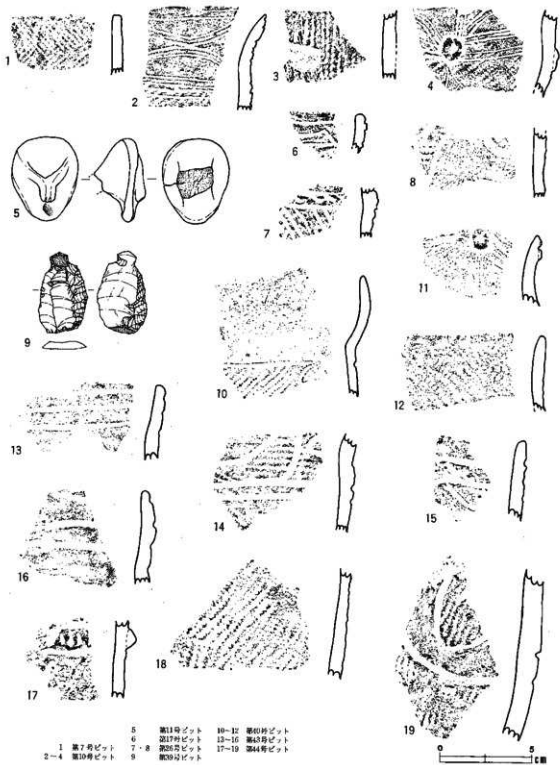
第33図 遺Hi-2配石・遺Ho配石



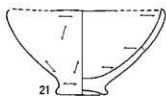
第34图 VIIHm配石・VIIHn配石・IXHb配石



第35図 ⅧHf配石・ⅧHg配石



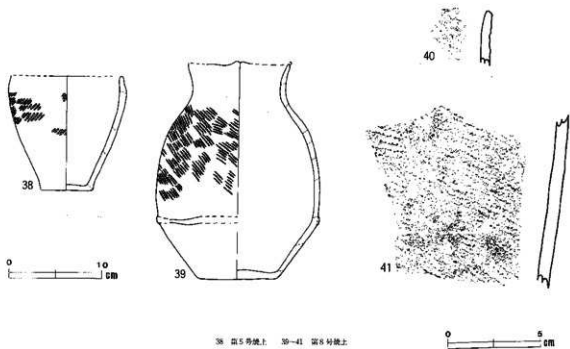
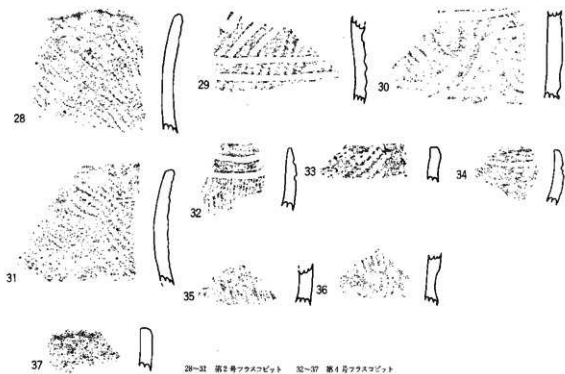
第36図 N区ピット出土遺物(1)



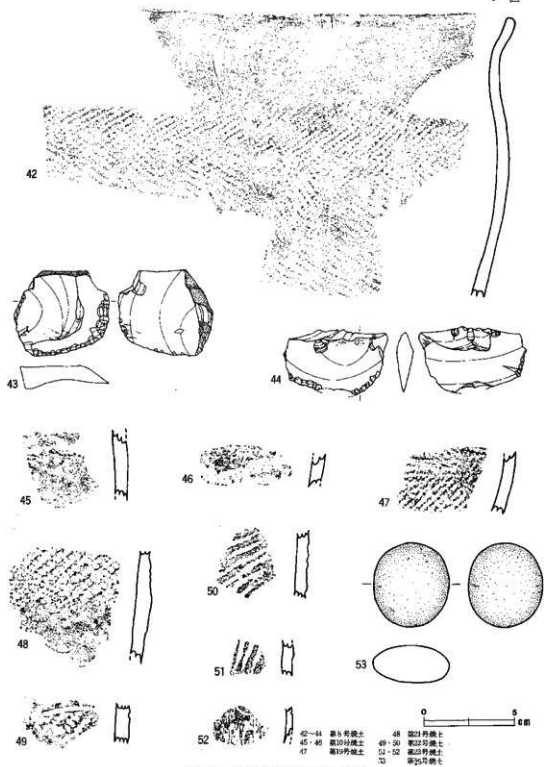
- 20・21 第47号ピット
22-25 第50号ピット
26 第54号ピット
27 第54号ピット

第37図 N区ピット出土遺物(2)

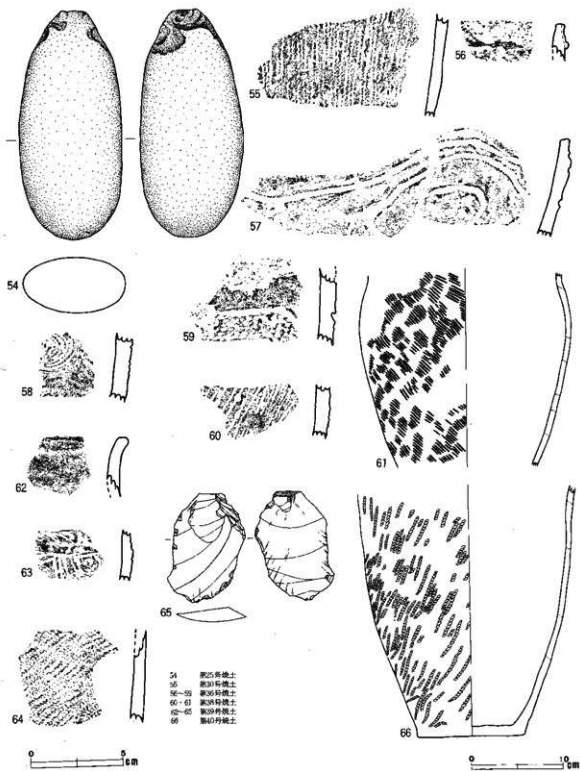




第38図 N区ビット出土遺物(3)・焼土遺構出土遺物(1)

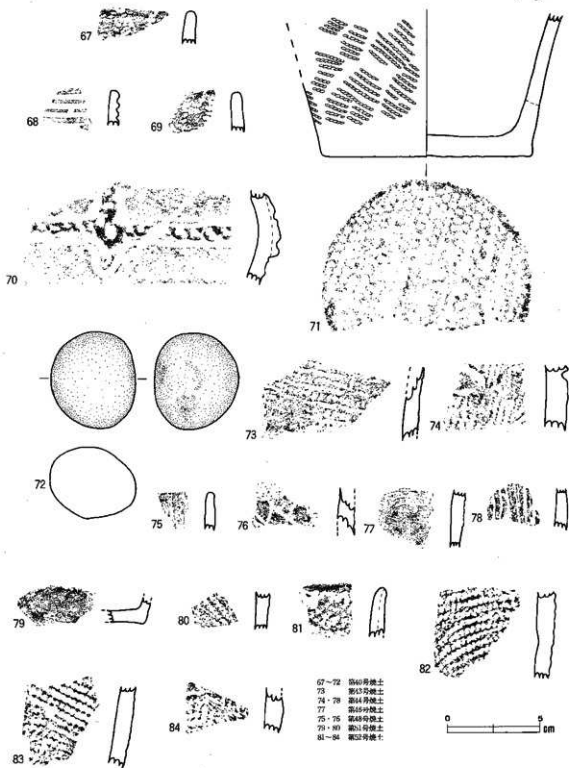


第39图 N区烧土遗物出土器物(2)

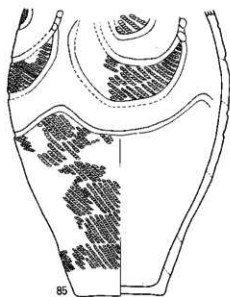


- 54 第25号烧土
- 55 第30号烧土
- 56-59 第35号烧土
- 60-61 第38号烧土
- 62-65 第39号烧土
- 66 第40号烧土

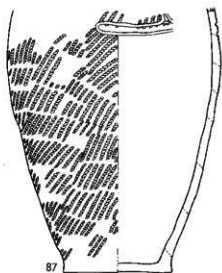
第40图 N区烧土遗物出土物(3)



第41图 N区烧土遗物出土文物(4)



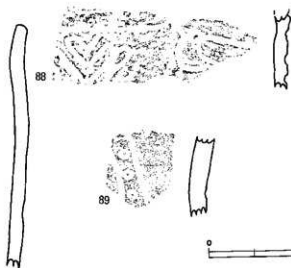
85



87



86



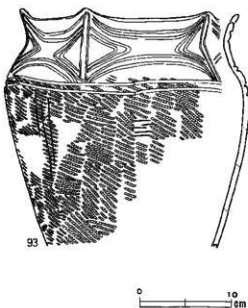
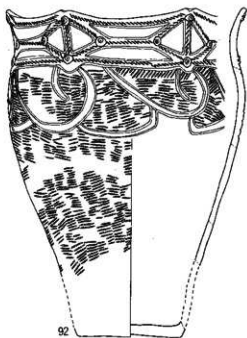
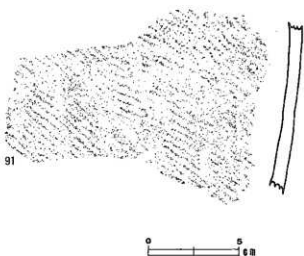
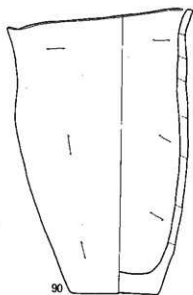
88

89



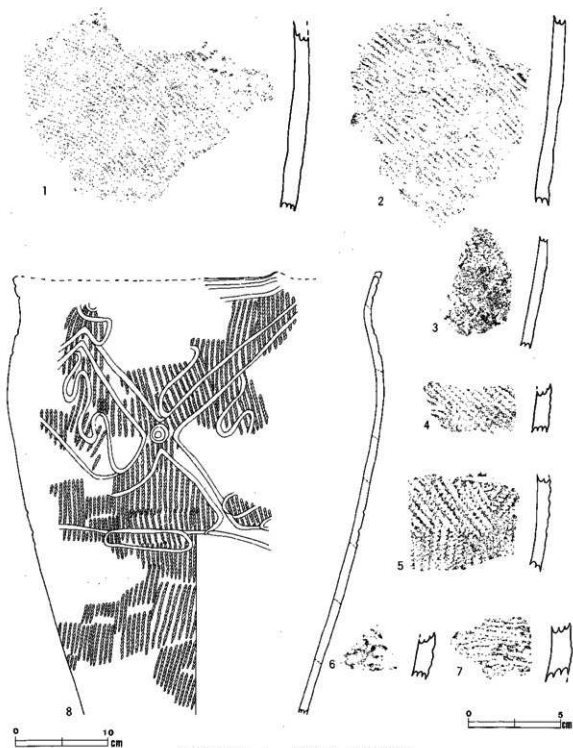
85-86 第1号炉址
87-89 第5号炉址

第42图 N区炉址出土遗物



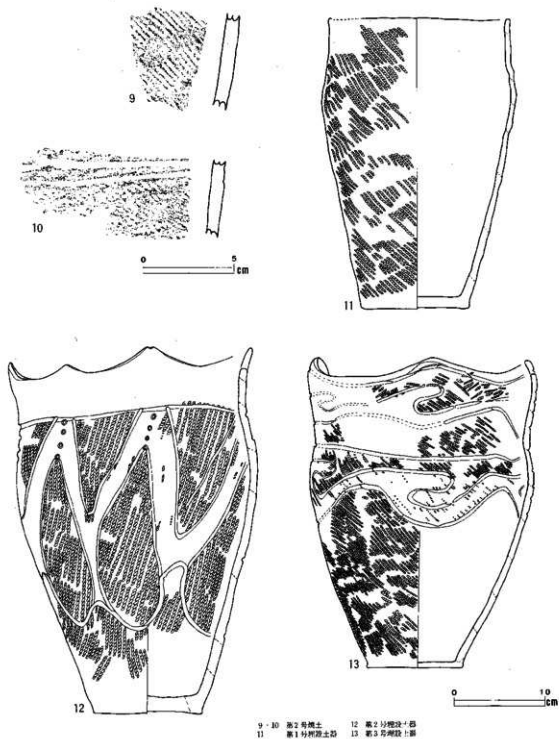
90-91 第1号埋設土器
92 第2号埋設土器
93 第3号埋設土器

第43图 N区土器埋設遺構出土遺物

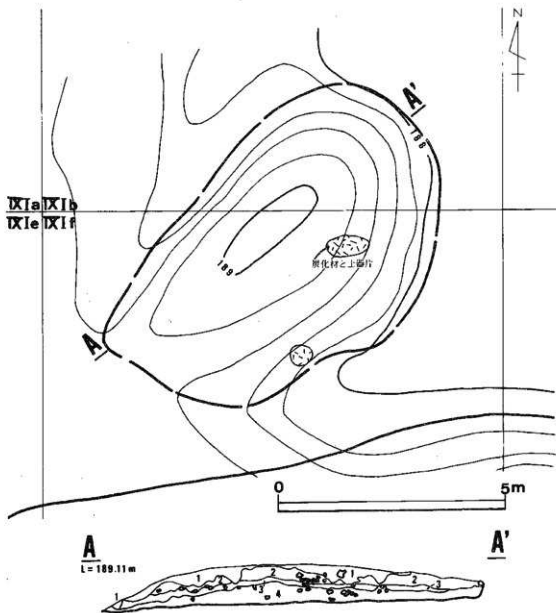


1・2 第8号ピット 4 第9号ピット 6 第10号ピット
 3 第1号ピット 5・7 第24号ピット 8 別の焼土

第44図 S区ピット・焼土遺構出土遺物

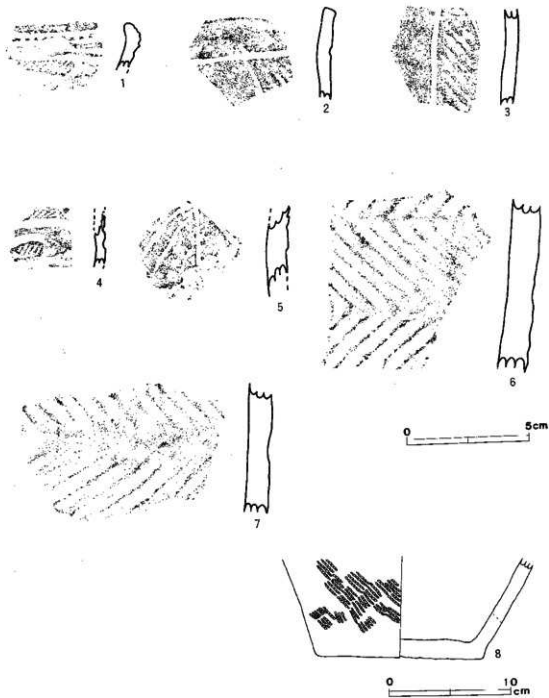


第45图 S区烧土遺構出土遺物・土器埋設遺構出土遺物



- | | | |
|---|----------------|---|
| 1 | 30YR 5/6 褐色腐殖土 | 粘性・漚り少ない。水湿を多く含む。褐色鉄粒子・砂粒・小石・赤褐色浮石を混入。場所により多量の腐化材が混入。腐化粒子は空枠をおおう形で混入。 |
| 2 | 7.5YR 4/6 暗褐色土 | 漚りをあび粘性があり締まっている。小石・砂粒・褐色鉄粒子を混入。次化粒子を少量混入。石が数多く露出する。 |
| 3 | 2と同じ | 2より漚りが多い。場所により漚りにむらがある。2の混入物に加えて薄層地殻石が少量混入。 |
| 4 | 明黄褐色ローム質土層 | 漚りを多く含む。粒子が多く粘質である。小石・無色鉄粒了を含む。場所により白色状土質土層(下層)腐化層(上層)となっている。 |

第46図 堆積礫



第47图 堆積層上出土遺物

9. 遺構外出土遺物

(1) 土器

当区から出土した土器片はダンボール箱に換算して80箱分にも達し、完形および復元された土器は100点を越える数となっている。縄文時代早期から晩期、弥生時代の各時期の土器が出土しているが、縄文時代早期・前期・中期・晩期・弥生時代のものは極めて少なく、出土量の9割を越える縄文時代後期に属する土器が主体となっている。各時期の出土状態については、層位的に明確な差異は特に認められなかった。尚、既述のように当区は調査の便宜上、N区・S区に分割した調査を実施したが、本稿では一括して記述・掲載した。

第I群土器 (第48図・写真図版25)

本群は縄文時代早期に属すると思われる土器群である。斜行する平行沈線によって文様が構成される。沈線の断面形は鋭利な「V字状」を呈し、上位・下位の斜め方向から施文される。何れも器厚は9mm前後と厚く繊維は含まない。胎土・焼成はともに良好で、内外面の調整も緻密である。色調は明褐色のものが多いが、4・8・9はにぶい黄褐色を呈する。尚、出土地点はN区北半の広範囲に及んでいる。

第II群土器 (第49・50図・写真図版25・26)

本群は縄文時代前期に属する土器群である。第I群土器同様に極めて少量の出土である。本群には何れも胎土中に多量の繊維が認められ、羽状縄文をもつ土器と斜行縄文をもつ土器とに大別される。12～22は一括出土の同一個体のもので、やや外反する平縁の深鉢と思われる。文様はLR・RL原体の結束のある羽状縄文が横位に施文される。内・外面ともに煤が付着しているが、内面より顕著である。胎土・焼成ともに良好で、色調は淡黄色・黄褐色を呈する。23～37は斜行縄文が施文される土器である。35・37が尖底・平底の底部破片である他は、何れも胴部破片である。胎土・焼成ともに羽状縄文の土器と比較すると極めて粗雑である。施文される縄文原体はLRのものが多く(24～27・29・30・33・35～37)、RLのものは少ない(25)。また、器表面が軟弱なうちに施文されたと思われる不明なものも多い(25・28・31・32・34・37)。色調は何れも明褐色を呈し、内面には煤の付着が認められる。33には穿孔が2孔認められ、1孔は未通である。

第Ⅲ群土器 (第50・51図・写真図版26・27)

本群は縄文時代中期に属する土器群である。第Ⅰ・Ⅱ群土器同様に極めて少量の出土である。38・41は胴部上半で僅かにくびれ、口縁部がゆるやかに外反する深鉢である。口縁部には一条の沈線がめぐらされ無文帯を形成する。胴部には縦方向を中心とする燃糸文施文後に、平行沈線で区画された幅広の「J」字状の磨消帯が胴部上半に展開する。磨消帯には刺突が施され、38では垂下部・41では垂下部と終端部に施される。同様な刺突は38の磨消帯間に貼りつけられた隆帯の周辺部・41の磨消帯に沿った所にも一部施される。また、41の口縁部突起内面には三日片状の隆起帯がみられる。胎土・焼成ともに非常に良好で、特に当区出土の土器群のなかでも精練された胎土を用いている。内・外面ともに煤の付着が認められ、41の胴部下半で顕著である。色調は黄橙色～黒褐色を呈する。

39は口縁部がゆるやかに内湾する大型の深鉢である。あまいヨリのLR原体の斜行縄文施文後に、平行沈線で区画された磨消帯が口縁部直下から胴部にかけて展開する。内・外面ともに煤の付着が認められ、胎土・焼成ともに良好である。色調は黄橙色を呈する。

42は連鎖状の刺突をもつ土器である。器形は頸部付近に最大径をもち、口縁部はゆるく外反気味に直立する。口縁部は無文研磨され、頸部にめぐらされた隆帯に沿って刺突が施され、口縁部にかけて櫛状に立ち上る。胴部にはRL原体の斜行縄文が施される。胎土・焼成ともに不良で全般に粗雑な土器である。色調は赤褐色を呈する。

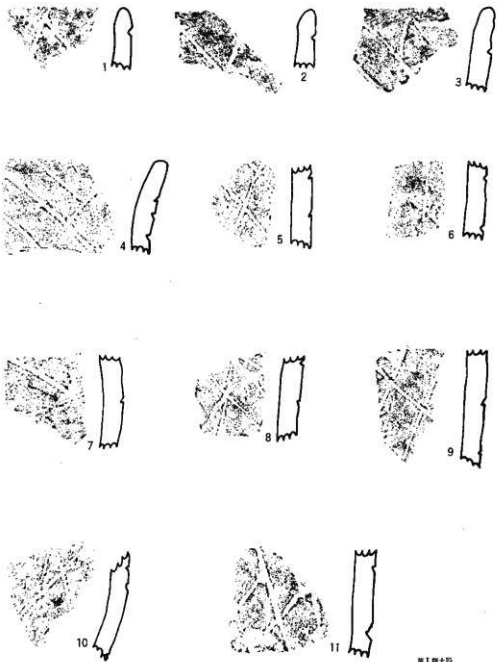
第Ⅳ群土器

本群は縄文時代後期に属する土器群である。当区では量的に最も多く、本遺跡全体でも最大の出土量である。特に配石地帯であるN区全域から出土していることから、当区の配石遺構はこの時期に構築されたものと考えられる。本群の文様構成は多種・多様で、その特徴は磨消文・沈線文の組み合わせによる様々な展開が極めて卓越していることである。なかでも沈線文が大きな役割を果し、円形・楕円形・波状・弧状・S字状等と縦・横・斜めに自在に展開される。

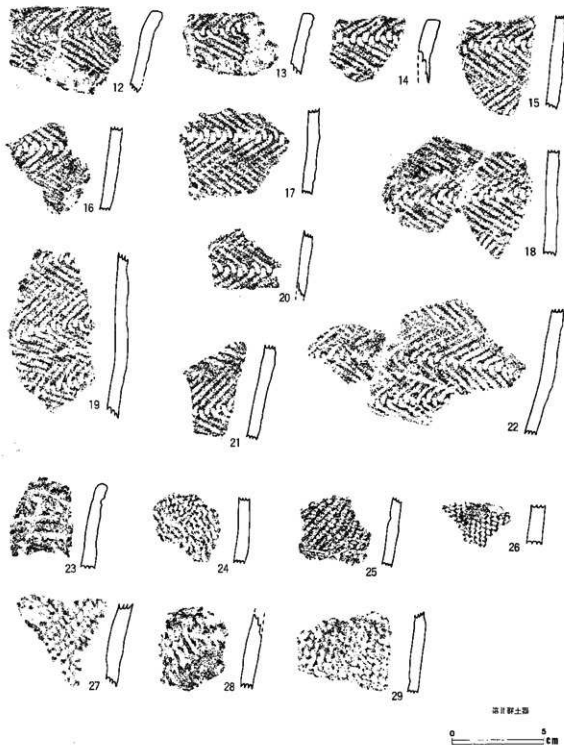
器種は深鉢形を主体とし、浅鉢・壺形土器・注口土器・台付鉢も出土している。

第Ⅰ類土器 (第55図・写真図版39)

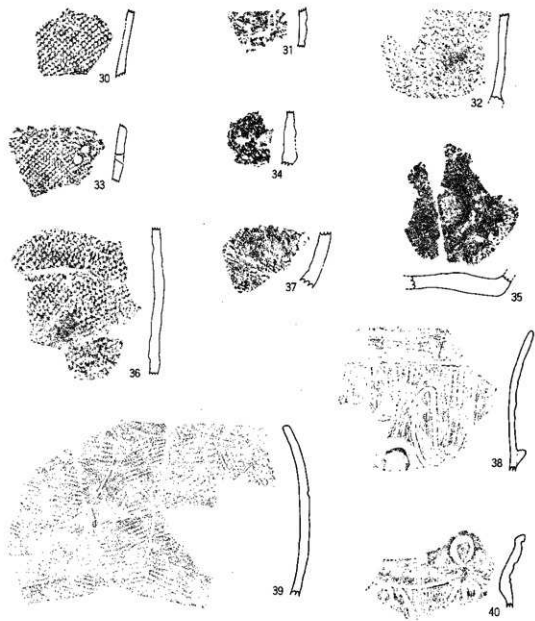
本類は連鎖状の刺突をもつ土器を一括した。刺突は隆帯・隆起線上に施されるものと隆帯・隆起線に沿った位置に施されるものとがみられる。破片資料のみで全体の器形は明確ではないが、口縁部・頸部付近に最大径をもつ大型の深鉢が主体となっている。口縁は平口縁・中空把手・舌状突起・山形等と種類に富んでいるが、やや内湾気味に直立するものが多く、外反するものは少ない。また口縁部は一律に無文帯となり、隆帯・隆起線によって胴部文様帯と区分さ



第48回 遺構外出土遺物 土器(1)



第49図 遺構外出土遺物 土器(2)



30~37 灰土器片
 38~40 灰土器片



第50圖 遺構外出土遺物 土器(3)

れる。

A. 口縁部に文様帯をもつ土器

口縁部に連鎖状の刺突が施され、胴部には縄文・燃糸文のみが施されている土器である。器形は口縁がいずれも内湾気味に直立するものが多く、外反するものは少ない。連鎖状の刺突は、隆帯上に施されるもの（116・119・122・123・125）と隆帯に沿った位置に施されるもの（117・118・120・121）や隆起線に沿った位置に施されるもの（124）がある。隆帯に沿った位置に刺突されるものには、上縁のみに施されるものと、下縁にも施されるものがある。隆帯・隆起線は口縁に垂直に立ち上がるものと緩やかに「ノ」字状を描いて立ち上るものとがみられ、山形口縁のものでは口縁の形状に沿ってめぐり、胎土は一般に粗く砂粒を多量に含む粗雑な土器である。色調は平口縁のものが黄橙色、他は明赤褐色を呈する。

B. 胴部に文様帯をもつ土器

中空把手（127）・舌状突起（128・130）や山形口縁（130・133）を呈するものがある。器形は、いずれも口縁が内湾気味に直立し胴部上半に最大径をもつ大型の深鉢と思われる。A種同様に口縁部は幅の広狭はあっても一様に無文研磨され、連鎖上刺突下の胴部には平行沈線によって区画された磨消帯が展開する。胴部に展開する文様はいずれも中空把手・舌状突起・山形といった特徴ある口縁直下を中心に展開され、地文の縄文を施した後に沈線によって区画し磨消されている。舌状突起や山形口縁の土器には、連鎖状の刺突が口縁に立ち上る交点に環状の隆帯と円形刺突・押圧によるボタン状のモチーフが表出される。中空把手には沈線による弧状の文様が描かれ把手下へと連続し、懸垂文的な手法がみられる。焼成は良好で明褐色を呈し、器表面には煤の付着が認められる。

第2類土器（第56図・写真図版39・40）

本類は列点状の刺突文が施される土器である。刺突は、隆帯上に施されるもの（137～145）・平行沈線間に施されるもの（146～153・155）・口縁部に施されるもの（156）とがある。

A. 隆帯上に施されるもの

隆帯が口縁に沿ってのみめぐり（138～140）と胴部にも垂下されるもの（137・141～145）とがある。前者では横走する隆帯が山形口縁下に結合し、口縁頂部に垂直に立ち上る。結合部には押圧による環状の凹をもつ例（138・140）もみられる。後者では山形口縁直下にて、口縁部に横走する隆帯と胴部に垂下する隆帯とが環状の隆帯によって交差される。口縁部は、幅の広狭はあっても一様に無文帯となり、横走する隆帯が胴部文様帯とを区画する役目を果たすものと思われる。破片資料のみで胴部文様は明確ではないが、137・142・144・145などから沈線による長楕円形・長方形等の文様が施されるものと思われる。

B 平行沈線間に施されるもの

縦・横・斜方向に展開する2条の平行沈線に列点状の刺突が施される。沈線と刺突のみで文様が構成されるもの(146~153・155)と地文の縄文をもつもの(154)とがある。154は複合口縁上にも胴部の地文と回転方向を同一にした縄文(LR)が施されている。前者の器面は丁寧に研磨され、胎土・焼成ともに良好な極めて堅緻な土器である。器形は口縁部が僅かに外反気味に直立するもの(146・148・149)と内湾気味に直立するもの(145)とがみられる。151の頸部破片では直線的な「く」の字状に外反する様子がみられ、155の胴部下半では底部にかけて急激にしまっていく様子がみられる。断定は出来ないが掲載した9点のうち、147・149を除く7点は同一個体で壺形土器と思われる。154の器形は口縁部がやや外反気味に直立する大型の深鉢である。地文の縄文を施した後に直線的、渦巻的な平行沈線が描かれ、一部磨消帯もみられる。

C 口縁部に施されるもの

器形は口縁が「く」の字状に外反する小型の鉢形土器である。口縁部は無文帯となり、頸部下にめぐらした横走する列点状の刺突により、胴部地文との区別を明確にしている。胴部には原体LRの縄文が施文される。口縁部無文帯と器内面は非常に丁寧に研磨されており、胎土・焼成ともに良好な赤褐色を呈する土器である。

第3類土器 (第57・58図・写真図版40・41)

本類は隆帯の貼付と平行沈線により文様が表出される土器である。大型の深鉢形土器を主体とし、小型のもの(168・171・177・190)や壺形土器(191・193)もみられる。深鉢の器形は胴部中央付近より上部にふくらみをもつものが多く、口縁がゆるやかに外反するものと内湾気味に直立するものとがみられる。平口縁は(192)少なく、波状口縁・山形突起を有するものが多数を占める。文様は胴部上半に展開する例が多く、胴部に横走する隆帯が文様帯を区画する役割を果たしている。

隆帯は、口縁の頂部下を中心に胴部へと垂下・斜行され、斜めに貼付られる隆帯には「ハ」の字状(174・175)・「x」字状(169・189)を呈するものがみられる。平行沈線も同様に口縁頂部下を中心に描かれ、隆帯の垂下されるものでは「ハ」の字状に斜行し、連続して渦巻状・波頭状に展開するもの(157~167)と垂下する隆帯を中心に数条の沈線が横位の弧状・弓状に展開し、菱形状の文様が表出されるもの(168・176~180・187・188)とがみられる。「x」字状に交差する隆帯が貼付けられるものでは、隆帯によって区画された内側に、方形・長楕円形の沈線文が描かれるもの(169)と数条の沈線によって菱形状の文様が表わされるもの(189)とがあり、前者の沈線はより曲線的な展開を示し、後者では直線的な幾何学文様が展開される。

191・193は大型の壺形土器の胴部と思われるもので、胴部下半の最大径部分に横走する隆帯

を有し、上半には斜行する数条の沈線によって直線的な幾何学文様が描かれている。本類のなかでも、特に胎土・焼成ともに良好で極めて堅密な土器である。

本類の隆帯上には刻目目 (157~167・172・183・189)・刺突 (168~171・173)・縄文 (174~182・184~188・190・191・193) が施されるものと粗く研磨されるもの (192) がみられ垂下する隆帯と横走する隆帯の起点・接点・交点には、ボタン状の貼付・円形刺突が多様されている。地文は、LR 原体の単節斜縄文が多く、RL 原体のもの (167・172) は少ない。

第4類土器 (第51~53・59~64図・写真図版27~29・41~46)

本類は平行沈線による区画文を主体に文様が展開される土器である。当区及び本遺跡出土遺物のなかでは最も出土量が多く、文様展開も極めて多彩である。比較的大型の深鉢形土器が主体となり、器形は胴部上半にふくらみをもち、口縁がゆるやかに外反するもの・頸部付近にふくらみをもち、口縁が内湾気味に直立し、底部にかけて内湾気味にすぼまるものがみられる。小型のものには、底部から胴部、口縁部にかけて全体にゆるやかに外反するものもみられる。全般に口縁は、平縁を呈するものは少なく、山形・波状の口縁が主体となっている。文様展開は、波状・弧状・S字状・楕円形状の沈線が口縁部・胴部に縦・横・斜め方向で自在に展開される。

A 口縁部付近に文様が展開するもの

本種には、平行する沈線によって胴部文様と区画されるもの (49・51・57・60・194~236) と区画されずに展開するもの (59) とが見られる。文様は総じて波状・山形の口縁頂部を中心に無文研磨された面に描かれるものが多い。沈線には、斜行・弧状・波状に展開するもの (49・51・57・60・195~218) と長楕円形の区画文が描かれるもの (219~236) とがみられる。前者には、口縁頂部下にボタン状の貼付が施されるもの (216)・円形の沈線が描かれるもの (217・218) や円形の刺突文が施されるもの (215) などがみられる。後者には、長楕円形の区画文の間や区画文を囲む形で縄文原体の押圧が施されるもの (233~236) がみられる。地文の縄文は圧倒的に LR 原体のものが多い。

B 胴部に文様が展開するもの

本類で最も出土量が多く沈線文が自在に展開する土器である。本群のなかでも大型の深鉢形土器が中心となっており、胴部上半に最大径をもつものが多い。口縁は、ゆるやかに外反するものが大半を占め、内湾気味に直立するものは少ない。前種同様に平口縁のものは少なく、山形・波状の口縁が多数を占める。文様は胴部上半に展開する例が多く、下半に達するものは少ない。本種に描かれる沈線は、全般に幅が広く、展開も躍動感にあふれたものとなっている。

1. 波状・渦巻状・蛇行する S 字状に展開するもの (45・47・53~56・237~289・291・292)

文様展開は胴部上半に限定され、下半に達する例は認められない。口縁の形状に沿って横走する隆帯をもつもの(54・253・267・271・282)、同様に沈線がめぐるもの(47・53・55・56・237~244・246~250・252・254・256~264・268・270・272・273・275~279・283・284・286・287)は、幅の広狭はあっても、隆帯・沈線により上が無文帯となる例が非常に多く、主として垂直方向に描かれる胴部文様との区画を意匠したものと思われる。同様な手法が複合口縁によって行なわれるもの(274)もある。また、区画の意匠が認められずに口縁から胴部へと連続して文様が展開するもの(245・251・255・257・265・266・281・285)も見られる。総じて頸部付近を中心に、磨消手法が認められるものの、前種の土器に比べ明確に区画された無文帯となる例は少なく、地文の縄文が残る例が多い。

2. 紡錘形状に展開するもの(46・290・293~306・308・309)

縦の紡錘形状に描かれるものが多く、横に描かれる例は1点のみ(300)である。1に比べ幅の狭い鋭利な沈線によって胴部下半にまで描かれる。紡錘形の長軸中心には必ず数条の沈線が描かれ、円形刺突を伴うものもみられる。

3. 鈎状に展開するもの(307)

鈎状に描かれる沈線が連鎖状を呈し、胴部下半にまで描かれる。

4. 菱形形状に展開するもの(310~319・321・322)

山形口縁を中心として、数条の沈線によって菱形状の幾何学文様が表出される。

5. 楕円形状に展開するもの(320)

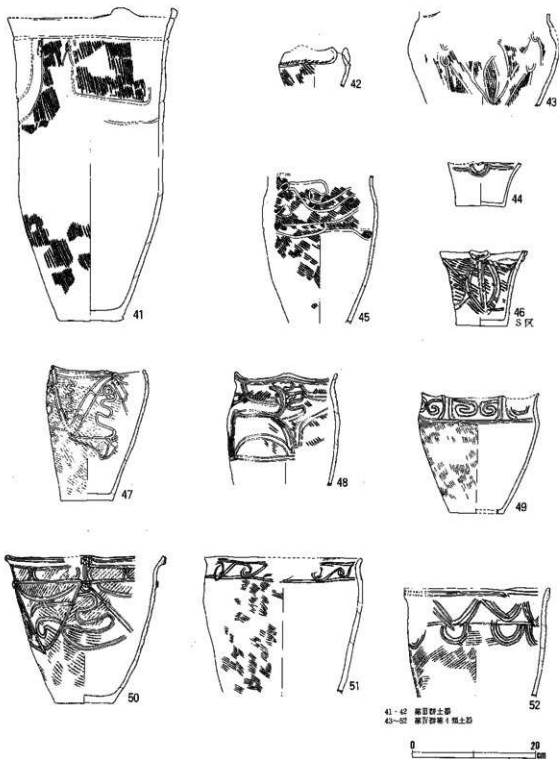
1点のみの出土である。山形口縁を中心に、U字状に描かれる沈線が展開する。

第5類土器 (第65図323~333・写真図版45・46)

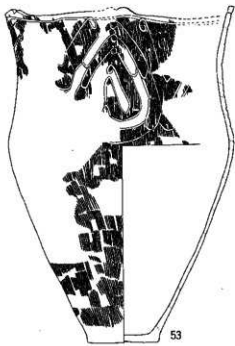
直線的・曲線的に描かれる平行沈線間に帯状の縄文や磨消帯が展開する土器である。口縁部が「く」の字状に外反するものが多く、外反気味に直立するものや内湾気味に直立するものは少ない。

第6類土器 (第54図61~63・第65図334~342・写真図版30・46)

丁寧に研磨された無文の器面に、入組状の曲線沈線や楕円形状の沈線が展開する土器である。大型の深鉢形土器の他に、小型の壺形土器(62・63・338・342)・蓋(61)がみられる。61は小型の蓋付壺と思われ、丸味を帯びた鋸歯状の切断面が認められる。器面には隆帯が貼り付けられ、コブ状の突起には小さな穿孔が施されている。突起には僅かに朱の痕跡が認められることから、全面に施されていたものと思われる。62・63にも朱の痕跡が認められる。63の口縁部と胴部には把手状の隆帯が貼りつけられ、穿孔が施されている。残存する対称位置に剥落の痕跡



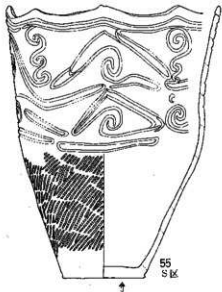
第51图 遺構外出土遺物 土器(4)



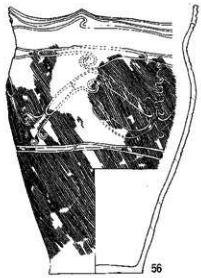
53



54



55
S区

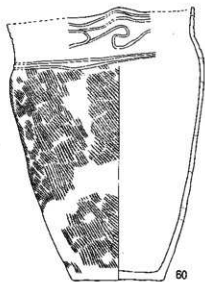
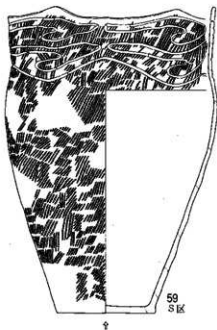
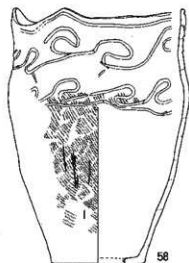
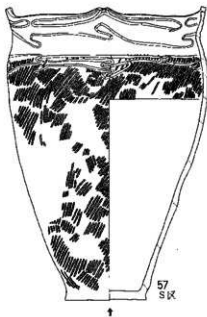


56

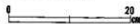
第百肆拾四號土器 ↑……瓶代底



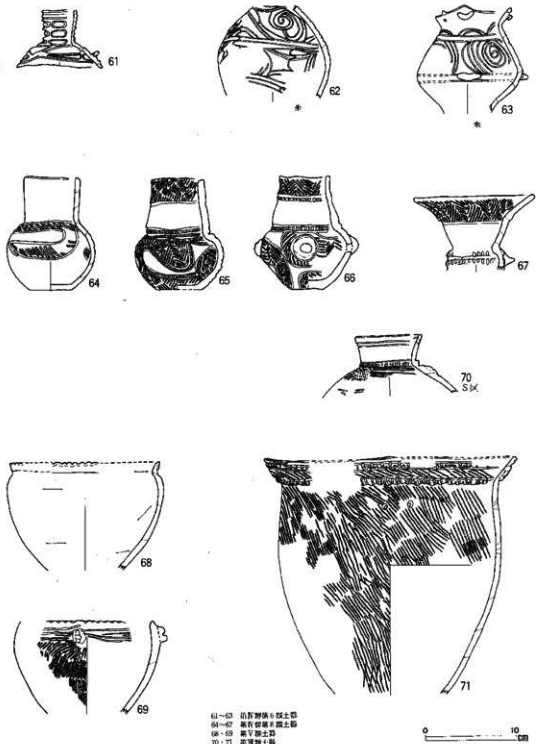
第52圖 遺構外出土遺物 土器(5)



↑…付葉地 ◯…木葉地 第百肆第4 版土器



第53回 遺構外出土遺物 土器(6)



61—63 岳石期陶器
 64—66 岳石期陶器
 67—69 岳石期陶器
 70·71 岳石期陶器

第54圖 遺構外出土遺物 土器 (7)



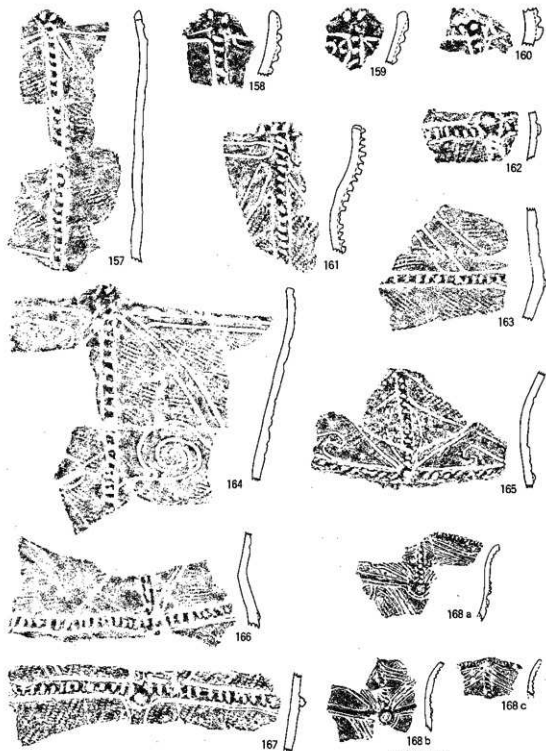
原形 1 区上段



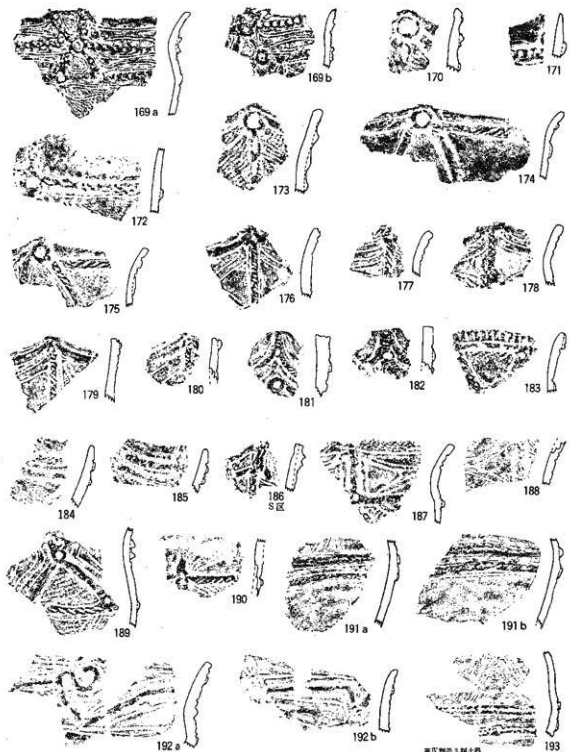
第55区 遺構外出土遺物 土器(8)



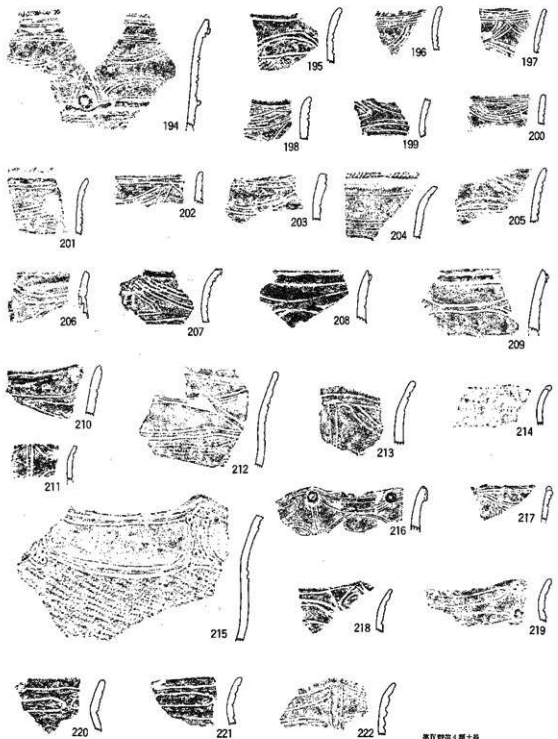
第56図 遺構外出土遺物 土器(9)



第57图 遺構外出土遺物 土器(10)



第58图 遗物出土土器(11)



第59圖 遺構外出土遺物 土器(12)



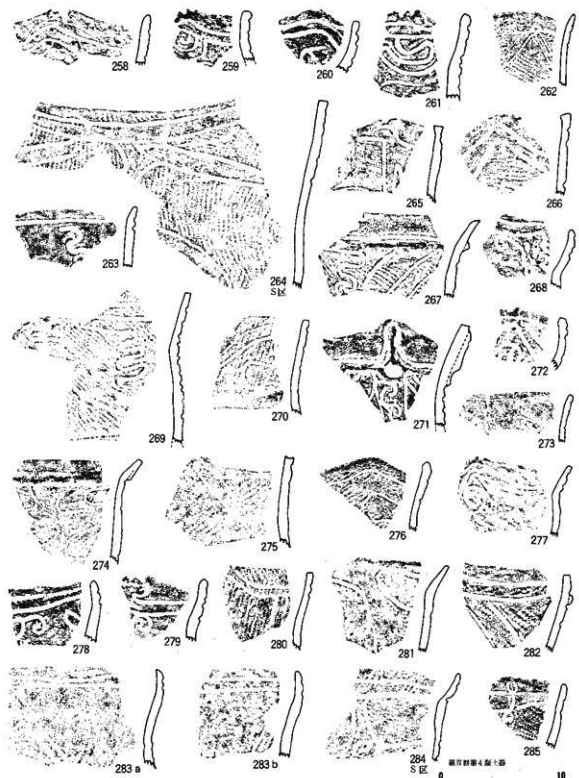
新石器時代4期土器

第60圖 遼東外出土遺物 土器(13)

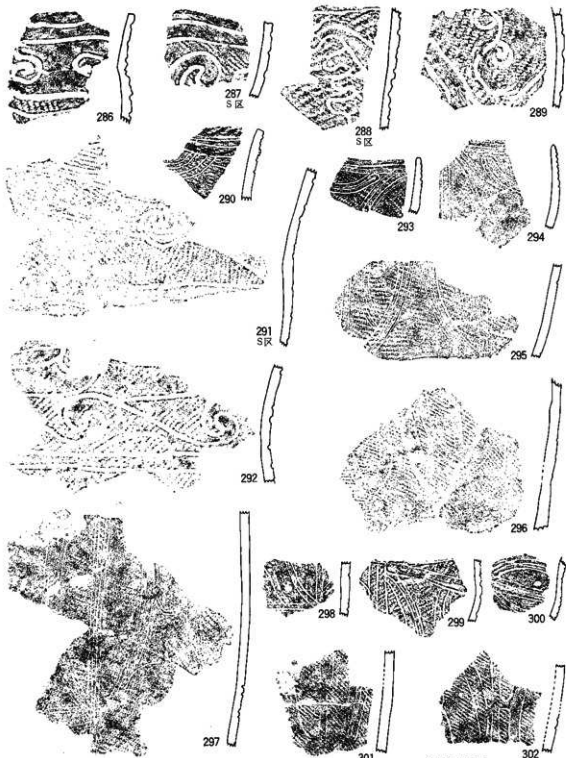




第61图 濠沟外出土遺物 土器(14)



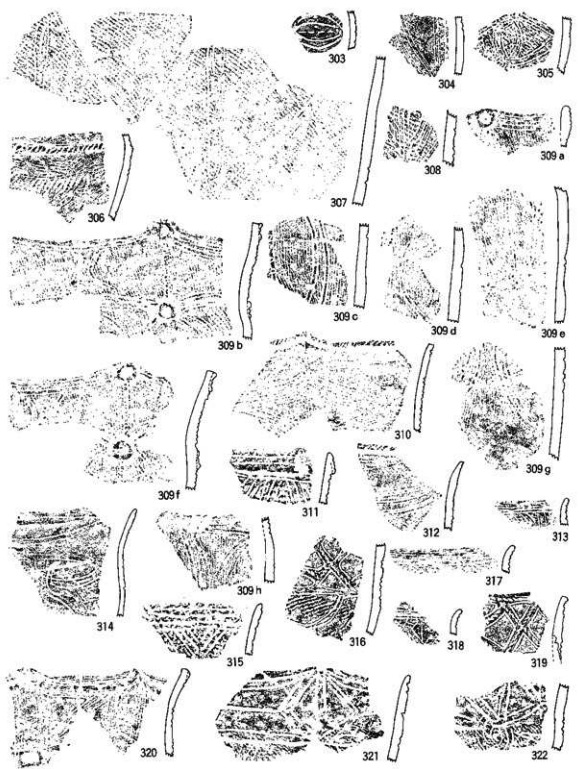
第62図 遺構外出土遺物 土器(15)



第63図 遺構外出土遺物 土器(16)

第4区出土土器

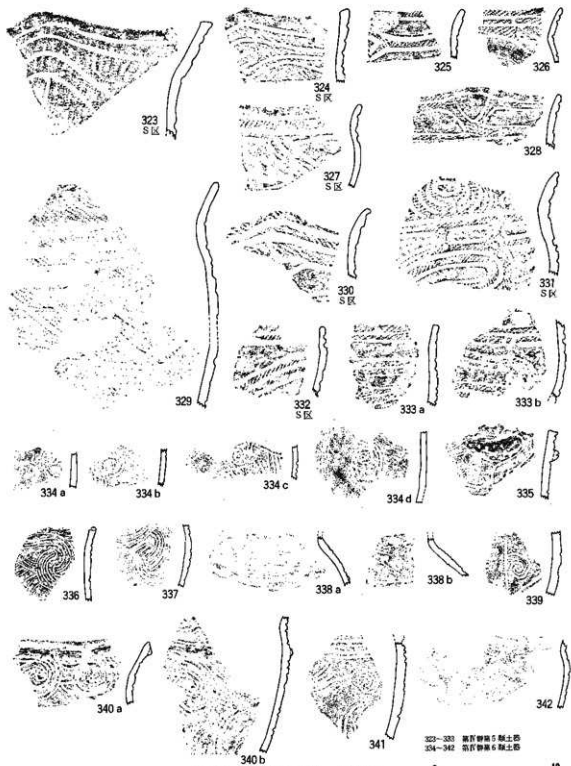




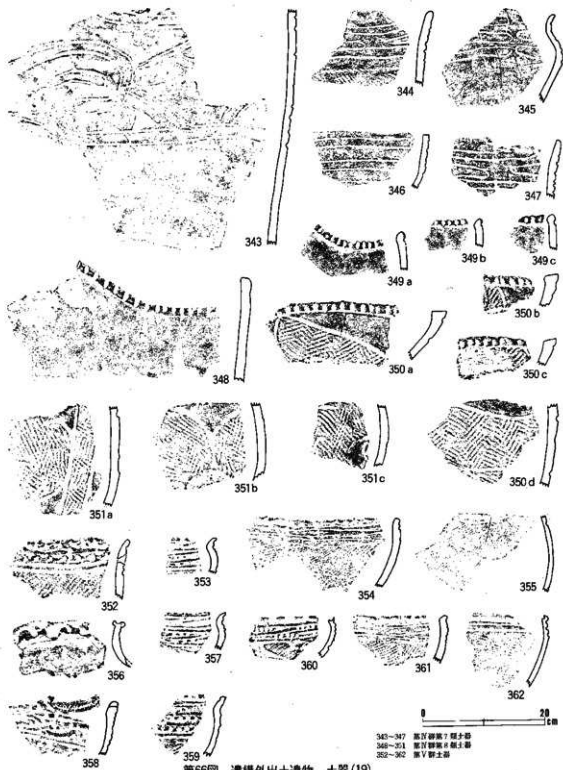
高古野第4層土器

第64圖 遺構外出土遺物 土器(17)





第65図 遺構外出土遺物 土器(18)



第66圖 遺構外出土遺物 土器(19)

が認められることから、口縁部・胴部にそれぞれ2個一対で存在したものと思われる。

第7類土器 (第66図343~347・写真図版46)

平行沈線によって長楕円形の区画文が描かれる土器である。深鉢形土器(344・347)と浅鉢形土器(345・346)とがみられる。文様は口縁部付近にのみ展開される。深鉢の器形は口縁が外反気味に直立し、浅鉢では内湾気味に直立するものと「く」の字状に強く外反するものとがみられる。

第8類土器 (第54図64~67・第66図348~351・写真図版30・46)

平行沈線によって区画された磨消縄文が曲線的に展開する土器である。深鉢形土器(348・349)・浅鉢形土器(350)・壺形土器(64・65・67)・注口土器(66)が出土している。口縁部や口縁付近に刻み目帯を持ち、地文には羽状縄文が施される例が多い。348・349は大波状を呈する口縁部片と思われる。口縁にめぐらした刻み目帯以下は丁寧に無文研磨されている。350は、口縁にめぐらした刻み目帯直下から磨消縄文が展開される。65の壺形土器では、平行沈線によって区画された磨消縄文部にも刻みが施されている。注口土器66には、注口部より等間隔に3個の小突起が貼りつけられている。

第V群土器 (第54・66図・写真図版30・48)

縄文時代晩期に属するものを一括した。当区出土遺物のなかでも極めて量が少なく、全量を掲載した。器形は、浅鉢・鉢・壺と思われるが器形全体をわかる資料が極めて少なく、明確ではない。文様展開は、浮彫的な羊歯状文を文様構成の主体とするもの(352・353・357・358~360)、口縁部に数条の平行沈線が施されるもの(69・354・361・362)、連続した刻み目を持つもの(355)や無文のもの(68)が出土している。全般に器厚は薄く、堅密な土器が多い。358の口縁部には把手状の加飾が施されている。無文土器の胴部下半には、篲状工具による横位の調整痕がみられる。

第VI群土器

本群は第III群土器より第V群土器に伴うと思われる粗製土器を一括した。主体的な文様展開がみられないことから、時期別の明確な細分は難しいが第IV群土器に伴うものが最も多いものと思われる。器形は深鉢形土器が主体をなし、鉢形土器も少量出土している。

第1類土器 (第67・72・73・75図・写真図版31・32・39・48～50)

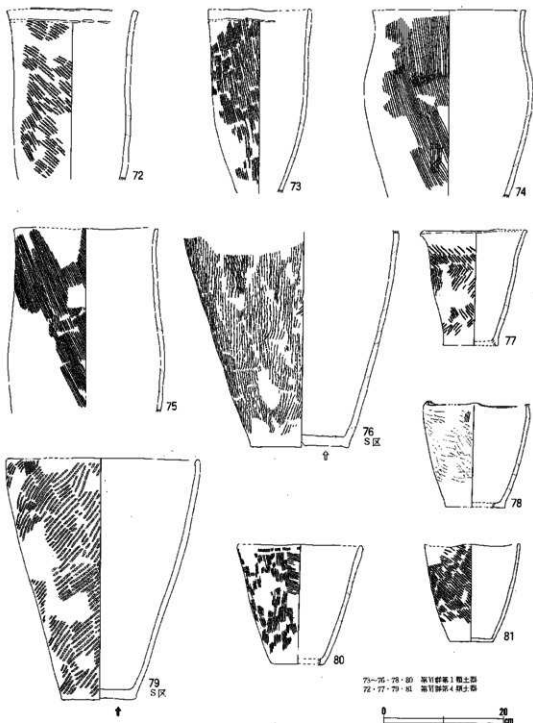
燃糸文が施される土器を一括した。本類の土器には燃糸文が縦に施されるもの(73～76・80・364～380)・斜めに施されるもの(78)と網目状燃糸文の土器(381～405)とが出土している。いずれも口縁は平口縁を呈し、山形・波状の口縁は出土していない。器形は口縁に最大径を有し、胴部下半から次第に屈曲し底部に至る筒状に近いものと胴部上半に最大径を有し、口縁部が外反気味に直立するもの、胴部下半に最大径を有し、頸部付近で僅かに括れた後口縁部が外反気味に直立するものなどの種類がみられる。また、口縁部に無文帯をもつもの(73・364～378・386・389～392・445)と口縁直下から燃糸文が施されているもの(74～76・78・80・379・380)とがみられ、無文帯をもつものには、横走する沈線によって胴部地文部と区画されるもの(73・364～369・389～392・445)と区画されずに無文帯が形成されるもの(370～378・386)とがみられる。全般に本類の土器は胎土・焼成ともに良好で堅密なものが多い。

第2類土器 (第71・74図・写真図版37・38・49)

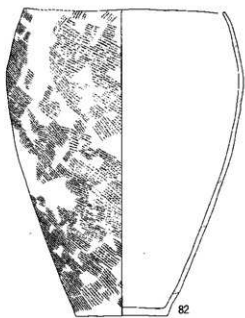
複合口縁を有する土器を一括した。器形は口縁に最大径をもち僅かに外反する口縁部をもつものと胴部上半に最大径をもち口縁部が外反気味に直立するものとがみられる。量的には後者が多数をしめる。本類の土器は、複合口縁上が無文のもの(411・416・420)と縄文が施されているもの(107～110・407～410・412～414・417～419)とに分けられ、縄文が施されるものは胴部の縄文と回転方向が逆となるもの(107・108・110・419)と同一方向のもの(109・412)とに分けられる。また頸部無文帯と胴部地文部とを沈線によって区画するもの(108)・押圧縄文によって区画するもの(412)や無文帯をもたないもの(109・419)などの種類がみられる。量的には少ないが複合口縁が2段となるもの(109)・頸部無文帯に波頭状の沈線が描かれるもの(411)・複合口縁上に二条の平行沈線が巡るもの(408)・口唇上にも縄文が施されるもの(413)など本類の土器はバラエティーに富んでいる。全般に本類の土器には煤の付着が顕著である。(110)の複合口縁上にはボタン状の突起が貼付られ、突起には点状の刺突が施されている。

第3類土器 (第68・70・74・75図・写真図版33・35・36・49・50)

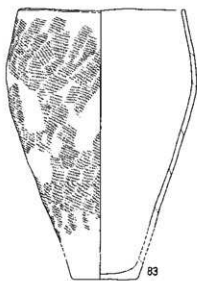
胴部の地文と口縁部の無文帯とを押圧縄文によって区画する土器を一括した。区画に際しては口縁部の上下に2本のもの(85～87・100・431・433～435・437・439)・下方に1本のもの(421～429・436)・上下に2本1組の4本のもの(430)などの種類がみられる。438は破片のみで断定はできないが、口縁に沿ってV字状に施された可能性があり、区画された内側には僅かに磨消された痕跡が認められる。口縁は平口縁のもの(85・86・423・425～428・434～438)・ゆるやかな山形・波状を呈するもの(87・100・101・421・422・424・429～433・439)などが



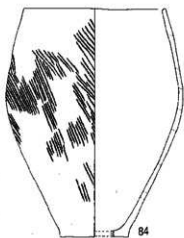
第67図 遺構外出土遺物 土器(20)



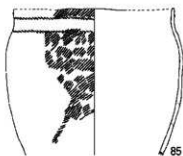
82



83



84



85



86



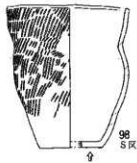
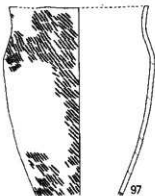
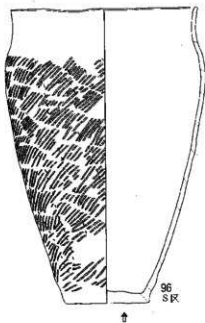
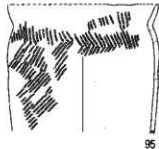
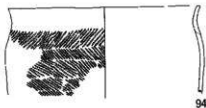
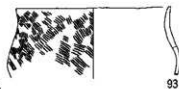
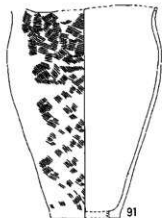
87

85-87 新石器第3期土器
82-84 新石器第4期土器

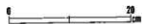


第68图 遺構外出土遺物 土器 (21)

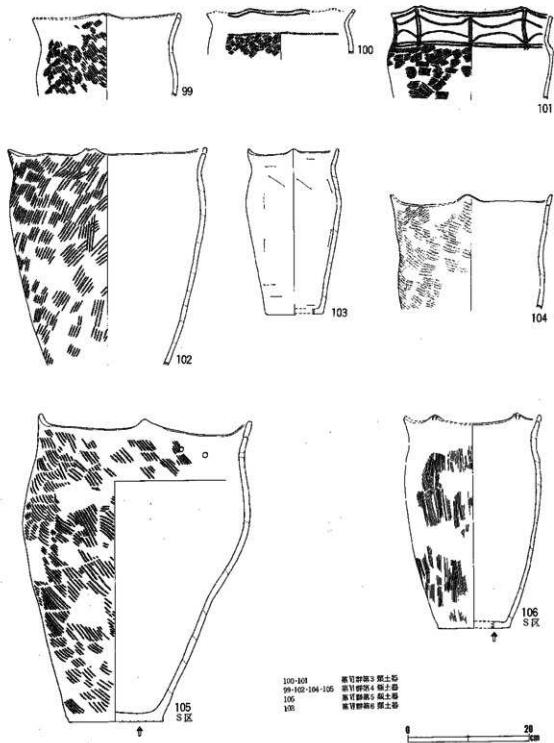
8 区



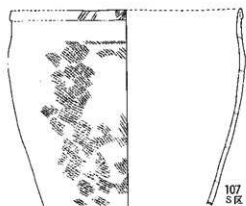
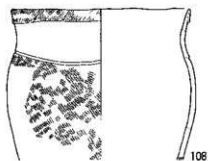
第98号4号土器



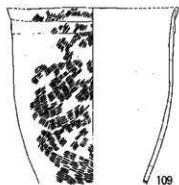
第69圖 遺構外出土遺物 土器 (22)



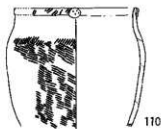
第70圖 遺構外出土遺物 土器 (23)

107
S区

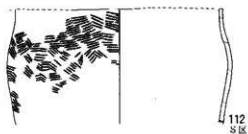
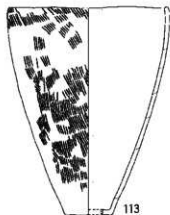
108



109



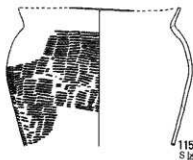
110

111
S区112
S区

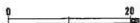
113

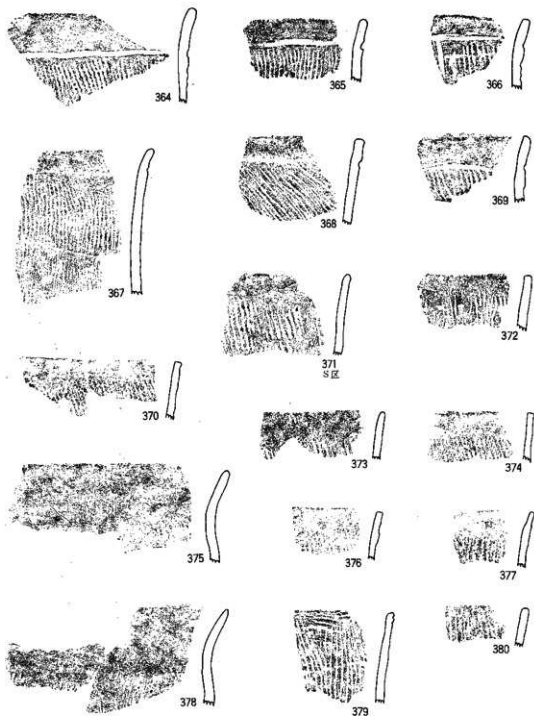


114

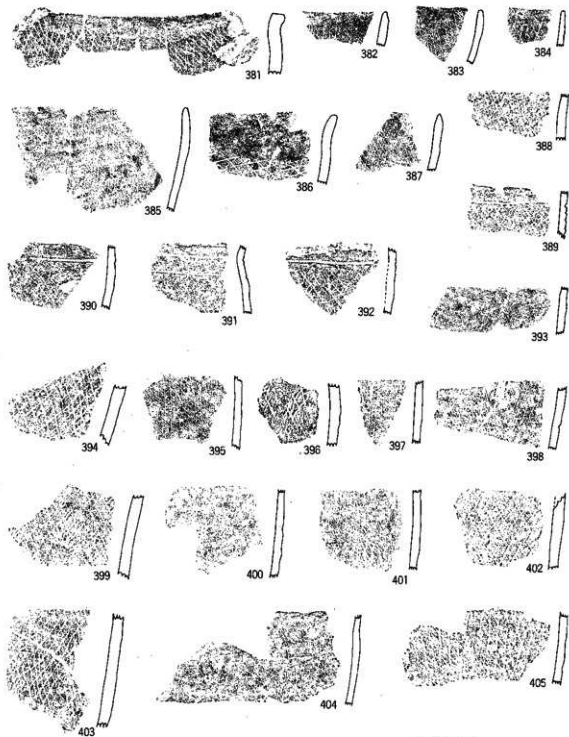
115
S区

第71图 遺構外出土遺物 土器(24)

107-110 築川野第2層土器
111-115 築川野第4層土器



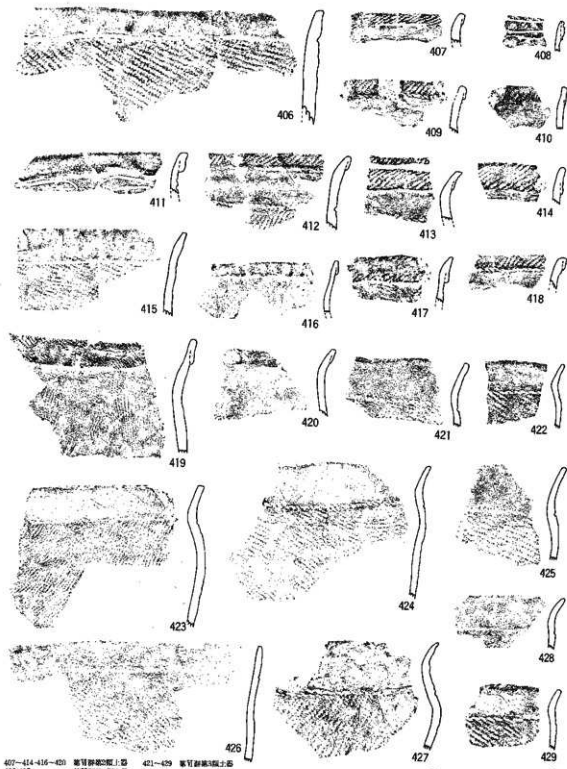
第72图 濠横外出土遗物 土器 (25)



原寸 1/10 表示



第73図 遺構外出土遺物 土器(26)



407-414-416-420
 406-415

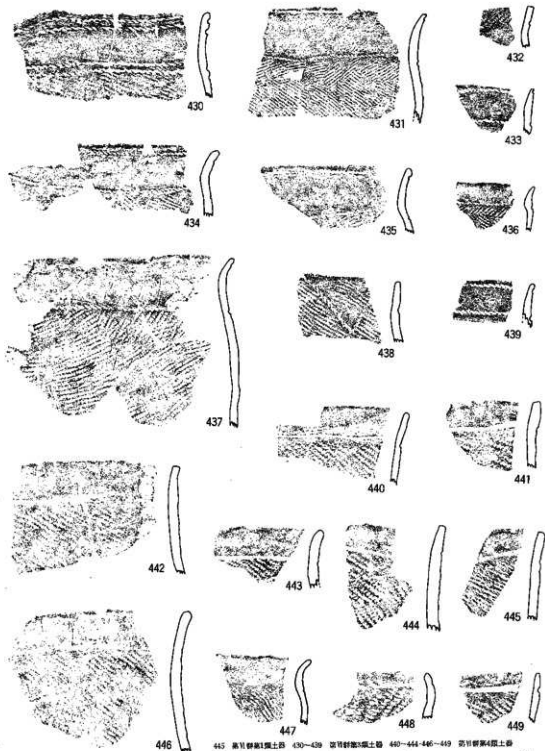
器背斜紋上型
 器背斜紋(型)土器

421-429

器背斜紋3型土器

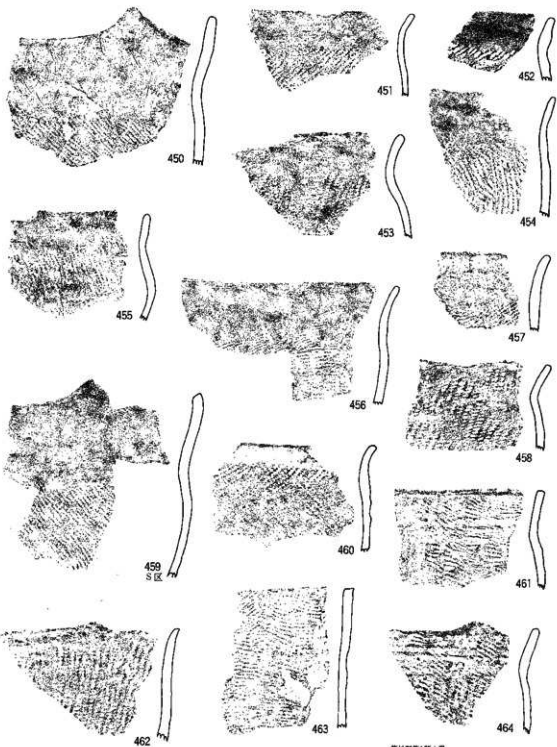
第74圖 遺構外出土遺物 土器(27)

0 10
 cm

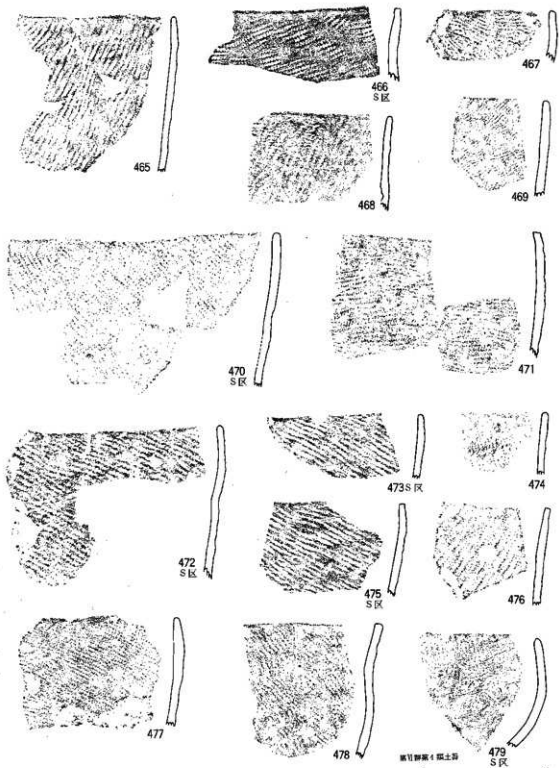


第75図 遺構外出土遺物 土器(28)

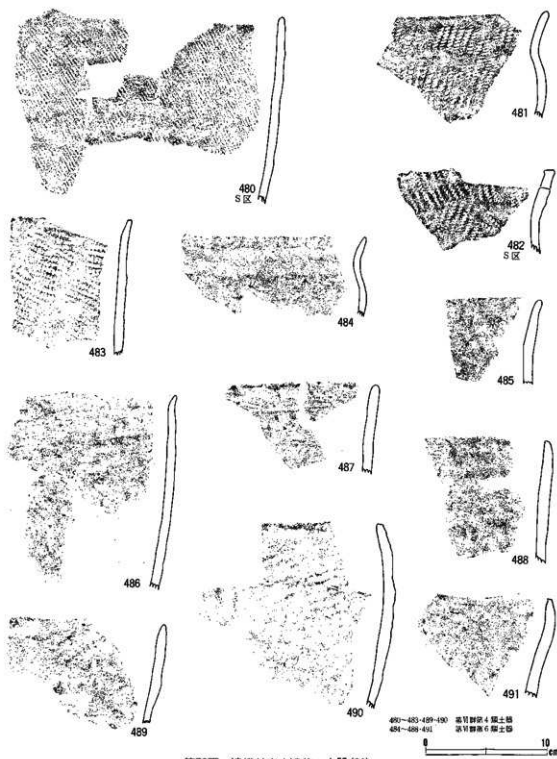
0 10
cm



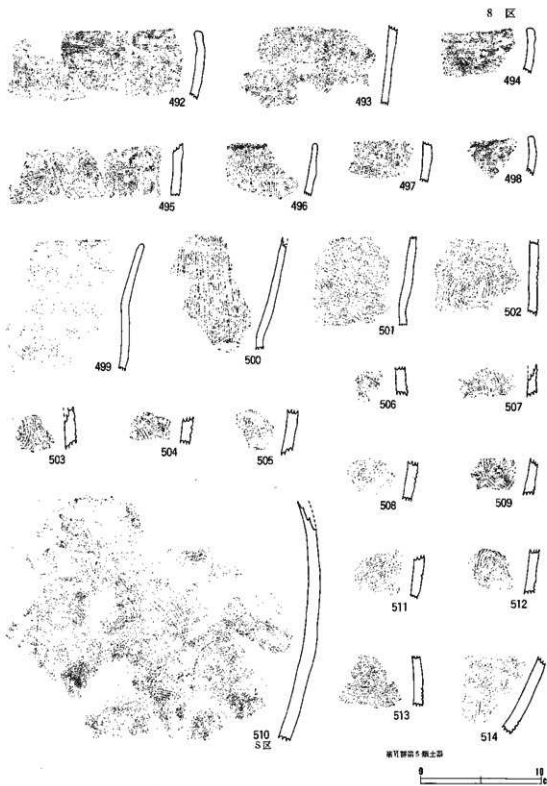
第76图 遺構外出土遺物 土器(29)



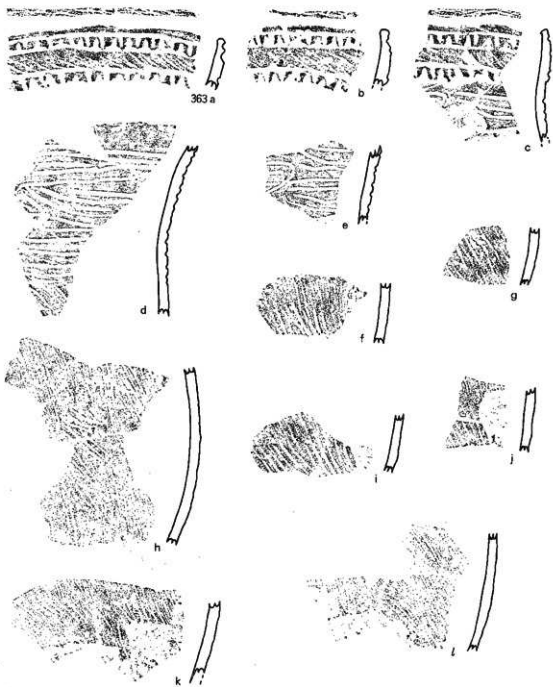
第77図 遺構外出土遺物 土器 (30)



第78回 遺構外出土遺物 土器(31)



第79图 遺構外出土遺物 土器(32)



第80圖 遺構外出土遺物 土器 (33)

高麗朝土器



第16表 8区遺構外出土土器計測値一覧(1)

図番	写真番号	出土地点	層位	器種	測 定 値				文様と施文方法	分類	色 調	備 考
					口 径	高 度	底 径	厚 厚				
51-41	27-61	Ⅷ Gc 4	Ⅱ	深 鉢	(27.6)	51.1	9.9	0.4-1.9	沈黙文・刺突文・刺線文	Ⅲ	赤褐色	赤褐色、外周に黒・黄化付着
51-42	27-62	Ⅷ Gc 2	I	深 鉢	(9.8)	(6.5)	(11.8)	0.5-1.2	刺突文	Ⅲ	赤褐色	外周面に黒付着
51-43	27-63	Ⅷ Hd 4	I	深 鉢	(21.3)	(15.3)	-	0.5-0.6	沈黙文、磨面あり、刺線文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-44	27-64	Ⅷ Gp 3	Ⅱ	深 鉢	12.9	9.3	8.1	0.4-0.5	平行波線、刺線文、竹葉文、施文無し	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-45	27-65	Ⅷ Hf 1	I	深 鉢	-	-	-	0.4-0.7	沈黙文・L-刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周に黒付着
51-46	27-66	X Ib 2	Ⅱ	深 鉢	13.9	12.3	8.2	0.4-0.9	沈黙文・L-R刺線文・竹葉文	Ⅳ	赤褐色	外周に黒化付着無文
51-47	27-67	Ⅷ Hf 4	Ⅱ	深 鉢	15.4	22.2	(8.7)	0.5-1.1	沈黙文・竹葉文・L-R刺線文・磨面あり	Ⅳ	赤褐色	内面に黒化付着、外周に黒付着、黒文
51-48	27-68	トレンチ G	I	深 鉢	17.0	(18.7)	-	0.4-0.7	沈黙文、磨面あり、L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周に黒化付着
51-49	27-69	Ⅷ G 2	Ⅱ	深 鉢	19.5	20.0	(8.9)	0.3-0.7	沈黙文・L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周全体に黒化付着
51-50	27-70	Ⅷ G 1	Ⅱ	深 鉢	26.0	24.2	19.5	0.5-1.1	赤・L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周に黒・黄化付着無文
51-51	27-71	Ⅷ Gg 1	Ⅱ	深 鉢	(25.8)	(22.0)	-	0.6-0.9	赤・L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周全体に黒付着
51-52	27-72	トレンチ G	Ⅱ	深 鉢	(24.0)	(17.8)	-	0.5-1.0	沈黙文・L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周全体に黒・黄化付着
51-53	28-53	Ⅷ Hb 2	Ⅱ	深 鉢	(37.0)	(34.8)	11.8	1.6-2.0	沈黙文・L 磨面文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色・外周に黒付着
51-54	28-54	Ⅷ Hb 4	Ⅱ	深 鉢	(38.5)	(31.3)	16.0	0.5-1.5	沈黙文・キギムシ、磨面あり、L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周に黒・黄化付着、黒文
51-55	28-55	Ⅷ Ho 4	Ⅱ	深 鉢	35.4	44.5	13.6	0.9-1.9	沈黙文・R-L刺線文	Ⅳ	赤褐色	刺線文
51-56	28-56	Ⅷ Hf 2	Ⅱ	深 鉢	(30.4)	43.3	(15.5)	0.4-1.3	赤・L 磨面文	Ⅳ	赤褐色	外周に黒付着
51-57	29-57	X Hb 1	I	深 鉢	35.5	48.1	13.3	0.5-1.4	赤・R-L刺線文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-58	29-58	Ⅷ H 1	Ⅱ	深 鉢	(28.2)	41.9	(35.5)	0.7-0.8	赤・L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-59	29-59	X Hc 1	Ⅱ	深 鉢	34.1	30.3	16.5	0.6-1.3	赤・R-L刺線文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-60	29-60	Ⅷ Hg 2	Ⅱ	深 鉢	(31.0)	45.5	15.4	0.5-1.5	赤・L-R刺線文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色、外周全体に黒付着
51-61	30-61	Ⅷ H 1	表土 Ⅱ	深 鉢	(2.9)	(6.5)	-	0.3-0.4	磨面・沈黙文	Ⅳ	赤褐色	突起に穿孔あり、朱塗り
51-62	30-62	Ⅷ Ha 1	Ⅱ	深 鉢	-	(10.3)	-	0.5-0.6	沈黙文	Ⅳ	赤褐色	朱塗り
51-63	30-63	Ⅷ H 1	Ⅱ	深 鉢	(9.4)	(11.4)	-	0.4-0.6	赤	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-64	30-64	Ⅷ Gg 1	Ⅱ	深 鉢	6.3	12.7	6.5	0.4-0.6	赤・R-L刺線文	Ⅳ	赤褐色	外周全体に黒付着
51-65	30-65	Ⅷ Gf 1	Ⅱ	深 鉢	5.9	12.5	(5.0)	0.6-0.8	L-R刺線文・磨面、キギムシ、沈黙文	Ⅳ	赤褐色	内外面に黒付着
51-66	30-66	Ⅷ Gf 1	Ⅱ	深 鉢	5.6	12.7	6.6	0.5-1.0	R-L・L-R刺線文・磨面、キギムシ、沈黙文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-67	30-67	Ⅷ Gc 4	Ⅱ	深 鉢	13.6	(8.3)	-	0.6-0.9	L-R刺線文・磨面、キギムシ、沈黙文	Ⅳ	赤褐色	赤褐色
51-68	30-68	トレンチ G	Ⅱ	深 鉢	(16.8)	(12.0)	-	0.5-0.7	口唇部にキギムシ体部は磨面	V	赤褐色	外周に黒・黄化付着
51-69	30-69	Ⅷ G 4	表土 Ⅱ	深 鉢	(14.8)	(10.4)	-	0.6-0.8	L-R刺線文・磨面	V	赤褐色	赤褐色
51-70	30-70	X Hd 1	表土 Ⅱ	深 鉢	(7.5)	(6.7)	-	0.4-1.0	平行波線・刺突文・R 磨面文	Ⅵ	赤褐色	赤土層
51-71	30-71	Ⅷ Hc 1	Ⅱ	深 鉢	(28.0)	(26.1)	-	0.4-0.6	平行波線・刺突文・R 磨面文	Ⅵ	赤褐色	赤土層、外周に黒付着
51-72	31-72	Ⅷ Gp 4	Ⅱ	深 鉢	(22.0)	(28.2)	-	0.8-1.1	沈黙文・L-R刺線文	Ⅵ	赤褐色	外周に黒付着
51-73	31-73	Ⅷ Gp 2	Ⅱ	深 鉢	(19.4)	(30.8)	-	0.6-0.7	沈黙文・R 磨面文	Ⅵ	赤褐色	外周に黒・黄化付着
51-74	31-74	Ⅷ Hf 2	Ⅱ	深 鉢	(25.0)	(31.1)	-	0.6-0.7	L 磨面文	Ⅵ	赤褐色	黄化付着
51-75	31-75	Ⅷ Gk 1	Ⅱ	深 鉢	(24.2)	(30.9)	-	0.7-0.8	R 磨面文	Ⅵ	赤褐色	外周に黒・黄化付着
51-76	32-76	Ⅷ Ho 4	Ⅱ	深 鉢	-	(36.5)	18.6	0.8-1.6	L 磨面文	Ⅵ	赤褐色	赤褐色
51-77	32-77	Ⅷ He 1	Ⅱ	深 鉢	(18.2)	(19.7)	(9.5)	0.7-1.0	R-L・L-R刺線文・磨面・沈黙文	Ⅵ	赤褐色	赤褐色
51-78	32-78	Ⅷ Ha 2	Ⅱ	深 鉢	18.2	17.6	10	0.6-0.8	L 磨面文	Ⅵ	赤褐色	赤褐色

第16表 8区遺構外出土土器計測値一覧(2)

単位:cm 測定値:() 検存積:()

図号	写真番号	出土地点	層位	群 類	計 測 値						文様と施文方法	分類	色 沢	備 考
					口 径	高 度	底 径	器 厚	器 厚					
67-79	32-79	IX H 3	黄土	#	22.4	49.5	12.6	0.9~1.1		R-L線位	VI	橙	外周に環・炭化物付着、底面磨	
67-80	32-80	IX Gg	II	#	(21.8)	20.2	(8.6)	0.8~1.6		L 胴赤文	VI	にぶい黄褐色	内周面に條付着	
67-81	32-81	IX Gb	II	#	(16.0)	(16.5)	(7.2)	0.5~0.8		L-R線位	VI	浅黄	水磨面	
68-82	33-82	IX Hf 4	II	#	(33.4)	51.3	15.2	0.4~1.5		L-R線位	VI	にぶい黄褐色	#	
68-83	33-83	IX Hf 4	II	#	28.0	(43.0)	9.8	0.7~1.6		L-R線位・斜位	VI	にぶい黄褐色	底面磨、條付着	
68-84	33-84	IX Hm 4	I	#	(24.0)	28.4	11.4	0.6~1.1		L 赤赤文	VI	赤褐色・黄褐色	條付着	
68-85	33-85	IX H 2	II	#	(26.8)	(29.3)	-	0.4~0.5		L-R線位・押圧線文	VI	にぶい黄褐色	外周炭化物付着	
68-86	34-86	IX Gc 3	II	#	(39.0)	(15.3)	-	0.6~0.7		L-R線位・斜位・押圧線文	VI	暗赤褐色	#	
68-87	34-87	IX Hj	黄土	#	(26.0)	(22.0)	-	0.6~0.7		L-R線位・斜位・押圧線文	VI	黒褐色・にぶい黄褐色	#	
68-88	34-88	IX Gg 3	II	#	14.9	(13.5)	-	0.6~0.9		L-R線位	VI	明暗褐色	#	
68-89	34-89	トロンチP	I	#	(22.0)	(19.5)	-	0.4~0.7		L-R線位・L 胴赤文	VI	黒褐色・にぶい黄褐色	#	
68-90	34-90	X Hc 2	II	#	(20.4)	(10.0)	-	0.6		L-R線位	VI	にぶい黄褐色	#	
68-91	34-91	IX Gg 4	II	#	(23.9)	35.0	11.4	0.4~0.8		L-R線位・斜位	VI	黄褐色・明褐色	水磨面	
68-92		X Hd 3	II	#	(24.2)	(13.0)	-	0.5~0.7		L-R線位・斜位・線位	VI	にぶい黄褐色	外周條付着	
68-93		トロンチP	I	#	(25.8)	(13.6)	-	0.6~0.9		L-R線位	VI	にぶい黄褐色・明褐色	外周炭化物付着	
68-94		IX Gb	黄土	#	(31.6)	(14.5)	-	0.6~0.7		L-R線位・斜位	VI	にぶい黄褐色・明褐色	#	
68-95	35-95	IX Hc 3	II	#	(34.8)	(26.7)	-	0.7~0.9		R-L線位・斜位	VI	赤褐色・黄褐色	#	
68-96	35-96	X Hb 1	I	#	36.5	48.4	13.0	0.5~2.1		R-L線位	VI	にぶい黄褐色	胴代底・外周條付着	
68-97	35-97	IX Hb 4	II	#	(23.0)	(31.2)	-	0.6~0.8		L-R線位	VI	赤褐色・にぶい黄褐色	#	
68-98	35-98	X Hb 2	II	#	22.3	23.8	10.5	0.7~1.0		R-L斜位	VI	にぶい黄褐色	水磨面・外周環・炭化物付着	
70-99	35-99	IX Hb 4	II	#	(25.0)	(13.8)	-	0.6~0.8		L-R線位・底面にきざみあり	VI	黄・暗褐色	外周條付着	
70-100	35-100	IX Ha	黄土	#	(25.0)	(7.5)	-	0.6~0.7		L-R線位・押圧線文	VI	黄褐色・暗褐色	#	
70-101	36-101	IX Ge 2	II	#	(26.5)	(15.0)	-	0.5~0.8		L-R線位・押圧線文	VI	灰白	#	
70-102	36-102	IX Gb	黄土	#	(35.2)	35.7	-	0.7~0.9		R-L線位・山型の突起にきざみあり	VI	にぶい黄褐色・暗褐色	#	
70-103	36-103	IX Gc 4	II	#	15.2	27.6	(9.6)	0.5~0.8		施文・ナゲ突線のみ	VI	にぶい黄褐色	外周條付着	
70-104	36-104	IX He	II	#	(26.8)	(18.9)	-	0.6~0.8		L-R線位・線位	VI	黒褐色・暗赤褐色	内周面に條付着	
70-105	36-105	IX Ho 3	I	#	(35.4)	59.0	15.5	0.9~1.6		L-R線位	VI	黄・にぶい黄褐色	胴代底・炭化物付着	
70-106	37-106	IX Ho 4	II	#	(22.6)	(35.0)	(12.0)	0.6~1.0		施文・ヘラチグ施文・突起にきざみあり	VI	暗赤褐色	胴代底	
71-107	37-107	IX Im 3	I	#	(27.6)	(32.0)	-	0.3~0.9		L-R線位・斜位・押圧線文	VI	にぶい黄・暗褐色	内周に炭化物付着	
71-108	37-108	IX Hg 3	II	#	(29.4)	(24.9)	-	0.4~0.9		L-R線位	VI	暗赤褐色・暗褐色	外周炭化物付着	
71-109	37-109	IX J 1	II	#	(28.0)	(28.8)	-	0.5~0.8		L-R線位・線位	VI	にぶい黄褐色	外周條付着	
71-110	38-110	IX Gb 2	II	#	(26.2)	(19.5)	-	0.5~0.8		L-R線位・斜位・ピタシ痕取り付の施文	VI	暗褐色	外周炭化物付着	
71-111	38-111	IX I 1	I	浅黄		(8.4)	3.6	0.5~0.7		L-R線位	VI	赤褐色	内周に條付着	
71-112	38-112	IX Hc 1	II	暗褐色	(34.0)	(13.7)	-	0.7~0.8		L-R線位・斜位・線位	VI	黄・暗褐色	外周炭化物付着	
71-113	38-113	IX He 1	I	#	(26.0)	(24.9)	(8.0)	0.6~0.8		R-L線位	VI	赤褐色・にぶい黄褐色	#	
71-114	38-114	IX Hf 2	II	#	(23.9)	(14.8)	-	0.7~0.8		R-L線位・線位	VI	にぶい黄褐色	外周條付着	
71-115	38-115	X Ie 1	II	#	(26.5)	(22.0)	-	0.5~0.8		L-R線位	VI	にぶい黄褐色	炭化物付着	

みられる。器形は胴部上半に最大径をもつものが圧倒的に多く、口縁に最大径をもつものは少ない。前者の口縁部はくの字状に外反するものが多く、特に頸部付近の膨らみが大きいものほど強く屈曲する。後者の口縁部は外反気味に直立する傾向がみられる。(101)は第IV群第4類土器にみられるモチーフと同様な弧状に展開する文様が押圧縄文によって表出されている。

第4類土器 (第67～71・74～78図・写真図版31～36・38・49～52)

本群のなかでも最も出土量の多い縄文のみ施文される土器を一括した。口縁部無文帯と胴部の地文部が横走る沈線によって区画されるもの(72・406・415・440～444・446～449)・区画されずに口縁部が無文帯となるもの(77・84・88～90・92・94～96・115・450～457・459・460・489・490)や全面に縄文のみ施されるもの(79・81～83・91・93・97～99・102・104・105・111～114・458・461～483)とがみられる。器形は大型の深鉢形土器を主体とし、小型のものや鉢形土器も出土している。口縁に最大径をもつものでは、口縁が内湾気味に直立するものと外反気味に直立するものとがみられるが前者が圧倒的に多数をしめる。胴部上半に最大径をもつものでは、ゆるやかに外反するもの・外反気味に直立するもの・内湾気味に直立するものがみられる。また胴部中央付近に最大径をもつものでは、口縁部が内湾するものが多く、大型のものほど屈曲が強い。全般に、口縁・胴部付近に最大径をもつものには平口縁が多く、胴部上半に最大径をもつものでは山形・波状を呈するものが多い傾向にある。

第5類土器 (第70・79図・写真図版37・53)

ハケ目状の沈線が施される土器を一括した。入組状・渦巻状の曲線的に施されるもの(492～495・497・498)と縦位の直線的に施文されるもの(106・496・499～501)とがみられる。前者が胎土・焼成ともに良好で堅密な土器であるのに対して、後者のそれは極めて不良で脆く粗雑な作りとなっている。

第6類土器 (第70・78図・写真図版36・52・53)

無文土器を一括した。口縁が内湾気味に直立するもの(491)・外反気味に直立するもの(487・488)・ゆるやかに外反するもの(485・486)・くの字状に強く外反するもの(103・484)がみられる。器表面は縦・横・斜め方向に研磨され、全般に堅密な土器が多い。

第VII群土器 (第54・80図・写真図版30・47)

弥生時代に属する土器を一括した。壺形土器(70)・甕形土器(71・363)が出土している。当区出土遺物のなかでも最も少量の出土である。壺形土器の頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁

は直線的に外傾する。頸部には刻み目が全周し、変形工字文間の瘤状の盛り上がり部分にも刻み目状の刺突が多数施されている。瘤状の盛り上がり箇所は残存部分では2個であるが文様構成を考えると3個配されていたものと思われる。胎土には金雲母が多量に含有され、器表面は光沢をおび焼成も良好な丁寧に作られた土器である。内外面ともに僅かに煤の付着が認められる。

変形土器は2個体分出土したが復元されたのは1点のみである。いずれも口縁部には交互刻突文が施されている。(71)の胴部には口縁部直下より縦位の捺糸文が施されるのに対して、(363)では頸部に浅い沈線による連弧文が描かれ、その直下より縦位の捺糸文が施されている。いずれも内外面に煤の付着が顕著である。

(2) 小型・ミニチア土器 (第81・82図・写真図版54~56)

小型土器・ミニチア土器などを一括した。小型土器には主体的な文様展開がみられるものと無文のものが出土している。全量を掲載した。

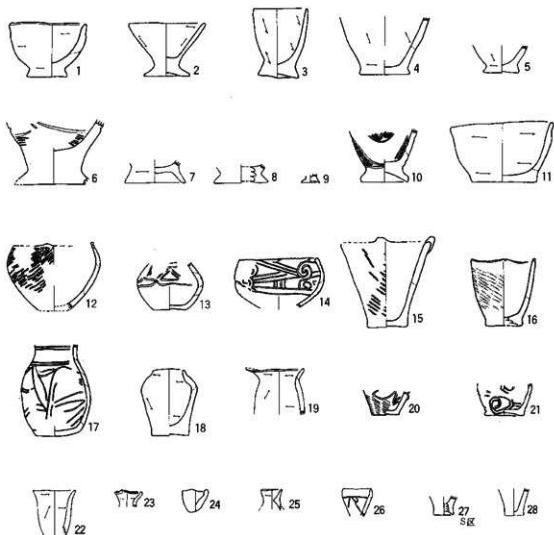
小型土器

1. 無文土器 (1~5・11・18・43~45)

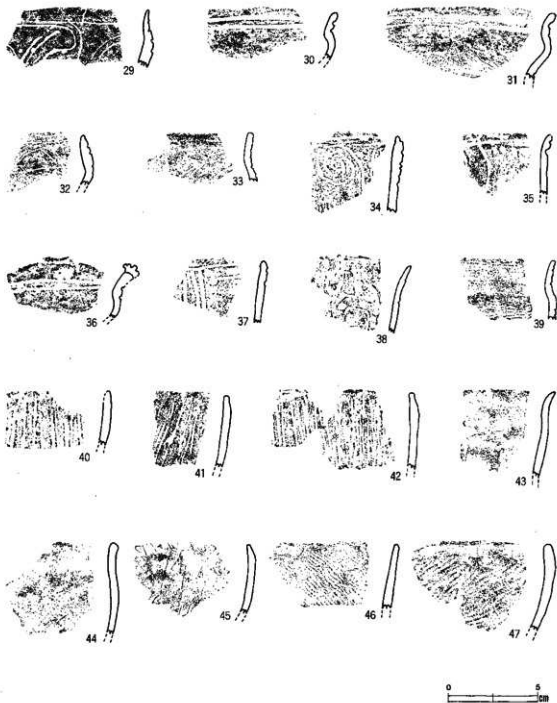
鉢型土器・台付土器・壺形土器が出土している。器面が丁寧に研磨されており、全般に堅密

第17表 小型土器・ミニチア土器計測表

図版番号	器名	出土地点	器種	口径	高			文様と施文方法	色	備考	
					口縁部	胴部	全高				
81-1	24-1	IX Gd 3	II	小型鉢形	(6.8)	6.2	(4.7)	0.5-1.0	無文	赤褐色・暗褐色	焼成し
81-2	24-2	IX Hg	I	小型台付	(8.6)	6.0	(5.2)	0.5-1.8	無文	灰褐色	内外面煤付着
81-3	24-3	IX Hf 1	II	小型鉢形	4.3	5.5	3.2	0.2-1.3	無文	暗褐色	焼成し・底面凹
81-4	24-4	IX Go 1	II	—	(4.8)	(4.6)	0.6-0.8	無文	灰褐色	焼成し	
81-5	24-5	IX Ha 2	II	—	(3.0)	4.0	0.6-0.9	無文	明赤褐色	外縁部付着	
81-6	24-6	IX Hb 3	II	—	(5.1)	(5.8)	0.8-0.5	T-R線文・沈線文	明赤褐色	外縁部付着・穴貫通	
81-7	24-7	IX Gj	II	—	(1.7)	(6.8)	5.5	無文	明赤褐色	底面凹・焼成し	
81-8	24-8	IX Gd 4	II	脚	—	(1.7)	(6.2)	4.5	無文	明赤褐色・暗赤褐色	削り残
81-9	24-9	IX Hm 4	I	脚	—	(6.9)	3.0	0.2-0.5	無文	暗褐色	焼成し
81-10	24-10	IX Gd 2	II	—	(5.7)	(5.4)	0.6-1.2	T-R線文・沈線文・底面凹	無文	赤褐色・黒褐色	外縁部付着・底面凹
81-11	24-11	IX Gj	I	底面	11.6	6.7	7.0	0.4-1.2	無文	暗褐色	外縁部付着
81-12	24-12	IX Gd 2	I	底面	(8.8)	(7.4)	—	0.2-0.7	T-R線文・沈線文	赤褐色	外縁部付着
81-13	24-13	IX Gf	底面	—	(5.1)	—	(3.9)	0.5	沈線文・底面凹	赤褐色	外縁部付着・底面凹
81-14	24-14	IX Hf	I	底面	(8.8)	(5.4)	—	0.3-0.5	沈線文・口縁部付着	赤褐色	外縁部付着・底面凹
81-15	24-15	IX Gd 2	II	小型鉢形	(7.1)	7.7	(3.2)	0.4-0.6	無文	赤褐色	外縁部付着
81-16	24-16	IX Gf	I	底面	(7.2)	7.5	(4.2)	0.4-1.2	T-R線文・底面凹	赤褐色	外縁部付着・底面凹
81-17	24-17	IX Gd	底面	—	(10.1)	4.8	0.4-0.6	沈線文・地文無し	淡黄色・明赤褐色	焼成し	
81-18	24-18	IX Hb	I	底面	(3.2)	7.5	(4.2)	0.2-1.2	無文	灰褐色	外縁部付着
81-19	24-19	IX Gd 2	II	—	(6.6)	(5.0)	—	0.2-0.6	無文	灰褐色	外縁部付着
81-20	24-20	IX Gf 2	II	—	(3.7)	3.0	0.2-0.6	—	無文	赤褐色	外縁部付着
81-21	24-21	IX Gn 2	II	—	(3.3)	(2.3)	0.4	—	無文	赤褐色	外縁部付着
81-22	24-22	IX Hf 2	II	—	(4.8)	(5.1)	—	0.2-0.6	無文	赤褐色	外縁部付着
81-23	24-23	IX Hb 3	I	—	3.1	(1.8)	—	0.4	無文	赤褐色	外縁部付着
81-24	24-24	IX Go 1	II	—	2.9	2.6	0.3	0.5-0.7	無文	赤褐色	外縁部付着
81-25	24-25	IX Hc	底面	—	(2.4)	(2.4)	—	0.2-0.5	無文	赤褐色	外縁部付着
81-26	24-26	IX Hb 1	II	—	(3.2)	(3.1)	—	0.4	沈線文・地文無し	赤褐色	外縁部付着
81-27	24-27	IX Hf	底面	—	(2.6)	(2.2)	—	0.6	無文	赤褐色	外縁部付着
81-28	24-28	IX Hg 1	II	—	(2.8)	(2.0)	0.5-0.6	無文	赤褐色	外縁部付着	



第81図 遺構外出土遺物 小型・ミニチュア土器(1)



第82図 遺構外出土遺物 小型・ミニチア土器(2)

な土器である。台付土器の器形には、台部より内湾気味に直立する碗状のもの(1)と外反気味のもの(2)、コップ状を呈するもの(3)などの種類がみられる。19の口縁部は一部片口状を呈する。

2. 文様が施されるもの(6・10・12~17・20・21・29~42)

鉢型土器を主体とし、浅鉢・壺形土器も出土している。施文される文様には、沈線文が描かれるもの(13・14・17・20・21・29~34・36~42)、磨消線縄文が展開するもの(6・10・35)、地文の縄文のみのもの(12・15・16・46・47)がみられる。7・8の台付土器は、台部のみの出土であり文様は不明である。沈線によって文様が描かれる土器には、口縁部付近に数条の横走沈線が施されるもの(7・30・31・36・39)と胴部に入組状・渦巻状に施され、幾何学的文様が表出されるもの(13・14・20・21・29・32~35)、胴部全体に縦の八ヶ目状に沈線が施されるものの種類がみられる。17の壺形土器には、口縁部と頸部に横走する沈線が施され、胴部には断面形がV字状を呈する鋭利な沈線が特に規則性もなく施されている。35の口縁直下には並列する刺突が施されている。

ミニチア土器(9・22~28)

8点の出土である。鉢型土器(22・24・26~28)・壺形土器(23・25)・台付土器(9)が出土している。無文のものが多く文様が施されるのは26の1点のみである。26は口縁部に横走する沈線を施し、胴部には山形を呈する沈線が描かれている。22・23・25の器面は丁寧に無文研磨されている。

(3) 土製品

当区で出土した土製品は前述した土製品に比べ極めて少量の出土である。足型付土製品1点・土偶2点・動物型土製品1点・腕輪型土製品1点・環状土製品1点・耳飾1点・ボタン状土製品2点・鐙形土製品8点・三角形土版1点・土錘3点・円盤状土製品33点・形状不明のもの1点の総計55点が出土している。出土状態には傾向性やきわだった特徴が認められなかった。

1. 足型付土製品 (第83図・巻頭原色写真図版)

当区南側の8S区。IX If 4グリット2層から出土している。踵部分が欠損しているものの左足指の圧痕が明瞭に押圧されている。特定の遺構や伴出遺物はなく、単独の出土である。(評明は後載の鑑定・分析、滝沢村・湯舟沢遺跡の足型土製品一熊谷常正、足は心の器一平沢弥一郎、の項を参照)

第18表 足形付土製品計測表

()…推定値 ()…現存品

図版番号	写真番号	出土地点	層位	計測値 cm			重量 g	色調	備考
				最大径	最大幅	最大厚			
83-1		区Ⅱ4	Ⅱ	(3.6)	5.6	1.2	33.4	明褐色	土版高田原付着・左足跡

2. 土偶 (第83区・写真図版57)

いずれも板状を呈する土偶である。2の上半身には乳房、下半身にはへそを意匠したと思われる丸い粘土が貼りつけられている。細い沈線による正中線は僅かに曲るものの、頸部から乳房とへそを通り脚部へと至る。また肩部から乳房外側を通り脚部へと同様な沈線が施されている。背面にも同様な沈線が施されている。両肩部には径3mmと太い穿孔が施されている。両肩部は欠損している。3は両脚部と左肩部が欠損している。肩部には径4mmと太い穿孔が施され三角形を呈する頭部正面及び両側面には径3mm程の刺突が施されている。正面の両肩部中間には、刺突痕が認められる。特に文様は描かれていないが、正面股部中央には女性の表現とも思われる一条の細い刻みが縦に施されている。全身の煤の付着が顕著に認められる。

第19表 土偶計測表

図版番号	写真番号	出土地点	層位	計測値 cm			重量 g	色調	備考
				最大径	最大幅	最大厚			
83-2	57-2	区Ⅱa 3	Ⅱ	7.1	(4.0)	1.5	26.7	にぶい黄土	偏付着・縦沈線・両肩部欠損
83-3	57-3	区Ⅱa 4	Ⅱ	(5.9)	(3.7)	1.4	19.6	にぶい黄土	偏付着・縦に穿孔・左側面・両側面欠損

3. 動物型土製品 (第83区・写真図版57)

四肢のうち三肢が欠損しているが、前肢に比較し後肢は太く作られている。特に文様は施されておらず、部分的に粗い研磨が施されている程度の極めて粗雑な作りである。尻尾部には棒を差し込んだと思われる孔が残存する。

第20表 動物形土製品計測表

図版番号	写真番号	出土地点	層位	計測値 cm			重量 g	色調	備考
				最大径	最大幅	最大厚			
83-4	57-4	区Ⅱa 3	Ⅱ	5.6	2.2	22.2	にぶい赤褐色	三肢が欠損・縦文(部分的に研磨)	

4. 腕輪形土製品 (第83区・写真図版58)

断面が長楕円形を呈し、幅の広い厚手のものである。欠損している為明確な形状は不明であるが現存部より推定するとかなり大形のものと思われる。文様は施されておらず、全体が丁寧に研磨されており、胎土・焼成ともに極めて良好である。

第21表 腕輪形土製品計測表

図録番号	写真番号	出土地点	層位	計測値 cm			重量 g	色調	備考
				外径	内径	厚さ			
83-5	5K-5	YK Co 4	II	5.4	1.7	(3.8)	(61.4)	黒褐色	断面研磨されている。

5. 環状土製品 (第83図・写真図版58)

ドーナツ形を呈する板状の土製品である。文様は施されておらず、全体が丁寧に研磨されており、胎土・焼成ともに良好である。

第22表 環状土製品計測表

図録番号	写真番号	出土地点	層位	計測値 cm			重量 g	色調	備考
				外径	内径	高さ			
83-6	5K-6	YK Co	出土	(6.0)	(2.0)	1.1	15.9	黒	横付蓋・無文。

6. 耳飾 (第83図・写真図版57)

滑車形を呈し、上下両面の中央部が凹む。凹み部分には貫通する小孔を穿っている。極めて丁寧なつくりのもので部分的に朱が残存するところから、全面に施されていたものと思われる。

第23表 耳飾計測表

図録番号	写真番号	出土地点	層位	計測値 cm			重量 g	色調	備考
				外径	内径	高さ			
83-7	57-7	YK Op 2	II	1.5	0.3	1.0	1.3	灰白	全面赤褐色・中央部穿孔。

7. ボタン状土製品 (第83図・写真図版57)

2点出土しているが、いずれも欠損品である。8は三日月状の断面形を呈し中央部に、径2mmの小孔が認められる。文様は施されておらず全体が丁寧に研磨されている。煤の付着が顕著である。9は半円状の断面形を呈する豆粒状のもので煤の付着が極めて顕著である。

第24表 ボタン状土製品計測表

図録番号	写真番号	出土地点	層位	計測値 cm			重量 g	色調	備考
				外径	内径	厚さ			
83-8	57-8	IX In	出土	2.1	(1.3)	0.5	1.4	にがい黄褐色	片側凹・中央に穿孔。
83-9	57-9	YK Hm 4	I	(1.3)	1.5	0.6	1.4	にがい黄褐色	

8. 鐮形土製品 (第84図・写真図版58)

完形品2点・推定復元可能なもの2点・欠損品4点の計8点が出土している。胴部に文様を有するもの(10~12・17)と無文のもの(13~16)とがみられる。文様には、細かい連続刺突文が縦・横の二列に施されるもの(10)・渦巻状の曲線沈線が描かれるもの(11)、細かい連続する刻み目が縦に施されるもの(12)・直線状の沈線と沈線間に刺突が施されるもの(17)など

の種類がみられる。無文のものは、いずれも丁寧に研磨されている。本土製品の形態上の特徴は、8点のうち7点について(10~16)頂部に小孔を有することである。また形態上の特徴のほかに、8点全ての内外面に煤の付着が認められる。

第25表 鐮形土製品計測表

図録番号	写真番号	出土地点	層位	計 測 値 cm			重量 g	色 調	備 考
				高 さ	最大幅	厚 さ			
84-0	58-10	埋 Hm 3	I	2.6	4.4	0.4	35.8	にじい黄褐色	内外面付着・後縁割突片・上部に貫通孔
84-11	58-11	IX Hn	I	(4.9)	3.5	0.5	(30.4)	にじい赤褐色	内外面付着・後縁状沈線文・上部に貫通孔
84-12	58-12	埋 Gc 1	II	4.1	3.2	0.6	17.7	にじい黄褐色	内外面付着・上面と下面縁・後縁突片・上部に貫通孔
84-15	58-13	IX Gd	表土	(3.4)	2.7	0.5	(7.6)	雑	内外面付着

9. 三角形土板 (第84図・写真図版58)

板状の三角形を呈する土製品であるが、一部欠損箇所もあることから形態については断定できない。特に主体的な文様は描かれておらず、片面に筋状の沈線が認められるほかは無文である。全体に僅かではあるが煤の付着が認められる。土器破片の二次加工とは認め難い。

第26表 三角形土板計測表

図録番号	写真番号	出土地点	層位	計 測 値 cm			重量 g	色 調	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
84-18	58-18	IX Gh 2	II	(8.0)	(5.1)	1.5	31.0	雑	無文

10. 土鍾 (第84図・写真図版58)

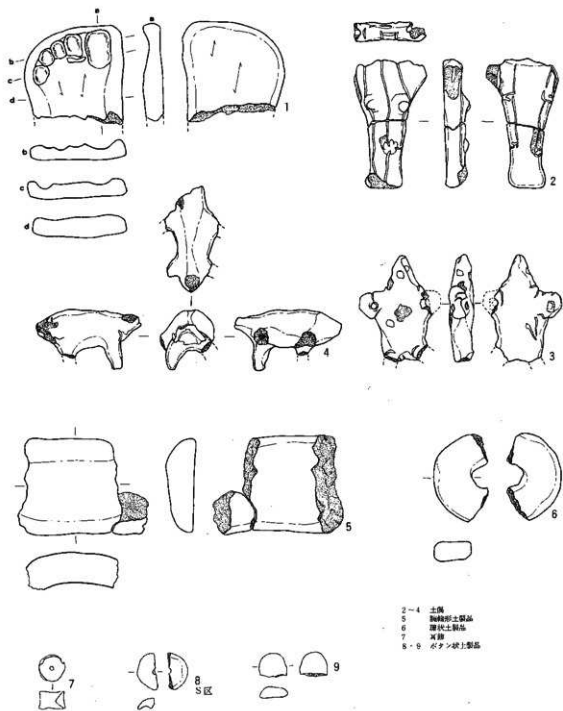
丸味をおびた紡錘形を呈し、側面には溝が全周する。短軸中央部に小孔を有し、文様は施されず全体が丁寧に無文研磨されている。

第27表 土鍾計測表

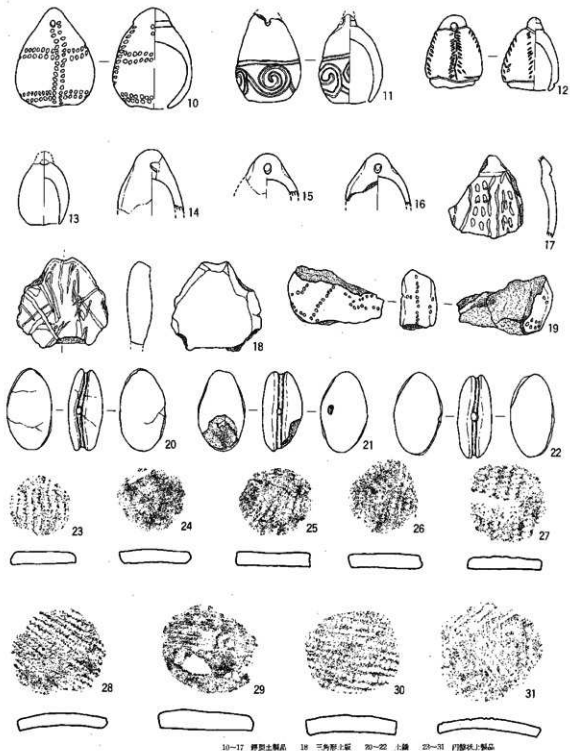
図録番号	写真番号	出土地点	層位	計 測 値 cm			重量 g	色 調	備 考
				最大長	最大幅	厚 さ			
84-20	58-20	埋 Hm 4	II	4.5	2.5	1.9	19.7	褐色	側面に溝が全周・短軸中央に小孔有
84-21	58-21	埋 Gk		4.5	2.6	2.3	22.3	にじい黄褐色	# # #
84-22	58-22	埋 Hc	II	4.6	2.7	1.9	20.6	黒褐色	# # #

11. 円盤状土製品 (第84・85図・写真図版59)

土器破片を加工して円盤状に加工した土製品である。当区では33点出土しているが打ち欠きだけのものは少なく、丁寧に研磨されたものと粗雑なものとの差はあるものの、全周または一部周縁を磨ってあるものが28点と圧倒的に多い。利用している土器破片の部位は、底部を利用したものが2点(29・41)のみで他は全て深鉢形土器の胴部付近を利用したものである。文様は地文の細文のみが圧倒的に多いが沈線が施されたものも7点出土している。



第83図 遺構外出土遺物 土製品(1)



第84图 遺構外出土遺物 土製品(2)

0 — 5 cm

8 区



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



円盤状土製品



第85図 遺構外出土遺物 土製品(3)

第28表 円盤状土製品計測表

図版番号	写真番号	出土地点	部位	計測値 cm				重量 g	色調	備考
				径	径	厚	高さ			
84-21	59-23	埴 Gg 2	II	3.5	3.2	0.7	11.2	にぶい焼	L-R・外面磨付番	
84-24	59-24	埴 Gb 2	II	3.9	3.5	0.6	12.6	焼締	L-R・外面保多量付番	
84-25	59-25	埴 Gg 1	II	4.1	3.6	0.7	15.0	焼	L-R・外面保多量付番	
84-26	59-26	埴 Gg 1	II	4.3	3.7	0.7	15.4	にぶい焼	L-R・外面保付番	
84-27	59-27	埴 Gf 4	II	4.5	4.3	0.7	16.4	焼締	L-R・R-L・外面保付番	
84-28	59-28	埴 Gg 1	II	5.3	5.0	0.5	23.3	明赤焼	L-R・外面保付番	
84-29	59-29	埴 Gg 2	II	5.5	4.6	1.0	31.8	明焼	底面平・留蓋番	
84-30	59-30	埴 Gg 1	II	5.2	4.6	0.8	29.0	明焼	L-R・外面保付番	
84-31	59-31	埴 Gb 2	II	5.6	5.2	0.7	26.9	にぶい・黄焼	L-R・外面保付番	
85-32	59-32	埴 Gb	赤土	2.8	2.6	0.7	7.0	明赤焼	R-L	
85-33	59-33	埴 Gn 2	II	3.2	2.6	0.7	10.0	明焼	L-R・外面保付番	
85-34	59-34	IX Hb	II	3.5	3.2	0.7	10.0	にぶい・黄焼	L・R・L・外面保付番	
85-35	59-35	埴 He 1	II	3.8	3.0	1.0	13.5	焼	L []・外面保付番	
85-36	59-36	IX Hg 4	II	3.9	3.2	0.9	13.3	にぶい・黄焼	R-L・外面保付番	
85-37	59-37	埴 Gn 1	I	3.9	3.5	0.8	14.8	明焼	L-R	
85-38	59-38	IX Hb	I	4.0	3.5	0.6	12.8	にぶい・焼	L-R・平行紋	
85-39	59-39	IX Gf 2	II	4.1	3.6	1.0	16.8	にぶい・黄焼	L-R・外面保付番	
85-40	59-40	埴 He		4.1	3.5	1.2	17.7	明赤焼	外面保	
85-41	59-41	埴 Go 4	II	5.1	4.3	1.0	24.0	焼	底面平・外面保付番	
85-42	59-42	IX H 赤		4.0	3.4	0.8	15.7	焼	L-R・外面保付番	
85-43	59-43	IX Hb	I	4.2	3.9	1.1	23.4	焼	L-R・外面保少量付番・沈線文	
85-44	59-44	埴 Gn 2	II	4.4	3.5	0.8	19.0	明赤焼	L-R・外面保少量付番	
85-45	59-45	IX Go 4	II	4.5	3.7	0.8	18.5	明焼	L-R・外面保少量付番	
85-46	59-46	IX Hb 3	II	5.2	4.6	0.7	22.8	焼締赤焼	L-R・外面保付番	
85-47	59-47	IX Hg 2	II	4.6	3.7	1.0	23.4	明赤焼	L-R	
85-48	59-48	IX Hd 3	II	4.3	3.5	1.1	20.6	焼	L・R・L・L	
85-49	59-49	IX Gb	赤土	4.3	4.0	0.9	20.9	明焼	L-R・外面保付番・沈線文	
85-50	59-50	IX Hg	II	4.6	4.1	1.0	25.4	明赤赤焼	R-L・外面保付番	
85-51	59-51	IX Hg 3	II	4.5	4.7	0.9	23.0	焼	R-L・外面保付番・沈線文	
85-52	59-52	IX Hg 3	II	4.2	4.3	0.6	15.5	にぶい・焼	L-R・外面保少量付番	
85-53	59-53	IX Ha 4	I	4.6	4.4	1.0	25.8	焼締	L-R・外面保少量付番・沈線文	
85-54	59-54	IX Hf	II	5.1	4.3	0.8	20.0	にぶい・黄焼	L-R・沈線文	
85-55	59-55	埴 He 1	II	4.9	4.8	1.0	32.6	焼	L-R・外面保少量付番・沈線文	

12. その他の土製品 (第84図・写真図版58)

前述した土製品類とは違い形態・使用目的等の全く不明な土製品が1点出土している。板状を呈し、両面及び側面には列点状の刺突が施されており、側面から穿孔された跡が残存している。研磨された部分も僅かに認められるが、全般に粗雑なつくりで胎土・焼成ともに不良である。

(4) 古銭 (86図・写真図版56)

4枚出土している。銭銘のわかる3枚はいずれも「寛永通宝」である。他の1枚は錆による腐食の為不明である。

第29表 古銭計測表

調査番号	写真番号	出土地点	層位	銭名	計					重量g	備考
					輪外径	輪内径	穴径	孔	外縁厚		
M-1	56-1	VII Gk 4	II	寛永通宝	2.4	2.0	0.7	0.7×0.65	0.1	2.6	
M-2	56-2	VII GJ 3	II	寛永通宝	2.45	2.0	0.75	0.7×0.7	0.1	2.7	
M-3	56-3	VII Go	表七	寛永通宝	2.5	2.0	0.7	0.6×0.6	0.1	2.8	
M-4	IX Mg 1	I	(不明)		2.2	1.8	0.8	0.65×0.65	0.1	2.5	鉄銭



第86図 遺構外出土遺物 古銭

(5) 石器

本調査区からは、土器の量に比し、石器の出土は少ないと言える。刃の無いもの・明瞭な使用のあとが認められないフレーク・チップの類等をぞいた出土点数は、N・S区あわせて134点にすぎない。N区とS区とでは、その土器出土量から考えての石器の出土の割合や、質・組成などに有意の差はみられなかった。以下、器種別に一括して述べる。

A. 石鏃 (87図1～20・22～25・写真図版60)

形態：無茎のものと有茎のものがある。無茎のものは、その平面形が、側辺の直線的な二等辺三角形を呈するもの(1～4)と、先端から側辺・基部にかけて丸みを帯びたもの(5～11・23～25)とがある。前者において1は凹基の形を成し、2～4は平基である。後者においては5～7が凹基、8～10・23はやや凸基気味である。24・25は平基。11は基部欠損の為不明。有茎のものは、その平面形が、基部両翼が斜めで左右非対象のもの(13～17)、基部が平らで左右対象のもの(19・20)、柳葉形のもの(22)とがある。

調整：刃部両縁とも両面から調整しているものがほとんどである。その中でも先端から基部への順に調整を施しているものが最も多い(1～5・15・17～20・22)。他には片側の刃が片刃のもの(6)、刃部調整順序が基部から先端へのもの(11)、手順が任意のもの(7・9・10・16)、同・乱れて不明のもの(8・12～14)などがある。又、23は先端から円を描くように、刃部調整がひとまわりする。

破損：やはり先端部破損が多く、6例ある(2・7～9・16・17)。基部欠損は4例(11・17・20・22)。他に刃部一側縁が破損しているもの(13)がある。

石質：頁岩9点、チャート4点と頁岩系が最も多く用いられ、次に玉髓9点が多い。他には

黒曜岩・安山岩各1点が用いられている。

アスファルト等：明瞭にアスファルト等が付着しているものは無い。唯一、20のみ、わずかにそれらしきものの痕跡が、基部に不明瞭にうかがえるのみである。

B. 石鏃 (第87図21・写真図版60)

硬質頁岩製のものが1点のみ出土している。つまみ部は欠失しており、先端もいくらか破損しているが、断面三角形の両側縁に両面から刃をつけていることがうかがえる。若干の磨減が認められる。

C. 石匙 (第88図26～32・写真図版60)

縦型のもの5点(26～30)、横型のもの2点(31・32)の出土をみた。

縦型のものでは、26・30が両縁とも刃部片側加工である。26はつまみ部から先端部方向へ、30はつまみ部から先端部をへて、再びつまみ部方向へまわりするように調整を施している。27は両縁とも片面から刃をつけた後、一部裏からも調整している。調整の順はすべてつまみ部から先端方向へとなっている。29は片方の側縁は両面から無秩序に調整しており、軽く凹曲線を描く残る側縁は片面からの調整である。27は片方の刃を片面から調整し、残る片方を裏から片面調整している。それも片方は先端部からつまみ部方向へ、片方は逆につまみ部から先端部方向へと刃をつけていっている。石質はいずれも頁岩である。

横型のもの2点ともごく薄い剥片を用いており、刃部もつまみに対向する長辺一辺にのみ形成されている。調整は2点とも刃部形成面に向けて右から左方向へ施されている。31はチャート、32は硬質頁岩を用いている。

D. 掻器 (第88図33～第90図62・写真図版60・61)

石器素材の縁辺部に刃部を形成しているものを一括して本項で述べる。形態的には削器・掻器・円形掻器・挟入掻器・石筥などが含まれる。機能的にはいずれも削る・掻くの範囲を顕著に越えないものであろう。形態順に以下に詳述する。

a. 縦長のもの(33～35・49～52・56～59)

33・34は鋭角を成す側縁に細かい調整を施して刃部を形成したものである。但し、34の下端のみ、大きな調整を入れてやや鈍角な刃をつけている。35および49～52は両側縁から下端にかけて片面から調整を施し、角度の大きい刃を形成している。56は側縁のみに、主として片側から角度の大きい刃をつけており、縦長の剥片を用いてはいるものの使用形態は横位のものであろう。57は挟入刃部を持つ。58は両側縁に片面加工の刃部を持つが、その加工は相対する反

対面から施されている。59は両側縁のみ細かい片面調整による刃部を持つ。以上はいずれも頁岩系の素材を用いている。

b. 石筵様のもの (36~38・47・48・53・54)

47・48は上端が尖るが、他は上下端とも平らなものである。使用痕と思われる細かい破痕が48・54の下端に顕著であるが、他には不明瞭であり、削器的に用いられていたものと思われる。48と53はほぼ片面からのみ、他は全て両面加工のものである。38が玉髄の他は、全て頁岩系の素材を用いている。

c. 横長のもの (39~45・60・61)

39~44および61は素材の一辺に細かい調整によって、比較的鋭角の刃部を持つものである。但し、39の両面調整となっている。45・61も同様のものであるが、刃部が小さく調整も若干粗である。60は同じ形態だが大まかな調整により大きな角度の刃部を持つ。以上は全て頁岩系の素材を用いている。

d. 円形のもの (46)

形は円形を呈するが、刃部は全周の1/4ほどである。片面からの調整により形成されている。凝灰岩である。

e. 異形のもの (55)

T字形をしている。全周に両面調整により鋭角の刃をつけている。珪質頁岩製。

f. 大型のもの (62)

平行四辺形の長辺の一つ、バルブ側に大きく両刃の刃部を持ち、他の長辺には細かい両面加工による鋭角な刃部、短辺の一つには同じく細かい加工による鈍角の刃部を形成している。撻器、削器的用途の他に、石斧の用途も考え得る。硬質頁岩製。

E. 石斧 (第91図63~第92図82・写真図版61・62)

20点出土しているが、長10cm前後の中型のものが多く、6cm以下の小型のものも3点出土している(68~70)。形は基部があまりすばまらず長方形に近いもの(66)もあるが、ほとんどは基部で狭くなり、尖るものもある(70)。又、横断面は角を持つものがほとんどで、やや丸みをおびるものは63・70・75・78・82の5点である。縦断面は左右対象をなし、若干片刃に近いもの(66・69・82)も、研ぎなおしによるものと思われる。残存しているもので基部が打撃により磨滅しているものは65~67・73・74・77・78。刃部に使用痕が認められるものは70・80・81を除くすべてである。65は折損した基部片を磨石として再利用しており、78も同様のものと思われる。

F. すり石・凹石・敲石 (第92図83~第96図124・写真図版62・63)

凹石・敲石として使用されているものにも、ほとんどの場合多少の差はあれ、すり石としての使用痕が認められる。使用痕別に見ると出土した全42点のうち、すり石としての使用痕のもの21点(50%)、敲石としての使用痕が併せ認められるもの10点(24%)、凹石としての使用痕が併せ認められるもの5点(12%)、3種の使用痕を全て持っているものは6点(14%)となっている。形態的には細形長楕円のものと同様に近いものは単目的(すり石)に、楕円形のもの多目的という傾向はあるが、明確なものではない。材質的にはほとんどが安山岩質のものであり、石材による使いわけは数量化し得なかった。

a. すり石 (83・84・86・88~93・95・108・110~114・117・118・122~124)

長楕円形のもの断面三角形を(83~88)、棒状に近いものは断面四角形を(89~91)呈する。球形に近いものには小型のもの(110~113)もある。

b. すり石兼敲石 (85・87・94・96・97・103・116・119~121)

長楕円形三角断面の一縁辺を敲部として用いているもの(85・87・94)と楕円形の上下端を敲部として用いているもの(96・97・103・120・121)とがある。116は周辺部を、119はほぼ全面を任意に敲部として使用している。

c. すり石兼凹石 (100・101・104・105・109)

楕円形の偏平な一面に1個のみ凹部を有するもの(100・101・104・105)と球形すり石の両面に各1個凹部を持つもの(109)とがある。

d. 三用途石 (98・99・102・106・107・115)

いずれも楕円形の偏平面に凹部を持つ。複数持つもの(98・99・102)と1個のもの(106・107・115)とがある。凹部を複数持つものは長円形を呈し、上下端を敲部として使用する。凹部1個のものは偏平な円形から楕円形であり、全周を敲部として用いている。

G. 石皿・台石 (第96図125~第98図131・写真図版63)

石皿として用いているうちに自然に中央が凹んで来たもの(125・129)とはじめから中央を凹ませて製作してあったもの(126~128・130)とがある。128は裏面を凹石として兼用しているが、凹部の位置から破損後の転用と思われる。全て脚等は認められない。131は台石であり、両面とも使用されている。

H. 石刀 (第98図134・写真図版63)

外見上背に当たる部分は四角く平らとした、逆ぞりの刀である。刃先から19cmまで均一にいいいに刃を磨き出し、あとはそのまま四角く面を落として柄としてある。柄および柄頭は面取り

の加工痕と思われる傷が、横位・縦位に無数に残り、刃先の対面の大きなカーブを描く面にも同様の加工痕が認められる。対わたり19.2cm柄部10.4cm（うち柄頭2cmほど）の粘板岩製である。

1. その他の石製品（第98図132・133・写真図版63）

132は壺形石器と呼べるものである。径4cm・深さ2.3cmほどの袋状の内容を持つ。胴部は球形であり、口縁部に一条の沈線をめぐらせて口唇部を隆起させている。内外面ともていねいに磨かれてあり、加工痕は残らない。凝灰岩製。133は破損した小片であり、全体形も用途も不明である。最も広く残っている面に全面磨痕が残っており、輝石安山岩を用いていることから、周辺に脚を造り出した石皿の一部とも考えられる。

第30表 8区遺構外出土石器計測値一覧(1)

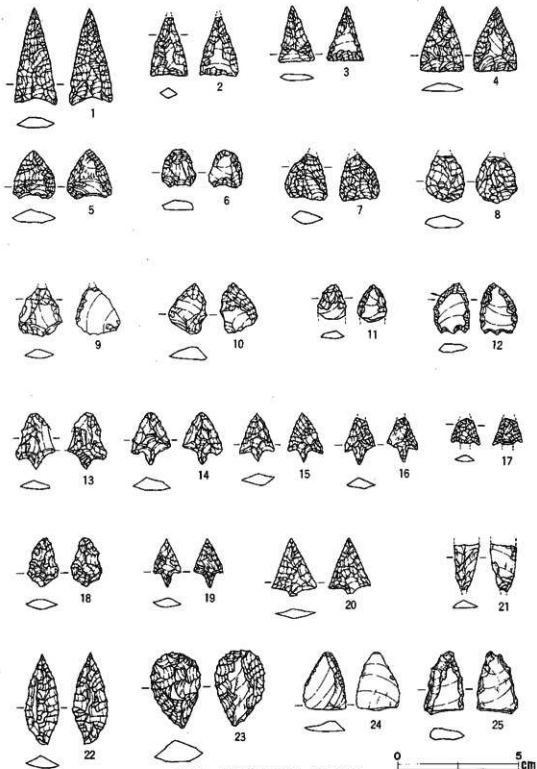
No	出土地点	層位	種 類	法 量				欠 損	石 質	備 考	図説No.	写真No.
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)					
1	種Gd-1住	表層	磨石	10.2	8.8	7.6	1189.9		安山岩		6-4	20-4
2	種Gd-2住	1層	石斧	7.2	4.3	1.7	76.2		輝綠閃石岩		6-9	20-9
3	種Ca住		石斧	5.2	4.0	1.2	37.1		砂岩		10-10	
4	種Gpピット	1層	石匙	2.7	4.5	0.7	6.0		硬質頁岩		36-9	21-9
5	種8号焼土	1層	磨石	4.8	5.5	1.2	34.2		硬質頁岩		39-43	22-43
6	種8号焼土	種8号焼土	磨石	3.7	6.0	1.1	21.0		種8号焼土		39-44	23-44
7	種Gp号焼土	種Gp号焼土	磨石	4.7	4.3	2.1	62.4		花崗岩		39-53	23-53
8	種Gp号焼土	種Gp号焼土	磨石	12.5	5.6	3.9	308.6		種Gp号焼土		49-54	22-54
9	種Gp号焼土	種Gp号焼土	磨石	6.3	4.9	0.7	17.2		硬質頁岩		49-65	23-65
10	種Gp号焼土	種Gp号焼土	磨石	5.3	4.7	3.9	146.5		輝石安山岩		41-72	22-72
11	S区	表層	凹基無蓋物	4.1	1.8	0.4	2.1		硬質頁岩		87-1	60-1
12	種G	種G	凹基無蓋物	(2.2)	1.5	0.5	(1.4)	先端部	種G		87-2	60-4
13	種Gf 4	種Gf 4	磨石	2.3	1.5	0.2	0.8		硬質頁岩		87-3	60-3
14	種Gd 1	種Gd 1	磨石	2.6	1.8	0.3	1.3		硬質頁岩		87-4	60-2
15	種Ca 2	種Ca 2	凹基無蓋物	2.0	1.8	0.5	1.8		玉髓		87-5	60-5
16	種Ca 2	種Ca 2	凹基無蓋物	1.6	1.4	0.4	1.2		チャート		87-6	60-6
17	種Hb 1	種Hb 1	凹基無蓋物	1.9	1.7	0.5	1.8	先端部	玉髓		87-7	60-7
18	種Gp 2	種Gp 2	凹基無蓋物	(2.0)	1.6	1.0	2.0		玉髓		87-8	60-12
19	種Hc 4	種Hc 4	磨石	(2.0)	1.8	0.4	1.5		玉髓		87-9	60-8
20	種Ha・b	種Ha・b	磨石	2.1	1.6	0.6	1.5		チャート		87-10	60-10
21	種Gd 1	種Gd 1	磨石	(1.43)	1.2	(0.30)	(0.7)	基部	玉髓		87-11	60-13
22	種Go 2	種Go 2	凹基無蓋物	2.1	1.5	0.3	1.2		チャート		87-12	60-9
23	種Gp 4	種Gp 4	凹基無蓋物	2.3	1.65	0.45	1.2	刃部	玉髓		87-13	60-17
24	種Gf	種Gf	凹基有蓋物	2.35	1.6	0.6	1.4		玉髓		87-14	60-16
25	種H	種H	磨石	2.0	1.5	0.6	0.9		硬質頁岩		87-15	60-15
26	種He 1	種He 1	磨石	1.9	1.3	0.45	0.6	先端部	種He 1		87-16	60-19
27	種Gd 2	種Gd 2	凹基有蓋物	(1.05)	1.25	0.25	(0.4)	先端部・基部	玉髓	メスアツキ 上付	87-17	60-20
28	種Hn 4	種Hn 4	凹基有蓋物	2.0	1.3	0.4	1.2		真鍮石		87-18	60-11
29	種Hm 1	種Hm 1	凹基有蓋物	2.0	1.2	0.4	0.6		玉髓		87-19	60-18
30	種Ho 3	種Ho 3	凹基有蓋物	2.3	1.8	0.95	1.6	基部	安山岩		87-20	60-14
31	種Hk 1	種Hk 1	磨石	1.9	1.1	0.9	1.0	つまみ部	硬質頁岩	刃部磨滅	87-21	60-25
32	N区	表層	凹基有蓋物	3.8	1.4	0.45	2.1	基部	種N区		87-22	60-21
33	種Gg	種Gg	凹基無蓋物	3.2	2.1	0.9	5.0		硬質頁岩		87-23	60-22
34	種Hj 1	種Hj 1	磨石	2.4	1.8	0.4	1.2		硬質頁岩		87-24	60-24
35	種Hm	種Hm	凹基無蓋物	2.65	1.7	0.5	2.7		チャート		87-25	60-23
36	種Hf 3	種Hf 3	磨石	6.8	4.2	1.1	32.2		硬質頁岩		88-26	
37	種Hc	種Hc	磨石	(6.2)	2.2	0.6	9.6	つまみ部	種Hc		88-27	60-30
38	種Gb 4	種Gb 4	磨石	(5.1)	2.5	0.8	(7.9)	先端部	硬質頁岩		88-28	60-27
39	種Gd	種Gd	磨石	7.5	4.3	1.1	26.1		硬質頁岩		88-29	
40	N区	種N区	磨石	5.5	2.6	0.6	10.2		硬質頁岩		88-30	60-26
41	種Gd 3	種Gd 3	磨石	3.2	4.7	0.6	7.3		チャート		88-31	60-32
42	種Hf 2	種Hf 2	磨石	4.0	4.6	0.5	10.9		硬質頁岩		88-32	60-31
43	種Gg 3	種Gg 3	磨石	7.0	3.5	1.0	24.3		硬質頁岩		88-33	60-34
44	種Cd 4	種Cd 4	磨石	8.0	3.3	1.1	32.2		種Cd 4		88-34	60-37
45	種Gp 2	種Gp 2	磨石	6.3	2.4	1.45	16.9		硬質頁岩		88-35	60-38
46	種Cd 4	種Cd 4	磨石	6.2	3.1	1.3	27.4		種Cd 4		88-36	60-35
47	種Gh 4	種Gh 4	磨石	3.7	2.6	0.6	6.8		チャート		88-37	60-36
48	種Gf 4	種Gf 4	磨石	(1.81)	2.45	0.6	(2.3)	先端部のみ	玉髓		88-38	60-20

第30表 8区遺構外出土石器計測値一覧(2)

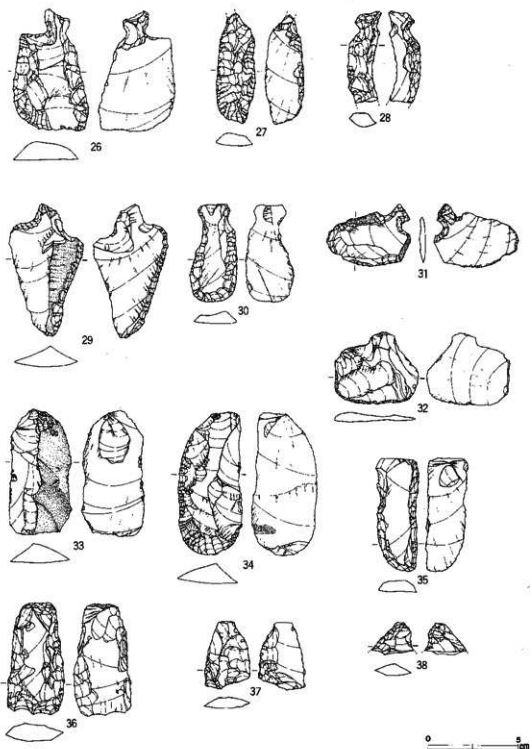
No	出土地点	層位	層 級	測 量				次 須	石 質	備 考	図版No.	写真版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
49	Ⅷ Gf 2	II層	礫石	4.1	7.5	1.05	35.0			89-39	61-48	
50	IX Ha 4	II層	#	3.1	4.8	1.0	16.2		埋藏層	89-46	61-47	
51	IX Ha 1	表二	#	3.8	5.0	1.0	26.3		埋藏層	89-41	61-41	
52	Ⅷ Ha	#	#	4.3	5.5	1.9	25.8		#	89-42	61-42	
53	Ⅷ Gf 2	表土	#	5.4	6.7	1.1	48.1		埋藏層	89-43	61-46	
54	Ⅷ Hf	II層	#	5.4	6.4	1.3	32.5		埋藏層	89-44	61-29	
55	IX G	表土	#	5.8	4.5	1.2	26.0		埋藏層	89-45	61-40	
56	IX Hb 1	II層	#	5.2	4.6	1.1	27.6		埋藏層 円形	89-46	61-43	
57	IX Ha 3	II層	#	5.3	2.1	1.5	14.4		埋藏層	89-47	61-44	
58	Ⅷ Ha 2	#	#	7.6	3.1	1.5	4.0		埋藏層 使用済み	89-48	61-45	
59	Ⅷ G	表土	#	5.1	3.4	1.2	16.0		埋藏層	90-49	61-56	
60	Ⅷ Gp 4	II層	#	5.3	3.2	0.9	19.0		埋藏層	90-50	61-53	
61	IX Hf	I層	#	5.3	2.9	0.0	18.9		埋藏層	90-51	61-55	
62	IX Ha 1	表土	#	5.7	2.8	1.1	17.5		埋藏層	90-52	61-61	
63	Ⅷ Hb 3	#	#	5.95	3.2	1.2	24.8		#	90-53	61-61	
64	Ⅷ Gc 4	II層	#	5.9	3.5	1.5	35.6		使用済み	90-54	61-69	
65	IX Hg 3	#	#	3.9	3.2	0.5	4.6		埋藏層 丁字形	90-55	61-59	
66	X Hc 3	#	#	7.8	2.6	1.0	24.7			90-56	61-60	
67	IX Hb	I層	#	5.9	3.6	1.1	25.1		埋藏層 ノッチ	90-57	61-50	
68	Ⅷ Hc 1	II層	#	4.3	2.6	0.6	8.1		埋藏層	90-58	61-58	
69	Ⅷ Gg	#	#	5.5	4.0	1.1	26.4		埋藏層	90-59	61-52	
70	IX Hf	#	#	4.3	2.9	0.7	13.7		埋藏層	90-60	61-57	
71	IX Gc 1	II層	#	5.4	3.0	1.1	19.4		チャート	90-61	61-54	
72	Ⅷ Gb 1	II層	#	12.8	7.0	2.2	175.0		埋藏層 大型	90-62	61-62	
73	X Hc-X Hb	II層	心弁	12.2	4.2	2.5	222.0	中央部	火山岩	91-63	61-75	
74	X Hc 3	II層	#	10.3	4.0	2.4	143.0	方部	埋藏層	91-64	61-74	
75	Ⅷ Hc 1-埋藏	II層	#	5.9 5.9	4.7 4.7	2.7 2.7	113.0 112.6	中央部	埋藏層	91-65	61-77	
76	Ⅷ Ha 3	II層	#	8.1	3.9	2.3	130.0	基部	輝石火山岩	91-66	61-63	
77	IX Hb 1-埋藏?	II層	#	(12.3)	5.3	3.7	(274.0)	中央部	角閃岩	91-67	61-76	
78	Ⅷ Ha	表土	#	5.4	3.4	1.3	(34.6)	方部	埋藏層	91-68	61-68	
79	IX Io 4	II層上	#	5.8	2.4	0.7 0.55	17.7		埋藏層	91-69	61-69	
80	Ⅷ Hc	#	#	6.0	1.9	1.1	17.4		埋藏層 成紋岩質雲石	91-70	61-70	
81	Ⅷ Hc 1	II層	#	7.8	4.4	1.7	93.1		緑色岩	91-71	61-64	
82	IX Gb	#	#	(6.4)	4.3	2.3	(101.5)	方部	埋藏層	91-72	61-71	
83	Ⅷ Hc 2	II層	#	(7.7)	4.4	2.6	(124.2)	#	砂岩	91-73	61-72	
84	IX Hg	I層	#	(7.1)	4.8	2.3	(137.0)	#	埋藏層 成紋岩	91-74	61-73	
85	IX Gb 4	II層	#	(6.5)	3.6	2.2	(83.0)	#	砂岩	91-75	61-65	
86	IX Hb	#	#	(4.3)	3.6	2.5	(32.9)	中央部	埋藏層	92-76	61-67	
87	Ⅷ Gk	#	#	(5.4)	3.9	2.9	(81.5)	#	埋藏層	92-77	61-66	
88	Ⅷ Hc 2	II層	#	(7.3)	4.0	2.6	(117.3)	方部	火山岩	92-78	62-79	
89	Ⅷ Ha	#	#	(5.2)	4.9	2.3	(86.3)	#	輝石火山岩	92-79	62-87	
90	S区	表二	#	(4.4)	6.1	2.8	(86.1)	#	アロプライト	92-80	62-83	
91	IX Hc 3	I層	#	(6.3)	4.3	1.8	(86.6)	#	火山岩	92-81	62-81	
92	IX Gb	#	#	8.9	3.5	2.2	118.8	基部	埋藏層	92-82	62-84	
93	IX Gd	表二	礫石	7.65	4.8	2.5	(141.6)		埋藏層	92-83	62-80	
94	IX Gp	II層上	#	14.8	8.6	4.1	800.0		輝石火山岩	92-84	62-88	
95	#	#	#	(14.3)	7.3	7.3	886.0		火山岩	92-85	62-87	
96	Ⅷ Gp 4	#	#	12.9	6.4	3.2	372.0		輝石火山岩	92-86	62-86	

第30表 8区遺構外出土石器計測値一覽(3)

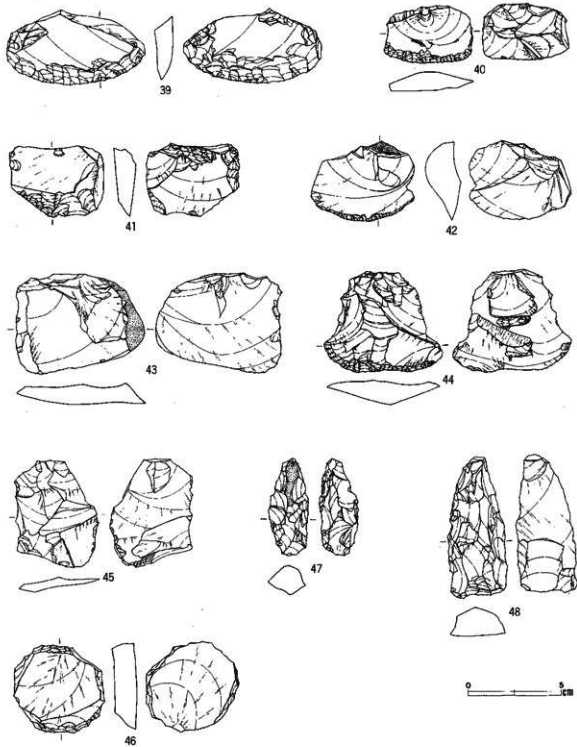
No.	出土地点	層位	種別	測定値				欠損	石	電	備考	図録No.	写真No.
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)						
97	IX Gp	II層上	磨石	12.6	6.6	5.0	576.0				92-87	62-85	
98	Ⅷ Gd 4	II層	#	(7.8)	6.1	4.4	317.0				92-88	62-78	
99	Ⅷ Hn	#	#	13.0	4.7	3.3	305.0				92-89	62-91	
100	IX Hf 3	II層	#	13.7	4.5	3.3	350.0				92-90	62-90	
101	IX Ha 1	#	#	14.0	4.7	3.4	302.0				93-91	62-80	
102	Ⅷ Gg 1	II層	#	(8.0)	2.3	1.9	(52.4)				93-92	62-97	
103	IX Gd	II層	#	14.4	5.8	3.3	512.0				93-93	62-100	
104	Ⅷ Gd 4	II層	#	12.3	6.2	3.0	337.0				93-94	62-99	
105	Ⅷ Gf 2	II層上段	#	4.4	2.3	1.5	17.8				93-95	62-96	
106	IX Ha 3	II層	#	8.0	4.3	3.5	225.0				93-96	62-94	
107	IX Hg 3	II層	#	9.3	4.4	1.8	74.5				93-97	62-93	
108	IX Hf 1	II層	#	6.0	4.5	4.0	151.3				93-98	62-95	
109	IX Hc 1	II層	#	14.9	7.1	3.6	553.0				93-99	62-101	
110	IX Gb	#	#	(20.2)	5.5	3.0	(206.0)				93-100	62-98	
111	IX Hf 4	II層	#	9.5	4.0	2.1	84.5				93-101	62-92	
112	IX Ha 1	#	#	(14.0)	8.0	2.4	(313.0)				94-102	62-107	
113	X Hc 3	#	#	11.1	8.1	5.5	823.0				94-103	62-106	
114	X Hf 1	II層	#	8.9	6.8	4.3	35.5				94-104	62-102	
115	IX Hf 4	II層	#	9.7	8.7	5.5	691.0				94-105	62-104	
116	IX Hc 1	#	#	11.2	7.7	5.0	580.0				94-106	62-105	
117	Ⅷ Hn 1	II層	#	8.1	7.2	5.2	466.0				94-107	62-103	
118	IX Gb			10.3	9.6	6.9	1050.0				95-108	63-110	
119	IX Io 4	II層	#	11.2	9.3	8.1	1190.0				95-109	63-108	
120	Ⅷ Hf			4.6	4.4	(1.7)	(36.9)				95-110	63-111	
121	Ⅷ Hm 4	I層	#	4.4	4.2	3.6	84.3				95-111	63-114	
122	IX Hc 3	II層	#	2.5	2.4	2.0	12.1				95-112	63-112	
123	Ⅷ Hm 4	I層	#	4.5	4.4	3.9	101.2				95-113	63-113	
124	IX G	表層	#	10.1	8.5	5.9	776.0				95-114	63-115	
125	IX Hf 3	II層	#	9.1	8.6	5.5	64.0				95-115	63-118	
126	Ⅷ Hn 3	#	#	8.8	8.2	5.7	616.0				95-116	63-109	
127	IX Hf 1	#	#	9.3	7.0	4.9	506.0				96-117	63-119	
128	IX Gp	II層上	#	13.5	8.6	4.7	880.0				96-118	63-121	
129	IX Ha	II層	#	9.4	8.3	6.3	965.0				96-119	63-117	
130	IX Hb	#	#	9.7	7.3	(2.5)	(285.0)				96-120	63-129	
131	IX Hg 2	#	#	9.6	6.9	4.8	327.6				96-121	63-124	
132	IX Hn 4	I層	#	8.0	(4.3)	5.3	(256.0)				96-122	63-123	
133	IX Hf	II層	#	(6.6)	6.2	1.7	(99.6)				96-123	63-122	
134	IX G	黄土	#	5.8	4.5	1.15	43.7				96-124		
135	Ⅷ Gp 3	石頭	#	(7.9)	7.3	3.2	(185.0)				96-125	63-134	
136	Ⅷ Gb 4	II層	#	(21.4)	10.8	3.1	(925.0)				97-126	63-130	
137	Ⅷ Gf 3 + Ⅷ Gp + Ⅷ Gf	I層	#	(22.0)	22.4	3.2	(270.9)				97-127	63-133	
138	IX Hf 2	II層	#	(29.4)	13.5	3.3	(1818.0)				98-128	63-131	
139	Ⅷ Gp			6.8	5.0	3.3	53.0				98-129	63-128	
140	IX Gc 1	II層	#	(11.7)	8.3	1.7	(236.0)				98-130	63-132	
141	Ⅷ Gp 1	II層上	台石	14.3	13.6	2.6	860.0				98-131	63-120	
142	IX Ho 4	I層	石製品	5.75	8.5	3.4	134.2				98-132	63-126	
143	IX Hf 2	II層	#	(5.0)	3.2	1.0	(52.1)				98-133	63-125	
144	Ⅷ Gb 1	II層	石刀	29.6	5.5	1.9	245.0				98-134	63-127	



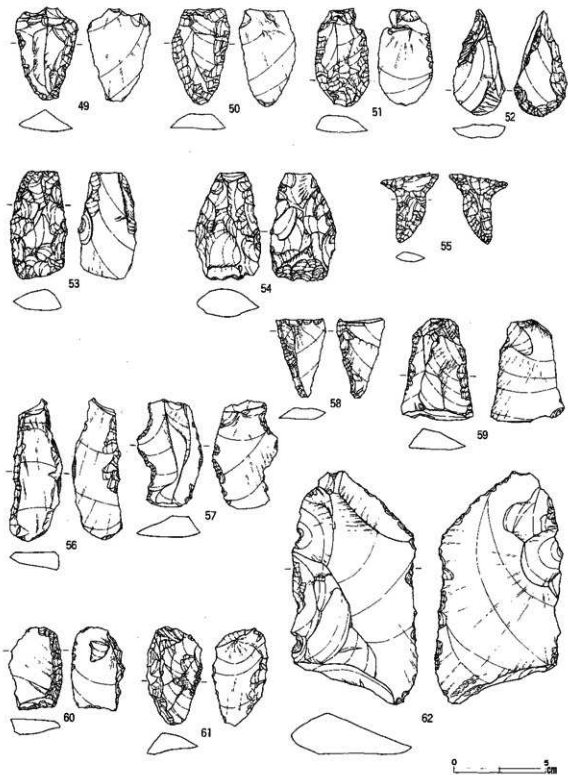
第87图 遼構外出土遺物 石器(1)



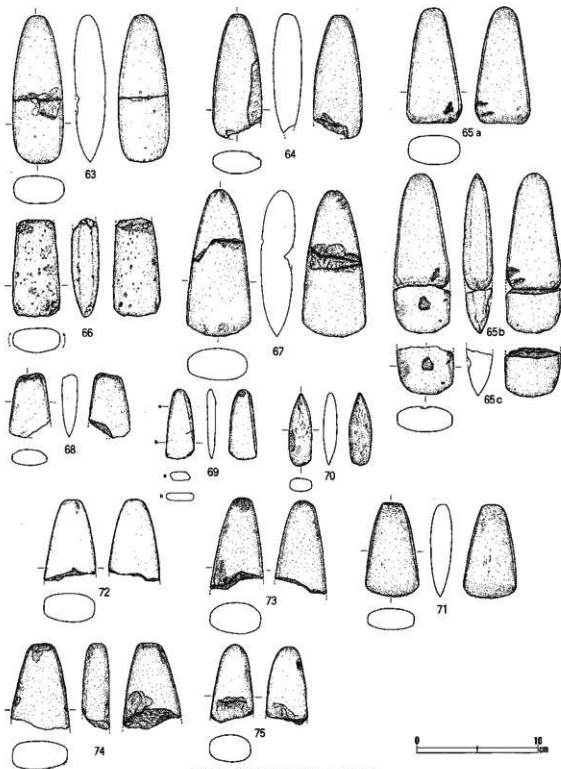
第88圖 遺構外出土遺物 石器(2)



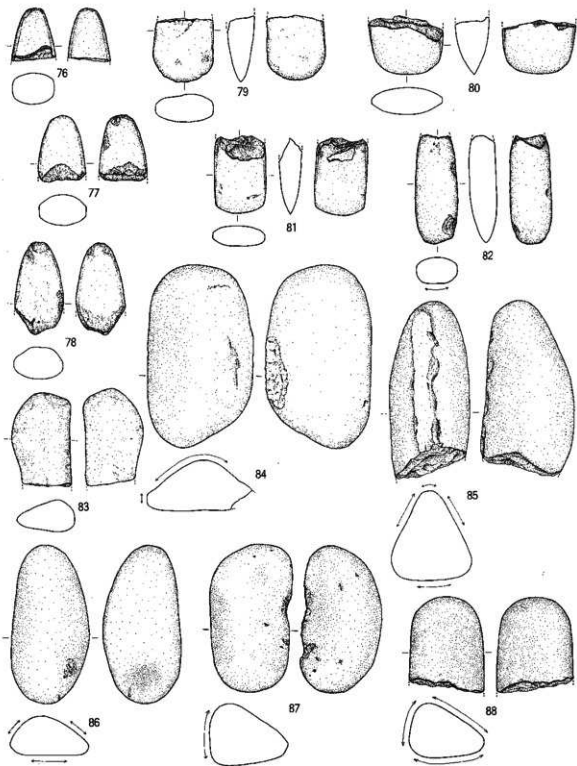
第89图 濠沟外出土遺物 石器(3)



第90図 遺構外出土遺物 石器(4)

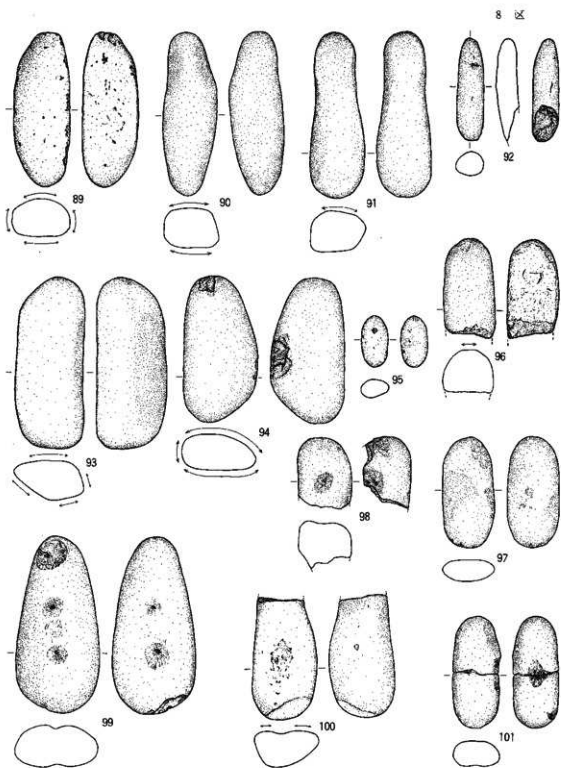


第91圖 遠構外出土遺物 石器(5)

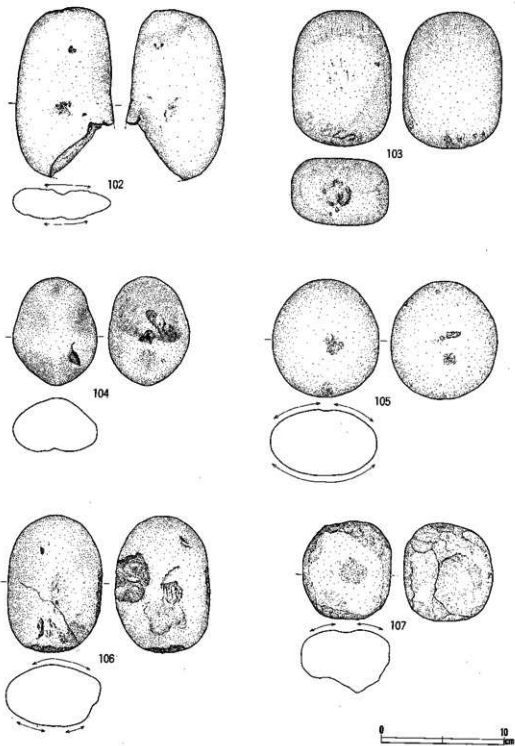


第92圖 遺構外出土遺物 石器(6)

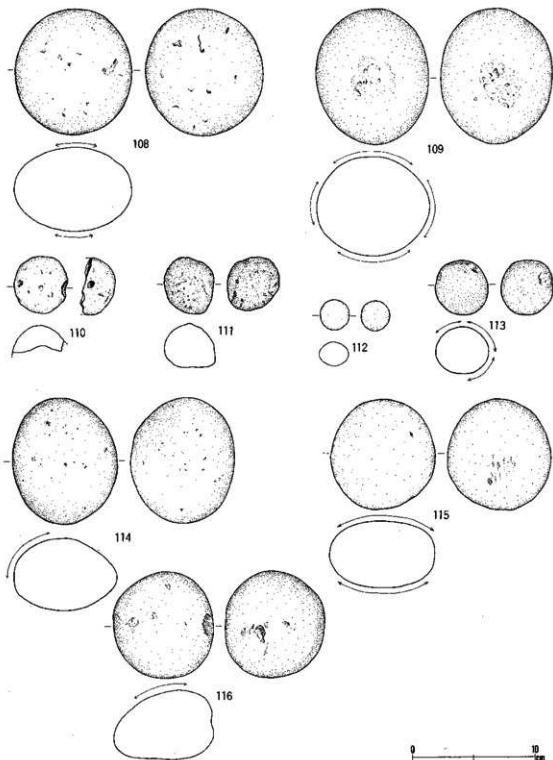




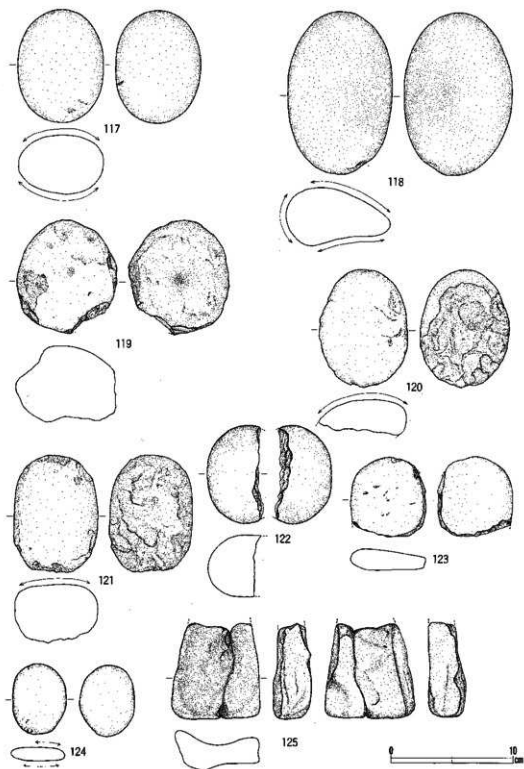
第93圖 遺構外出土遺物 石器(7)



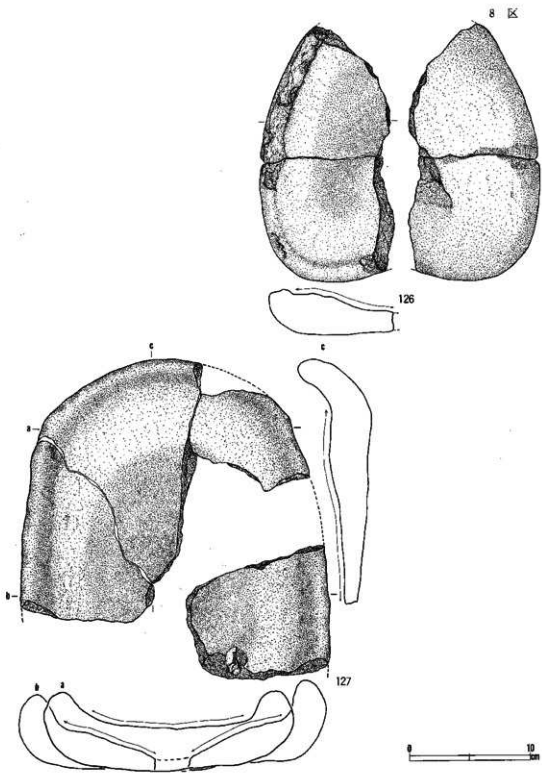
第94圖 遺構外出土遺物 石器(8)



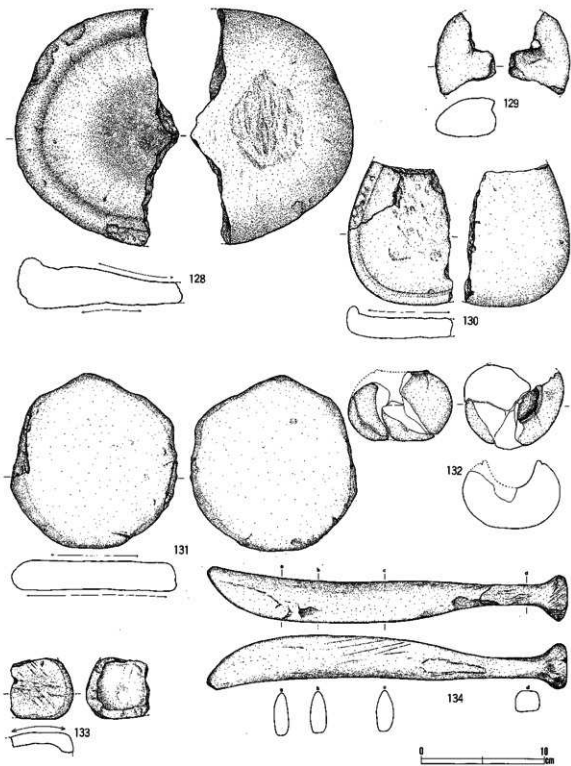
第95図 遺構外出土遺物 石器(9)



第96圖 遼構外出土遺物 石器(10)



第97圖 遺構外出土遺物 石器(11)



第98圖 遺構外出土遺物 石器(12)

III ま と め

1. 遺 構

(1) 竪穴住居址

時期が明確な住居址は、いずれもその時期にバラつきがあり、明確に時期が共通する住居址は無い。立地は5棟のうち2棟がN区台地北端の沢沿いに、2棟が北西隅にあり、Ⅷ Gn 住のみが台地中央寄りに位置する。このⅧ Gn 住居址は、その時期が本調査区上に最も多く散布する土器群とほぼ同一であり、同様の時期と思われる焼土群・ピット群・配石群との関連性は無しとはし得ない。但し、若干の礫が同居の埋土中にあった事実に関しては、後の礫の移動によるものか、配石群との時期差を意味するものなのか、不明である。

第31表 竪穴住居址計測値一覧

	Ⅷ Gd-1 住	Ⅷ Gd-2 住	Ⅷ Gf-1 住	Ⅷ Gf-2 住	Ⅷ Gn 住
形態・規模	(積円形, 4.5×4.3m)	(円形, 径3.6m)	円形, 3×2.4m	円形, 3×2.4m	(円形, 径6m)
床面積	(15㎡)	(10㎡)	5.7㎡	5.7㎡	(27㎡)
柱穴数	(8本)	(7本)	8~9本	5~8本	6本
炉・その位置	長方形石囲炉(中央)	積円形石囲炉(中央南寄)	不足形地床炉(北西寄)	円形地床炉(北寄)	積円形地床炉(北寄)
特 期	Ⅷ Gd-2 住より古い	縄文時代後期前葉	縄文時代後期前葉	Ⅷ Gf-1 住より古い	縄文時代後期前葉

出土遺物：上記住居址の時期決定資料とした遺物は、Ⅷ Gn 竪穴住居址は掘之内Ⅰ式に、Ⅷ Gd-2 およびⅧ Gf-1 竪穴住居址は掘之内Ⅱ式に、それぞれ併行するものと考えられる。

(2) 柱穴列

柱穴の掘り込み層位から判断して、配石その他の遺構より古いものでは無いと思われるが、より新しいものか、同時期のものかは不明である。ベルトの断面からは、竪穴にともなうもので無い事は明白であるが、他の遺構との関連も不明である。配石・焼土・ピットは近くに散在するが、それは他と同様任意の散らばりを示す。埋土からは、他遺構との極端な時期差は考え難いが、新しい遺構の可能性もある。

(3) 焼土遺構

N区の58基の焼土は、縄文時代前期前葉の遺物を出土した第52号焼土遺構を除き、時的にも形態的にも明確に異群を構成し得るものは無く、状況的には殆んどが同時期（縄文時代後期前葉）・同種のものとして扱われる。その分布は、巾30m・長さ65cmにわたって北々西から南々東に、あまり偏り無く分布する。この範囲は、標高190mから192mの傾斜の最も緩やかな面に当り、地形の制約を受けての分布とも考えられる。他の遺構群とは、ピット群の分布とおおむね重なるが、配石群とはそのあり方をやや異としている。焼土群・ピット群・配石群の関連は、配石群の項に後述する。

S区の6基の焼土は、ほとんどS区南西隅の一角に集中する。この周辺はS区においては最も遺物（縄文時代後期前葉の深鉢）が多く出土した区域であり、時的には遺物と同時期の焼土群と考えられる。

(4) 炉 址

N区にて6基の石囲炉を検出している。個々の形態はさまざまだが、完全に石で囲った2基（No 1, No 2）の他は、N区台地の中央から南東部に偏在している。検出はすべてII層上位面、又、6基のうち2基は縄文時代後期前葉の土器を伴っており、他の4基もほぼ同時期のものと考えられる。

(5) 土器埋設遺構

ピットにすっぽりと埋設されたもの（N区第1号）、ピットの中央に埋置されたもの（N区第2号）、石囲炉と一体のもの（N区第5号炉址）、ピットの中央に横たえられたもの（S区第1・2・3号）とあり、S区の類似とN区の不統一が対象的である。時期は、埋設された土器から、いずれも縄文時代後期前葉のほぼ同一の時期のものである。

(6) ピット

1. 小ピット

N区にて56基、S区にて35基の計91基のピットは、深さ50cmから10cm程度までであるが、平面規模は深さに関係なく1m前後と小型のものである。平面形は円形から楕円形、断面形は底面

の広い皿状を呈す。規模・形態等各要素における多少の類分けは可能だが、各要素間の各群には、有意の差・もしくは関連は認められない。(ピット平面形の長軸方向のみは、全くバラバラで類別不能であった。)時期は不明のものがほとんどだが、埋土中から遺物を出土したものは、異なる時期であるという根拠は見出し得ない。但し、N区の幾つかの遺構で重複関係が認められ、それによれば第13号ピットは第16号ピットより新しく、29ピットは30ピットより新しく、32ピットは第29号焼土より古い。又、古い順に第45号ピット・第6号炉址・第46号ピットという重複もある。しかしながら、おおむね焼土遺構同様、縄文時代後期前葉のほぼ同一時期のものと思える。又、人為堆積と考えられるものがN区に若干みられるが(8・20・21・54号各ピット)、詳細は不明である。ただこの4基は規模・形態・断面形もまちまちであり、遺物もともなわず、配置に何ら特殊性が見られない等、本遺跡2区や、当村けや木の平地遺跡(58・59年当村教委調査未報告)にて墓塚と考えられたピット群とは異なるものと思われる。

N区の小ピット群の分布については、配石遺構の項で述べる。

2. フラスコピット

N区にて4基、S区にて1基の、計5基検出されている。開口部上端までのほぼ全体を調査し得たN区第4ピットおよびS区フラスコピットは、やはりⅡ層上位面における検出であり、他の3基も同様であったと思われる。出土遺物は、N区第2・4ピットから出土しており、縄文時代後期前葉の遺構と推定される。但し、第1号フラスコピットは、第13・16号小ピットの下から検出されている。切合は確認出来なかったものの、小ピットが壊されていないことから、第1号フラスコピットは、第13・16号ピットより古いという事は明確である。

3. 溝状遺構

N区にて3基、S区にて2基の計5基が検出された。うちN区の第3号とS区の第1号はⅠ層における検出であり、又、埋土に粉状バミスを多く含む等、周辺他遺構に比し、時期的に新しい様相を持つ。形態的には炭焼用の帯窯にも似るが、焼土・炭化粒等の散布は認められず、用途不明の遺構である。残り3基は陥し穴と推定されるものだが、形態はそれぞれ異なる。検出層位は、N区第2号溝状遺構がⅡ層上位面であり、他の2基は不明である。時期の特定は出来ず、縄文時代のものと思われ得るのみである。

(7) 配石遺構

はじめに、配石遺構の分布に関して、その他遺構群との関連、および土器の分布域との関連

を述べる。

まず顕著に見られるのは、土器分布の濃密な域と、配石のそれとの一致である。これは調査の遺構検出時点から判明していた点であるが、磯群と土器片群とは混然一体となって出土して来るとする認識であった。それら土器群は、整理の結果ほぼ限定される一時期のものであり、配石遺構の構築時期を推定し得る。

次に分布が近いのは、焼土群である。但しこれらは、お互いが任意に散らばりあった結果、多少関連して見える、と言った程度のもとも言い得る。全く配石の無い所に焼土遺構が分布したり、又はその逆の例もあり、何事をも断定し得るものではない。只、配石・遺物・焼土がごく近接して検出された多くの地点で、それらが同一層位・同レベルにあった事は確かである。これは次に述べるピット群との関連でも同様である。

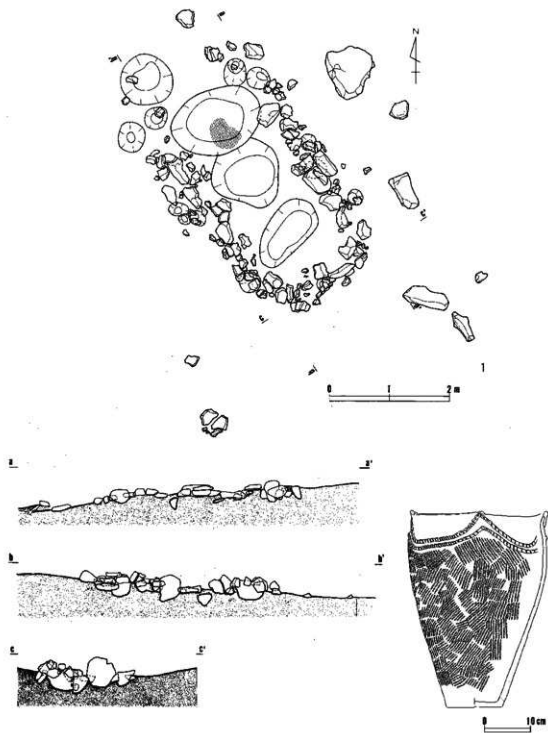
ピット群と配石群の分布に関しては、前述二者とやや異なる。それは、配石群が台地の中央寄り馬蹄形を描くとすると、その中央の空白地帯に入り込むピット群が存在する事である。他の地域において、ピット群が配石群を明確にさせているとは言いがたいが、焼土と配石との関連に比し若干疎になる事は確かである。

以上を端的にまとめると、

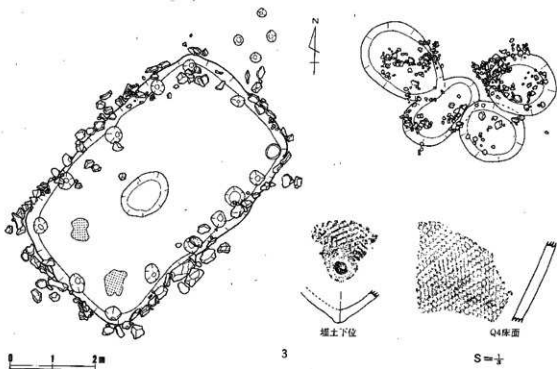
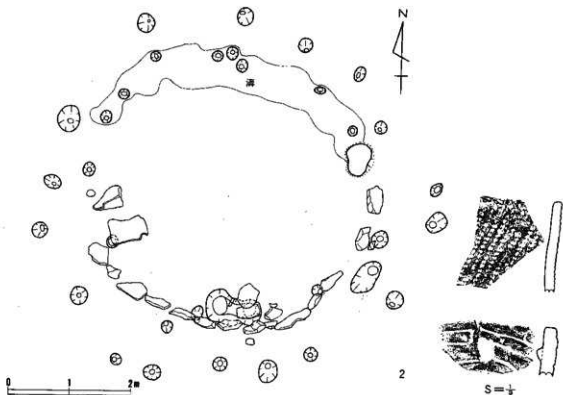
- ①配石群と遺物の分布には密接な関連がある。
- ②配石群と焼土遺構群の分布には、不明瞭ながら弱い関連があると思われる。
- ③配石群とピット群の分布には関連が無いが、もしくはあるとすれば相互によけあうものである。

と言える。

次に、当村教育委員会が現在までに調査した配石遺構との比較をしたい。参考図版1・2はけや木の平田地遺跡(昭和58・59年調査未報告)の配石遺構であり、1はコの字状に石を配した中に、人為堆積の埋土を持つピットが三基並ぶ。ピットの上は焼土におおわれ、焼土下から出土した土器から縄文時代後期前葉の遺構とされた。石列に沿うように柱穴が配されている。2は半円状に石を配し、外に大きく二重に柱穴列がめぐるものである。配石の中からはやはり焼土・炭化粒子が多く検出されている。この遺構の西に接して、円形から楕円のピットが35基かたまってあり、その多くは人為堆積を示すものであった。これも、出土遺物からは縄文時代後期前葉と思われるものである。3は、仏沢Ⅲ遺跡(昭和61年調査当年度報告予定)の、配石をともなう竪穴状遺構である。これは北側に、上部構造として集石を持つピット群(人為堆積を呈す)が配されていた(参考図版2)。仏沢Ⅲ遺跡の配石は、出土遺物から縄文時代前期前葉と推定される。時期は異なれ、上記三例は、いずれも墓塚群、もしくはそれにとまなう葬礼施設と思われる遺構である。



参考図版 1



参考図版 2

共通点として、

- ①墓塚と思われるピットの密集。
- ②上層構造を想わせる柱穴群をともなう配石。
- ③炉とは思えない焼土の、施設（配石）内での存在。

の3点があげられる。これに対し当湯舟沢遺跡8区の配石の特徴は、

- ①性格不明のピットの散在。
- ②他遺構と関連づけ得ない堅穴住居・柱穴列。
- ③他遺構との関連が不明な炉・焼土の散在。

となる。

以上の点から、本調査区の配石・及び周辺遺構群は、

- 葬礼的な性格を持つ遺構とは考えにくい。
- 根拠は弱いながらも、配石・焼土群・ピット群・密に分布する土器群とがセットになった祭礼的空間であった可能性がある。
- 出土遺物からは、遺跡の性格としての宗教性・呪術性は薄かったと思われる。

と結論づけておきたい。

2. 遺 構 外 出 土 遺 物

(1) 土器

当区から出土した土器は縄文時代の各時期及び弥生時代までと多岐にわたっている。なかでも、縄文時代後期に属する土器群が主体となっており、縄文時代早期・前期・中期・晩期と弥生時代のものは極めて少ない。

第Ⅰ群土器

当区において掲載した第Ⅰ群土器は本遺跡全体を通じ類似資料の出土もなく、同一個体と思われるものの、全て破片資料のみであることから明確な時期の断定はできないが、縄文時代早期末葉ムシリⅠ式に併行する時期のものと思われる。

第Ⅱ群土器

本群はいずれも胎土中に多量の繊維が認められる土器である。本遺跡2・3区において同種

の資料が出土しており、縄文時代前期前半大木1式に併行する時期と思われる。

第Ⅲ群土器

最も出土量の少なかった第Ⅲ群土器は、縄文時代中期末葉大木10式に比定される。

第Ⅳ群土器

最大の出土量となった第Ⅳ群土器は、関東地方の堀之内Ⅰ・Ⅱ式、東北地方南半の門前式・南境式・宮戸Ⅰ式、或は東北地方北半の十腰内Ⅰ式等に併行する縄文時代後期初頭から前葉に属する土器群（第1類～第7類）が中心的な存在を占めており、特に第4類土器が圧倒的出土量を占めている。既述のように、遺構外出土遺物として記述した本群の土器は、N区全域に広がる配石遺構群に伴う遺物とみられることから、同遺構は縄文時代後期前葉に構築されたものと考えられる。又本群の土器は後期中葉の時期からは激減する傾向が認められた。

第Ⅴ群土器

縄文時代晩期前葉大洞B—C式に併行する時期のものと思われる。

第Ⅵ群土器

第Ⅲ群土器から第Ⅴ群土器に伴うと思われる粗製の土器群である。第Ⅵ群第4類土器とした72・73は縄文時代中期に属するものと思われる。112・115は縄文時代晩期もしくは弥生時代に属する可能性もある土器と考える。他は第Ⅳ群土器に伴うものと思われる。

第Ⅶ群土器

本群の土器は当区に隣接する3区において多量に出土している弥生時代に属する土器群である。70は中期後半樹形罎式に71・363は後期天王山式に併行するものと思われる。

(2) 石器

A. 器種について

石鏃（刺突具） 無茎のものは、軽い凹基、同凸基、平基のものがある。有茎のものでは、基部が平らにならず、斜めとなっているものが目立つ。

石錐（穿孔具） 1点のみである。

石匙（定形的掘・削具） 縦型のもの5点に対し、横型のもの2点。

播・削器、石筥（含不定形播・削具） 整形意図の見える分類可能なものが多い。ピエスキュー的なものもみられるが、点数が少ないので一括した。

磨製石斧（破碎・削具） 破損しているものがほとんどである。破壊後の粉碎具・播具等への転用も見られる。

すり石・凹石・敲石（打削・粉碎・磨具・播具） 植物性食物加工具と思われるものを一括した。その中にいわゆる断面三角形磨石が1点あり、使用形態が類似するものも数点見受けられた。又、球形の磨石としたもので小型のものは、いわゆる石弾の可能性もある。

その他 石皿の他に石壺(?)、石刀が出土している。

B. 材質について

器種により、特定の材に著しい集中がみられるものとそうでないものがある。石鏃および石斧は後者であり、石鏃は頁岩・玉髓・チャートなどに分散し、石斧は凝灰岩・流紋岩・閃緑岩・砂岩・安山岩等に分散する。これに対し、石匙および不定形播削器としたものは圧倒的に頁岩を用いており、チャート・玉髓等はごくわずかである。又、磨石類や石皿類は、これも圧倒的に安山岩・輝石安山岩・石英安山岩で構成されており、それに若干の凝灰岩・閃緑岩・花崗岩等が用いられている。既して奥羽山系に分布すると思われる岩石で構成されており、若干の粘板岩・チャート・砂岩等のみが北上山系からの搬入品と思われ、石材搬入の為の大きな移動は少なかったものようである。

C. 器種の組成比率について

本調査区では、膨大とも言える土器の出土量に比し石器は極端に少なく、その少ない自体最大の特徴とも言えるほどである。故にその組成を数値化して云々するには不適な資料ではあるが、遺跡の性格をごく大まかに把握するという目的のみを設定して、縄文時代中期後葉から後期前葉を主体とした他遺跡の器種組成比率との比較を、あえて試みた。比較に当っては比率の様相を極力単純化する為に器種を8項目のみとした。d項には不定形打製刃器を主とした播器・削器の類、一部の石筥、f項にはすり石・たつき石・凹み石の類、g項には石皿・台石・一部の砥石の類をそれぞれ一括しており、各遺跡報告書における分類には必ずしも準じていない所もある。石器出土量が少なく、有意性に疑問の大きいものでも、近接する同時期集落(卯遺坂遺跡)などはあえて比較対象としている。

第1群遺跡 (No 1～No 3) 本調査区の石器組成比率に類似する傾向を持つ遺跡。No 2の西田遺跡(紫波町)は時期が異なる(縄文時代中期前葉)が、よく似た傾向を持つ遺跡なので掲

載した。八天遺跡(北上市)も資料点数が少ないが、似た傾向を示す。特徴として、a項(石鏃)、d項(掻・削器類)、f項(磨石類)が、三者とも一定程度の位置を示す組成を持ち、又、石斧も一定量を占めている。No4の大石平遺跡(六ヶ所村)も、h項(石鏃)を除外すればこの群に近いものであろう。

第2群遺跡(No5・No6) 第1群と明確に画し得る様相を呈するものとは言いが、f項が突出する傾向を持つものである。後期の集落と思われる遺跡ではこの群に入るものが多く、1群に比し、より集落的様相が強まるものであろうか。

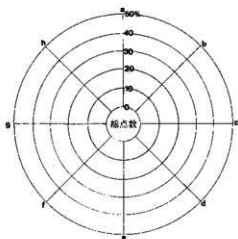
第3群遺跡(No7) d項が突出し、e項(石斧)が少ない様相を示す。掲載はしていないが、郡南村湯沢遺跡(縄文時代中期末葉集落)なども本群に入るものである。後期前葉の類列は探し得なかったが、多くの中期の集落(石鳥谷町大地渡遺跡・江釣子村鳩岡崎遺跡等)が若干似た傾向を示し、必ずしも非集落的傾向の群とは思えない。石斧に関しては、第2群としたNo6、葦窪遺跡(八戸市)も類似する。

第4群遺跡(No8～No10) 石鏃の突出と、磨石類の少なさが特徴である。掲載した3遺跡は主体とする遺物がほぼ同時期のものであるが、No8卯逸坂遺跡(当村)は集落、No9町場Ⅲ遺跡(雫石町)は墓塚群、立石遺跡は配石群と、それぞれ性格を異にする。

以上の分類から、本調査区(湯舟沢8区)の石器組成は、若干集落的様相を持ちながらも、フラスコ形貯蔵穴を数多くともなう安代町水神遺跡や八戸市葦窪遺跡のいわば典型的後期集落とは多少様相を異にし、町場Ⅲ遺跡や立石遺跡などの非日常的性格を持つ遺跡とは大きく異なるものである。短絡的には小ピット群を多くともない、付近に配石遺構を持つ大石平Ⅳ区との類似が、本調査区の性格を暗示するものとも言える。

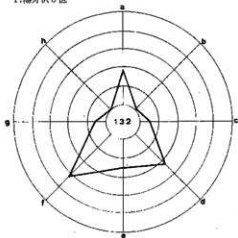
問題点(1)器種の認定 特に掻・削器類としたものの範囲

- 〃 (2)時期の問題 遺構にともなわない多くの石器を、出土土器から推定して蓋然的に時期決定せざるを得ない。
- 〃 (3)遺跡の片寄 陥し穴群・墓塚群など、遺物量の少ない遺構群とは、厳密に比較し得ない。
- 〃 (4)量の不均一 統計的有意性・信頼性の数値化がなじみにくい。

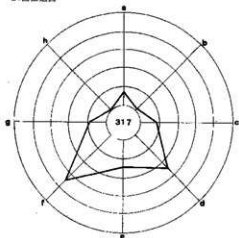


- a : 石器
- b : 石器
- c : 石器
- d : 漆、陶器類
- e : 石斧
- f : 麻石、磨石、凹石類
- g : 石器、白石類
- h : 石器

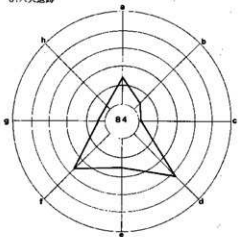
1. 湯舟沢 8 区



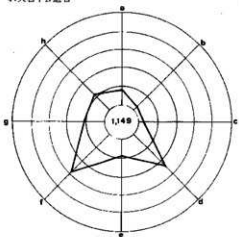
2. 西田遺跡



3. 八天遺跡



4. 大石平川遺石

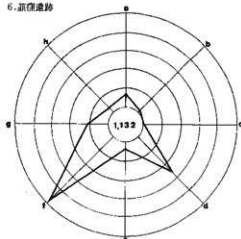


參考圖版 3 遺跡別石器組成 (1)

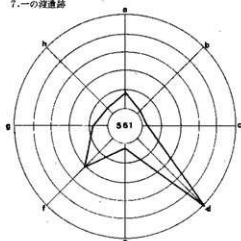
5.水神遺跡



6.須藤遺跡



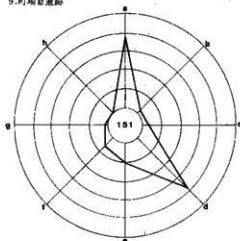
7.一の塚遺跡



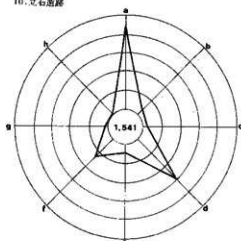
8.卯速坂遺跡



9.町場目遺跡



10.立石遺跡



参考図版 4 遺跡別石器組成(2)

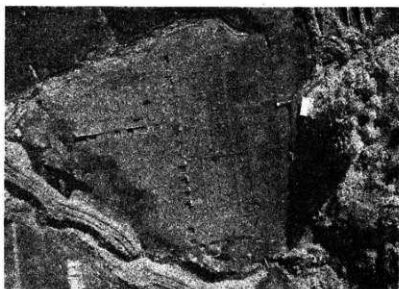
参考・引用文献

- 相原康二 岩手県文化財調査報告書 第56集 大地渡遺跡 昭和56年 岩手県教育委員会
 // // 第70集 鳩岡崎遺跡 昭和57年 //
- 一条秀雄・他 青森県埋文調査報告書 第97集 大石平遺跡 昭和60年 青森県教育委員会
 狩野敏男・他 岩手県文化財調査報告書 第31集 卯遠坂遺跡 昭和54年 岩手県教育委員会
- 坂本洋一・他 青森県埋文調査報告書 第84集 葎窪遺跡 昭和58年 青森県教育委員会
 鈴木優子・他 岩手県文化財調査報告書 第51集 西田遺跡 昭和55年 岩手県教育委員会
 高橋與右衛門・他 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第96集 水神遺跡
 昭和61年 勸岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 中川重紀・他 岩手県埋文センター文化財調査報告書第16集 町場III遺跡 昭和56年
 勸岩手県埋蔵文化財センター
- 中村良幸 人迫町埋蔵文化財報告書 第3集 立石遺跡 昭和54年 大迫町教育委員会
 三浦謙一・他 岩手県埋文センター文化財調査報告書 第2集 湯沢遺跡 昭和52年
 // // 第66集 // 昭和58年
 勸岩手県埋蔵文化財センター

8 区写真図版

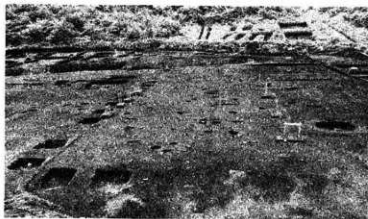


全 景

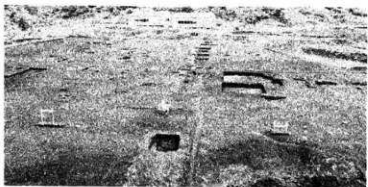


N区全景

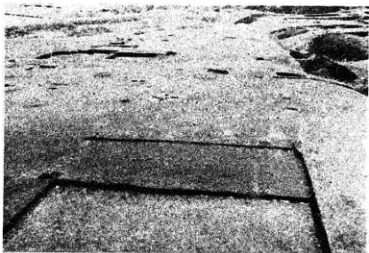
写真図版 1 航空写真



N区全景
Nより



N区全景
Sより



N区全景
Wより

写真図版2 N区 全景



ⅧGd-1·2住



ⅧGd-1住
埋土断面



ⅧGd-2住炉址

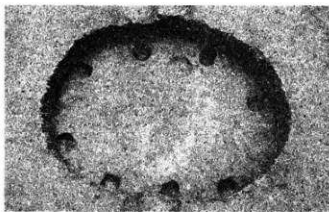


ⅧGd-1住炉址



ⅧGd-1住
遺物出土狀況

写真図版3 ⅧGd-1·2雙穴住居址



WGf-1住



遺物出土状況



WGf-1住埋土断面



遺物出土状況



WGf-1住埋土断面



WGf-2住

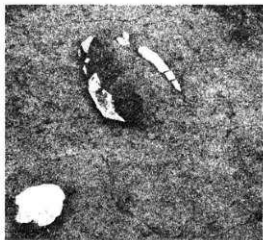


遺物出土状況

写真図版4 WGf-1・2 雙穴住居址



ⅧGn住



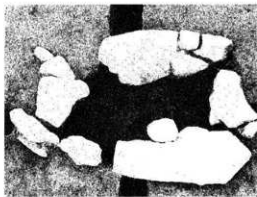
第1号炉址



第1号炉址
埋土断面



第1号炉址

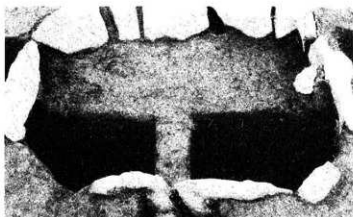


第1号炉址

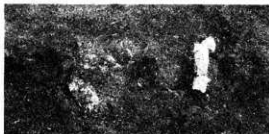
写真图版5 ⅧGn竖穴住居址·炉址



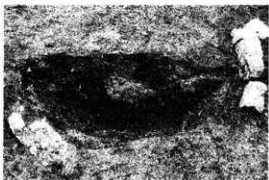
第2号炉址



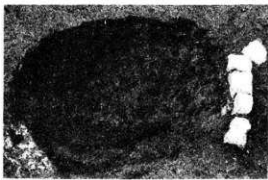
第2号炉址
埋土断面



第3号炉址



第3号炉址埋土断面



第3号炉址

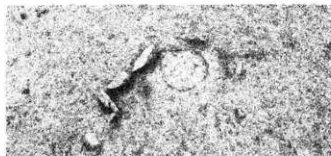
写真图版6 N区炉址



第5号炉址



第5号炉址
埋土断面



第6号炉址



第1号埋設土器



第1号埋設土器

写真図版7 N区炉址・土器埋設遺構



第2号埋設土器



第2号埋設土器



第3号埋設土器

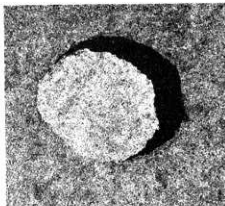


第3号埋設土器

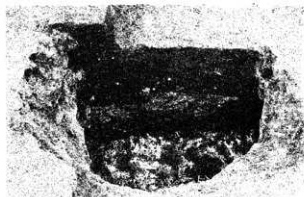
写真図版8 N区土器埋設遺構



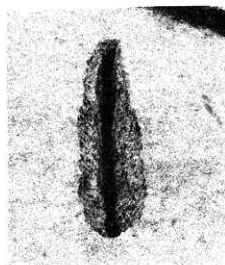
第1号フラスコビット



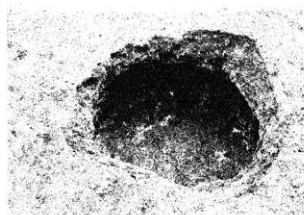
第2号フラスコビット



第4号フラスコビット埋土断面



第2号溝状遺構



第4号フラスコビット

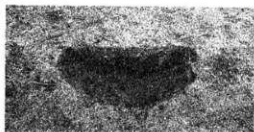
写真図版9 N区フラスコビット・溝状遺構



第5号烧土



第38号烧土



第9号烧土



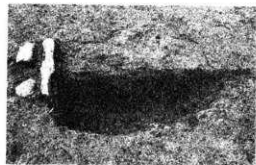
第40号烧土



第23号烧土



第40号烧土



第34号烧土



第41号烧土

写真图版10 N区烧土遗構



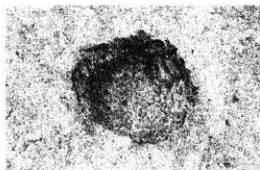
第1号ビット



第7号ビット



第5号ビット



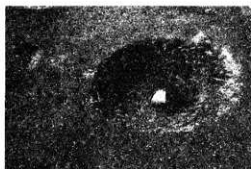
第9号ビット



第6号ビット



第13号ビット



第8号ビット



第14号ビット

写真図版11 N区ビット



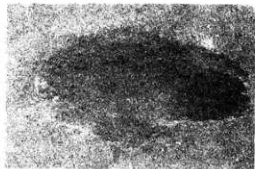
第15号ピット



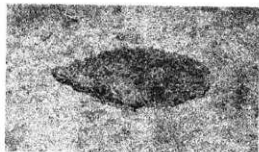
第35号ピット



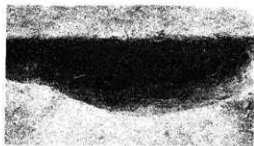
第16号ピット



第36号ピット



第27号ピット



第36号ピット

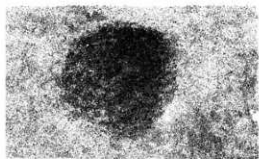


第32号ピット



第37号ピット

写真図版12 N区ピット



第38号ビット



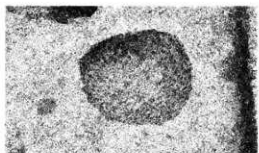
第42号ビット



第39号ビット



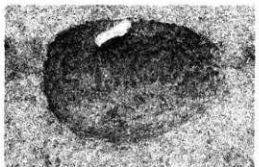
第43号ビット



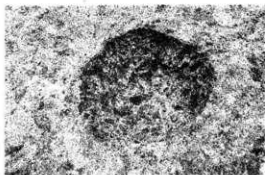
第40号ビット



第43号ビット



第41号ビット

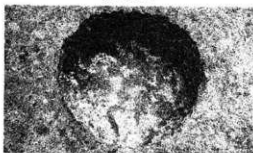


第43号ビット

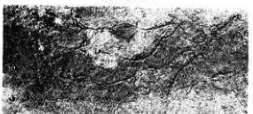
写真図版13 N区ヒット



第44号ビット



第44号ビット



第49号ビット



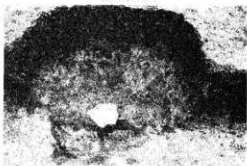
第49号ビット



第49号ビット



第50号ビット



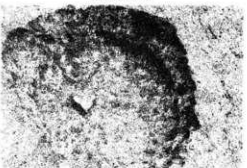
第50号ビット



第52号ビット

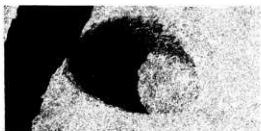


第54号ビット



第54号ビット

写真図版14 N区ビット



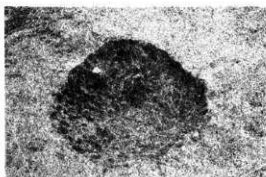
第1号フラスコビット



第1号焼土



第1号溝状遺構



第2号焼土



第2号溝状遺構



第6号焼土



第2号溝状遺構

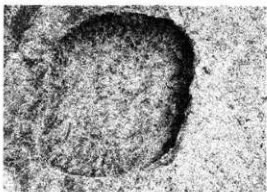
写真図版15 S区フラスコビット・溝状遺構・焼土遺構



第2号ビット



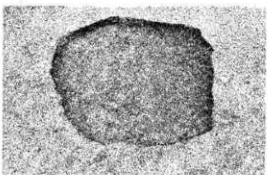
第10号ビット



第2号ビット



第15号ビット

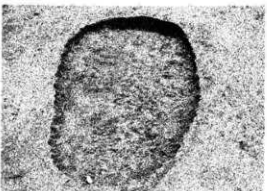


第8号ビット

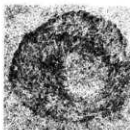


第18号ビット

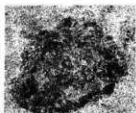
第19号ビット



第9号ビット



第18号ビット



第19号ビット

写真図版16 S区ビット



ⅧGc配石



ⅧGp配石



ⅧGh配石



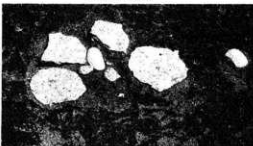
ⅨGd配石



石刀出土状況



ⅨGh集石



ⅧGp配石



石棒出土状況

写真図版17 N区配石遺構・遺物出土状況



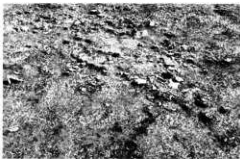
ⅧHm配石



ⅧHe配石



ⅧHm配石



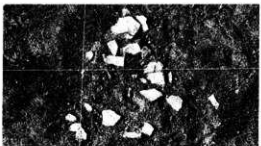
ⅧHe遺物出土状況



ⅧHm配石



ⅧHf遺物出土状況



ⅧHa遺物出土状況



ⅧHf遺物出土状況

写真図版18 N区配石遺構・遺物出土状況



全 景



全 景



埋土断面

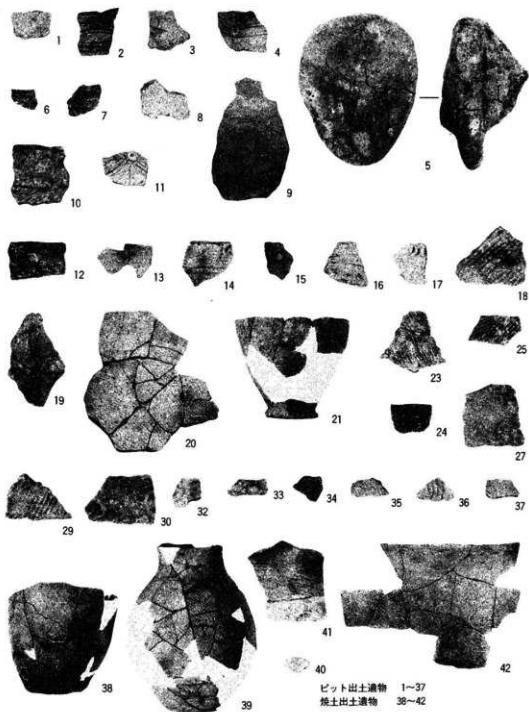


埋土断面

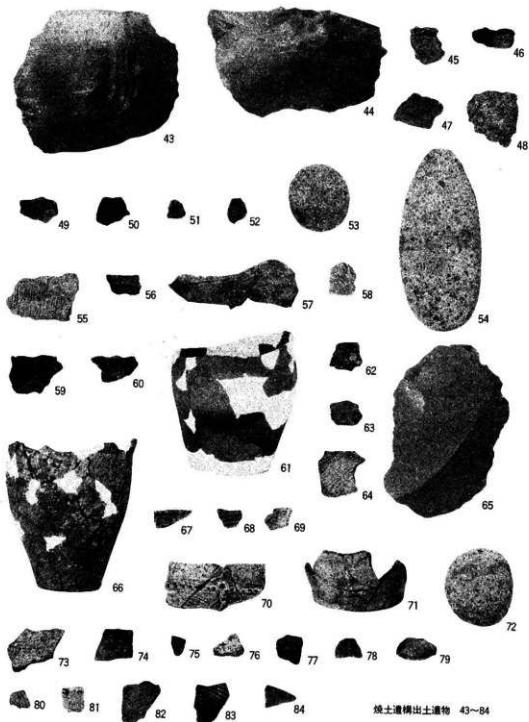
写真图版19 堆積層上炭化粒子分布域



写真図版20 豎穴住居址出土遺物



写真図版21 N区ビット・焼土遺構出土遺物(1)

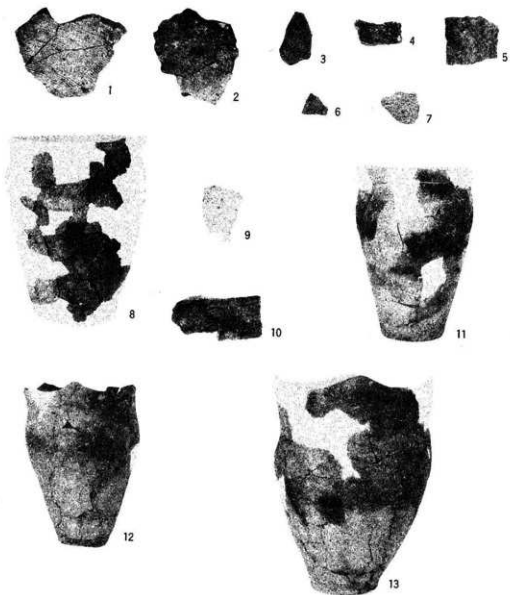


写真図版22 N区ビット・焼土遺構出土遺物(2)



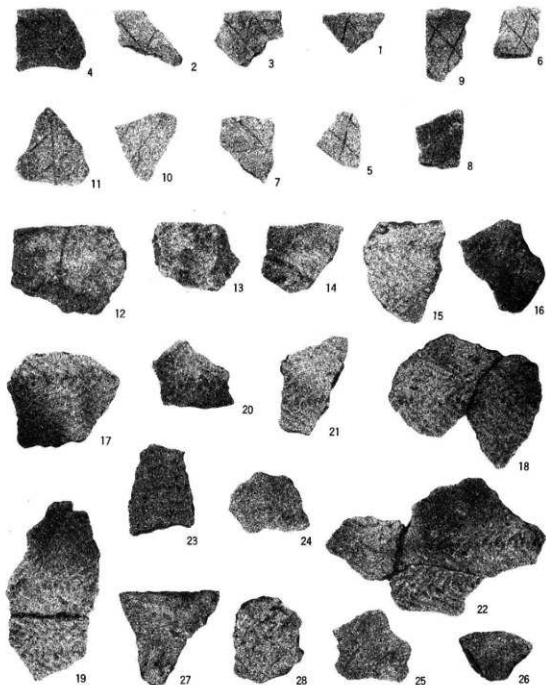
石窑出土遺物 85~89
 土器埋設遺構出土遺物 90~93

写真図版23 N区石窑・土器埋設遺構出土遺物



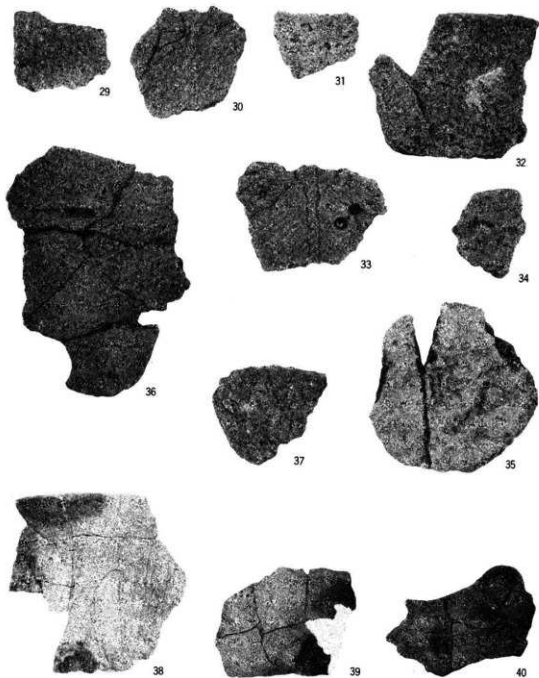
ビット出土遺物 1~7
 焼土遺構出土遺物 8~10
 土器埋設遺構出土遺物 11~13

写真図版24 S区ビット・焼土・その他の遺構出土遺物



1~11 第I群土器
12~28 第II群土器

写真図版25 遺構外出土遺物 土器(1)



29~37 第Ⅱ群土器
38~40 第Ⅲ群土器

写真図版26 遺構外出土遺物 土器(2)



41



42



43



44



46



47



48



49



50



51



52

41・42 第Ⅲ群土器
43～52 第Ⅳ群第4類土器



53



54



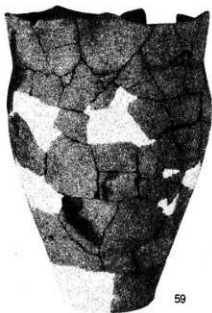
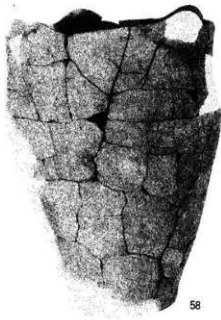
55



56

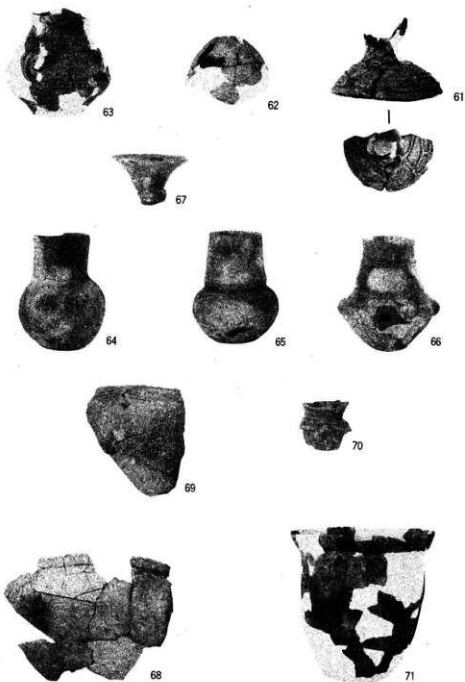
第IV群第4類土器

写真図版28 遺構外出土遺物 土器(4)



第IV群第4類土器

写真図版29 遺構外出土遺物 土器(5)



61~63 第IV群第G類土器
 64~67 第IV群第B類土器
 68・69 第V群土器
 70・71 第VI群土器

写真図版30 遺構外出土遺物 土器(6)



72



73



74



75

72 列V群第4類土器
73~75 列V群第1類土器

写真図版31 遺構外出土遺物 土器(7)



76・78・80 第VI群第1類土器

77・79・81 第VI群第4類土器

写真図版32 遺構外出土遺物 土器(8)



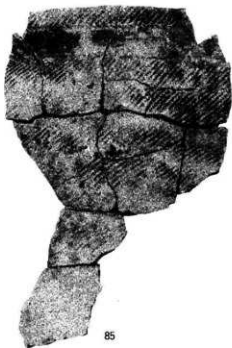
82



83



84



85

85 第VI群第3類土器
82~84 第VI群第4類土器



86



87



88



89



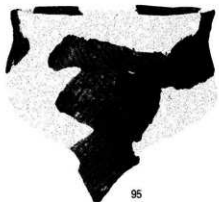
91



90

86・87 第VI群第3類土器
88～91 第VI群第4類土器

写真図版34 遺構外出土遺物 土器(10)



95



96



97



98



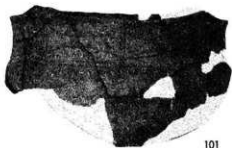
99



100

写真図版35 遺構外出土遺物 土器(11)

100 第Ⅴ群第3類土器
95~99 第Ⅴ群第4類土器



101



102



103



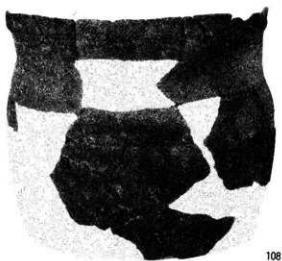
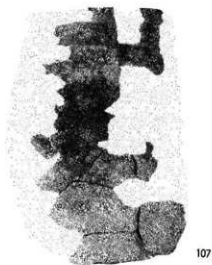
104



105

101 第VI群第3類土器
102・104・105 第VI群第4類土器
103 第VI群第6類土器

写真図版36 遺構外出土遺物 土器(12)



107~109 第VI群第2類土器
106 第VI群第5類土器



110



111



112



113



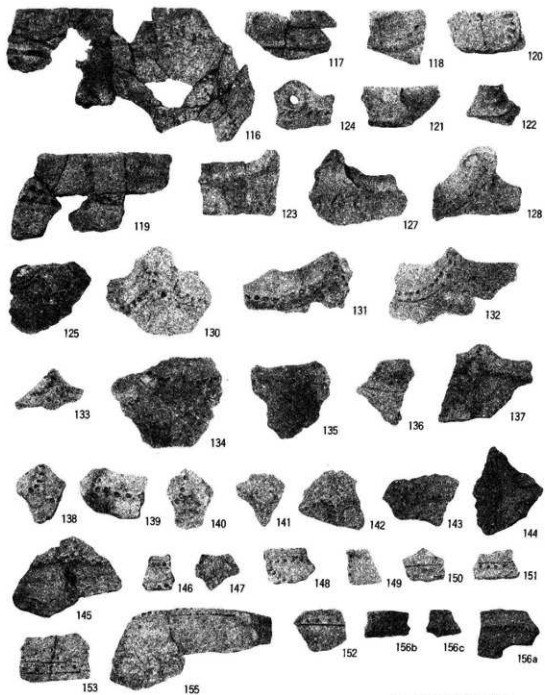
114



115

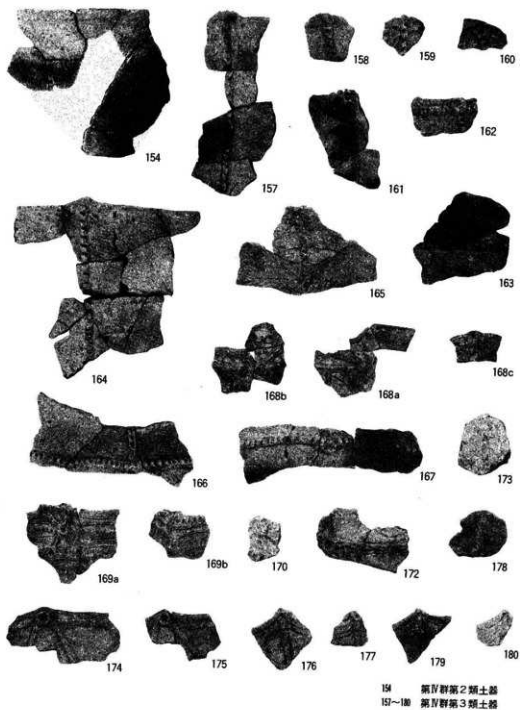
110 第VI群第2類土器
111~115 第VI群第4類土器

写真図版38 遺構外出土遺物 土器(14)

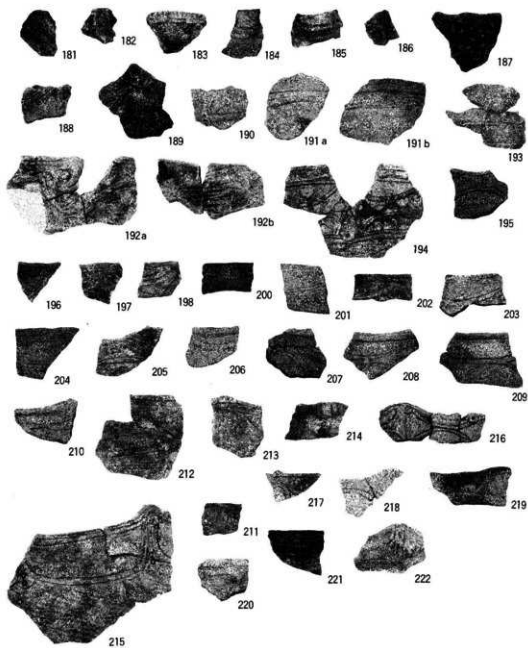


116~136 第VI群第1類土器
137~156 第VI群第2類土器

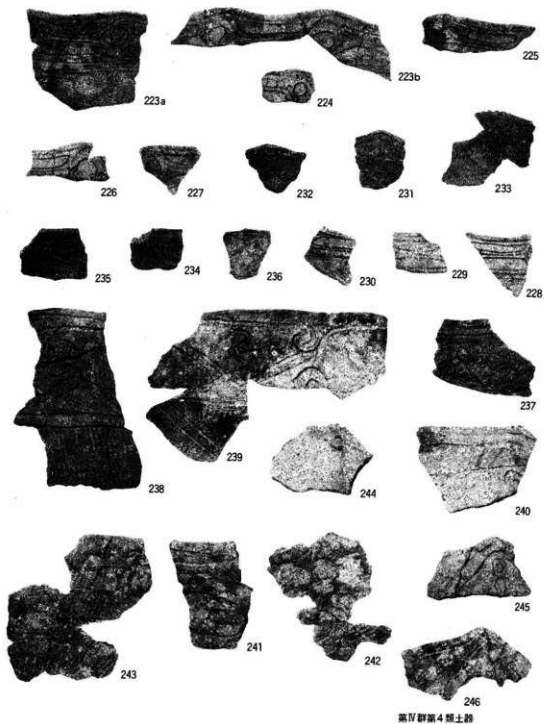
写真図版39 遺構外出土遺物 土器(15)



写真図版40 遺構外出土遺物 土器(16)

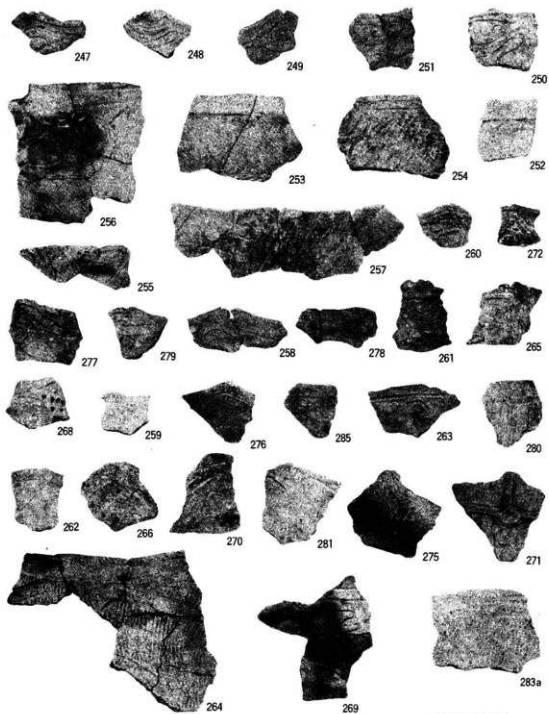


181~191 第IV群第3類土器
194~222 第IV群第4類土器

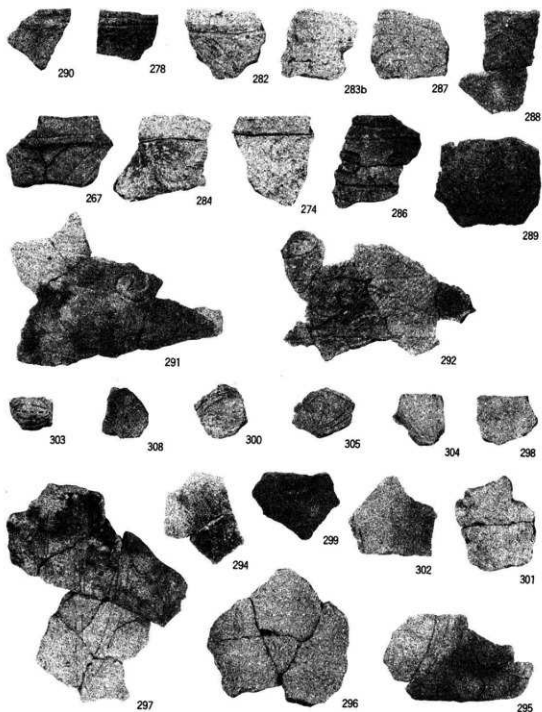


第IV群第4類土器

写真図版42 遺構外出土遺物 土器(18)

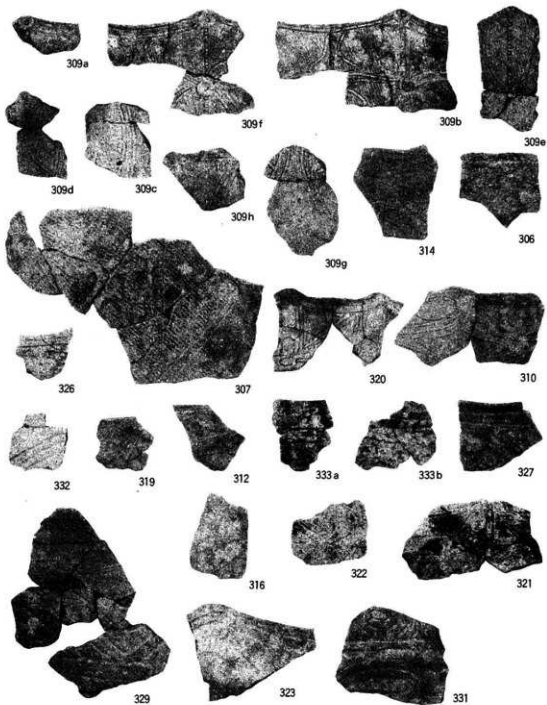


第IV群第4類土器



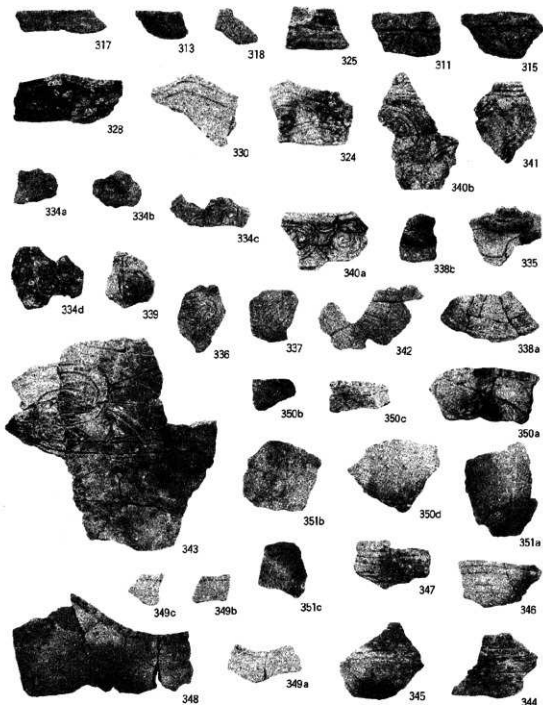
第IV群第4類土器

写真図版44 遺構外出土遺物 土器 (20)



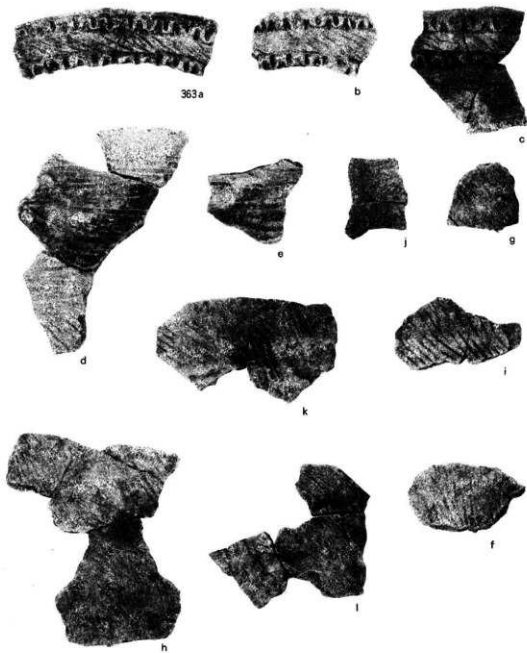
306~322 第IV群第4類土器
323~332 第IV群第5類土器

写真図版45 遺構外出土遺物 土器(21)

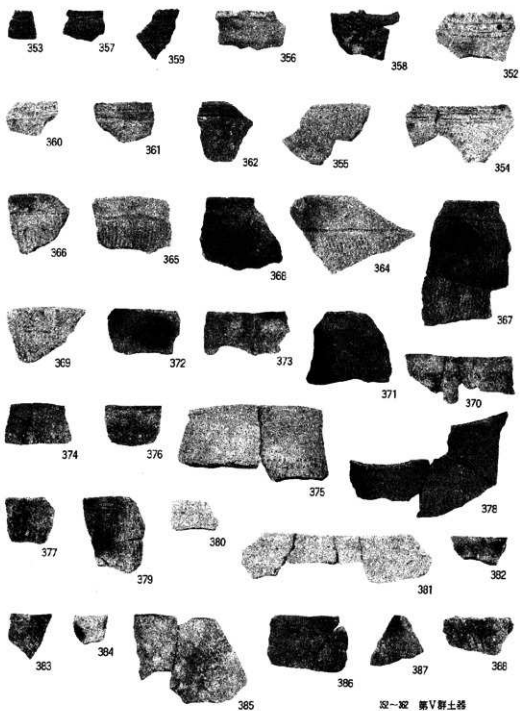


305・311・313・317・318 第IV群第4類土器
 324・325・328・330 第IV群第5類土器
 334~342 第IV群第6類土器
 343~347 第IV群第7類土器
 348~351 第IV群第8類土器

写真図版46 遺構外出土遺物 土器 (22)

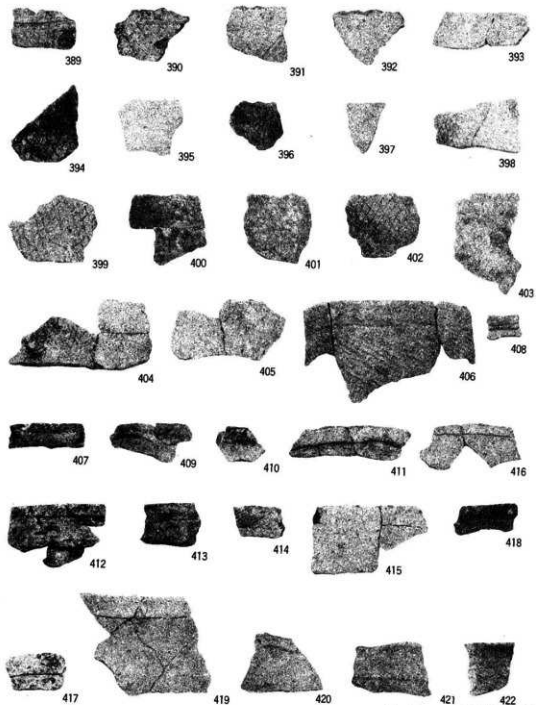


第Ⅳ群土器



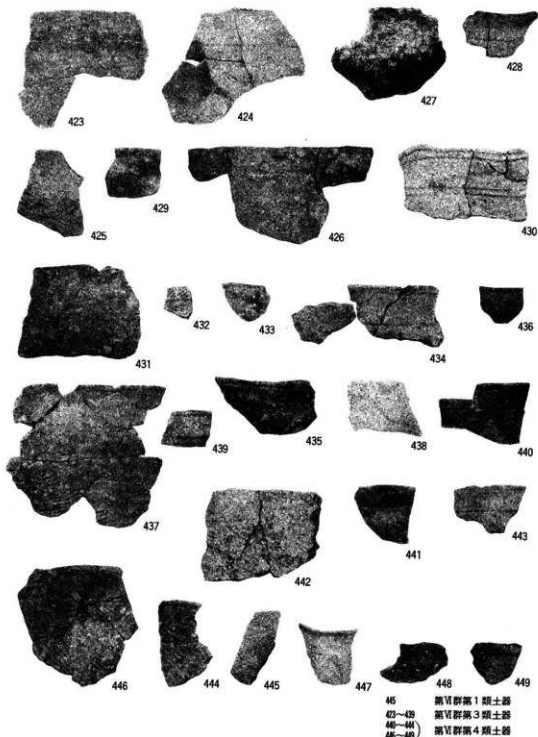
352-352 第V群土器
353-353 第VI群第1類土器

写真図版48 遺構外出土遺物 土器(24)

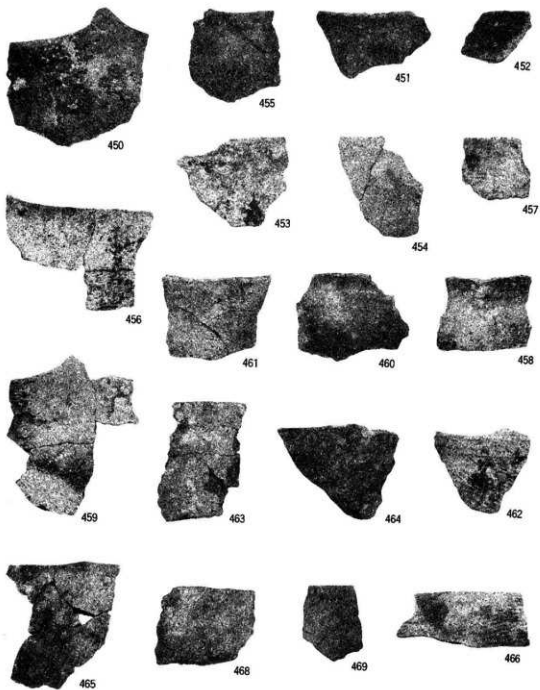


389~405 第VI群第1類土器
 407~408 416~420 第VI群第2類土器
 421·422 第VI群第3類土器
 406·415 第VI群第4類土器

写真図版49 遺構外出土遺物 土器 (25)

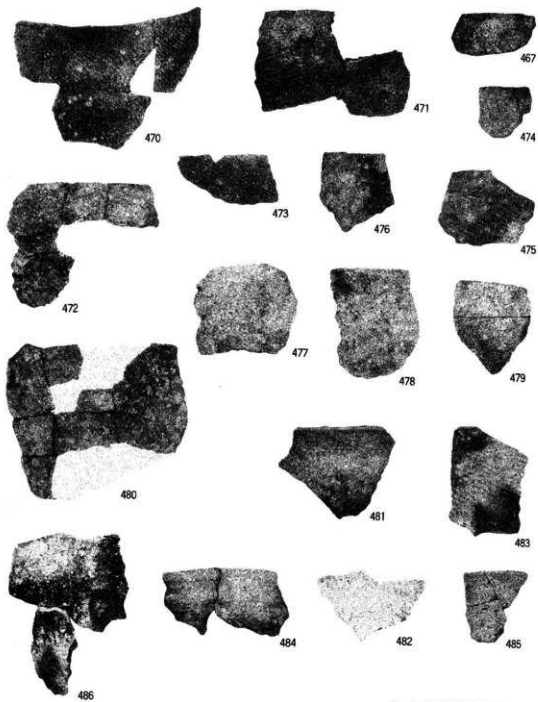


写真図版50 遺構外出土遺物 土器 (26)



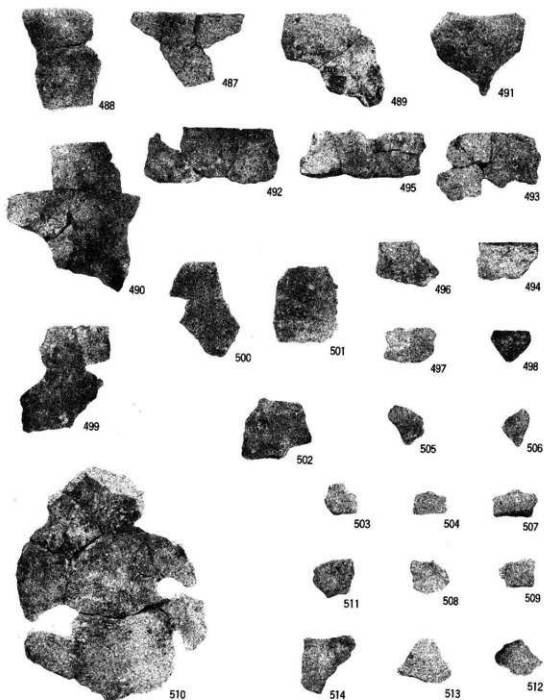
第VI群第4類土器

写真図版51 遺構外出土遺物 土器(27)



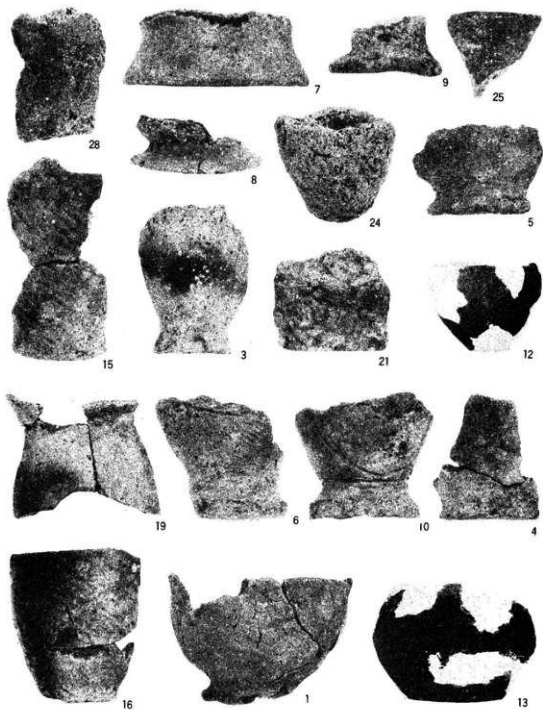
470~483 第VI群第4類土器
484~486 第VI群第6類土器

写真図版52 遺構外出土遺物 土器(28)



489・490 第VI群第4類土器
 491~514 第VI群第5類土器
 487・488・491 第VI群第6類土器

写真図版53 遺構外出土遺物 土器(29)



写真図版54 遺構外出土遺物 小型・ミニチア土器(1)



14



20



2



26



23



22



18



27



11



17



29



30



31



32



33

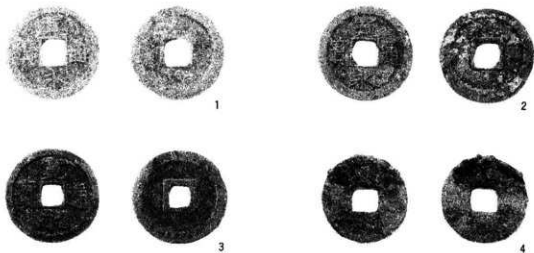


34



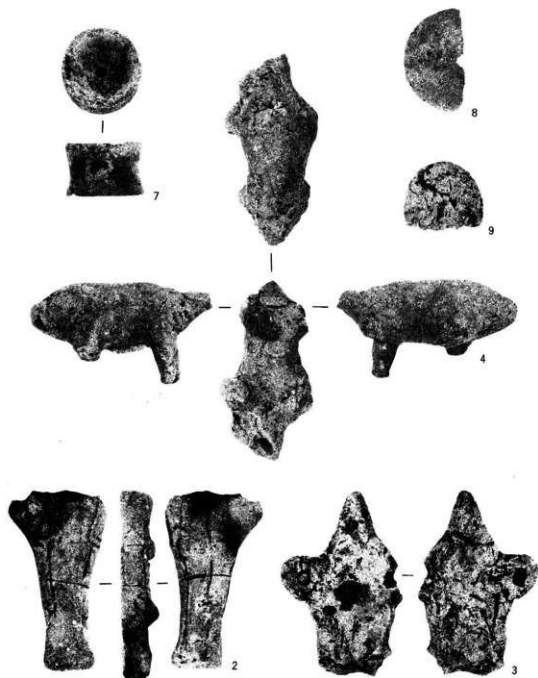
35

写真図版55 遺構外出土遺物 小型・ミニチア土器(2)



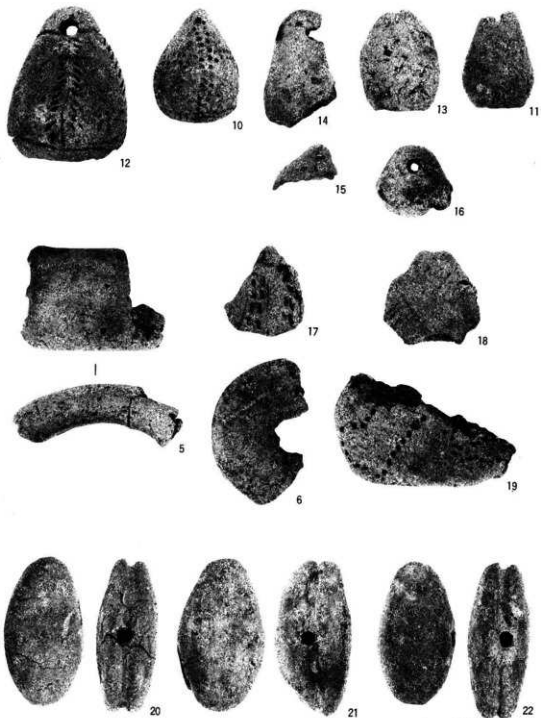
36-47 小型・ミニチア土器
1-4 古銭

写真図版56 遺構外出土遺物 小型・ミニチア土器(3)・古銭



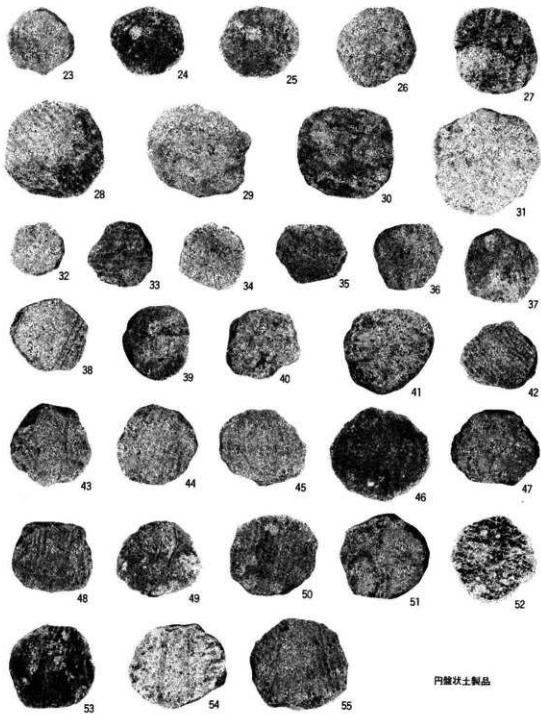
2~4 土偶
7 耳飾
8・9 ボタン状土製品

写真図版57 遺構外出土遺物 土製品(1)

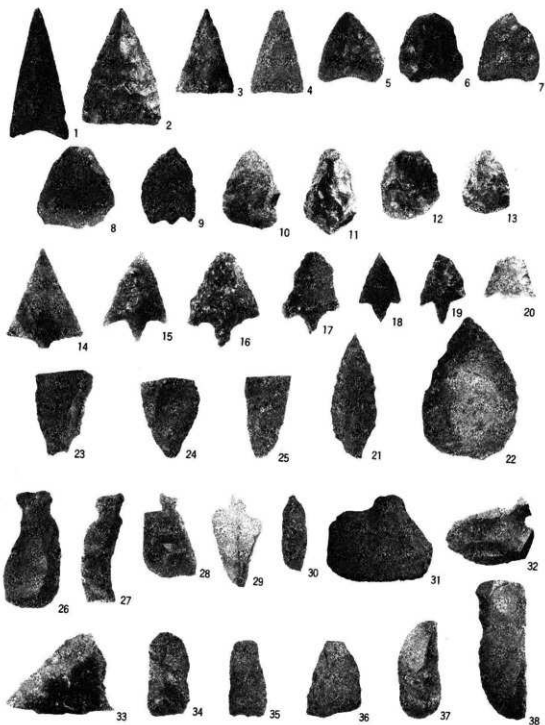


写真図版58 遺構外出土遺物 土製品(2)

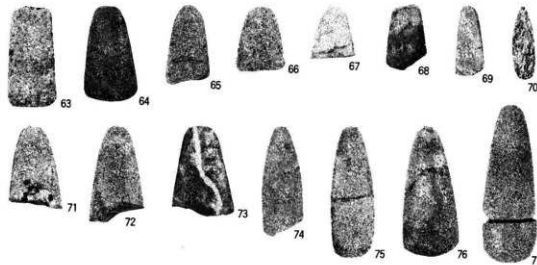
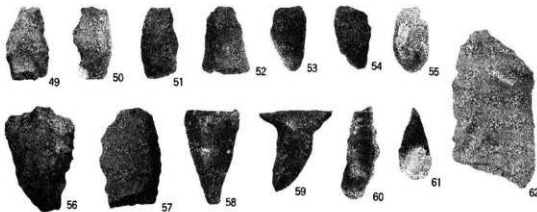
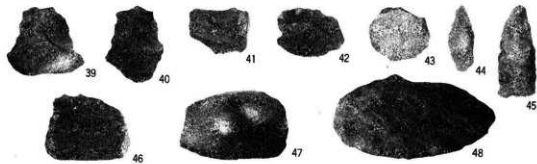
- 5 陶輪形土製品
- 6 環状土製品
- 10~17 鐮型土製品
- 18 三角形土版
- 20~22 土鐘



写真図版59 遺構外出土遺物 土製品(3)



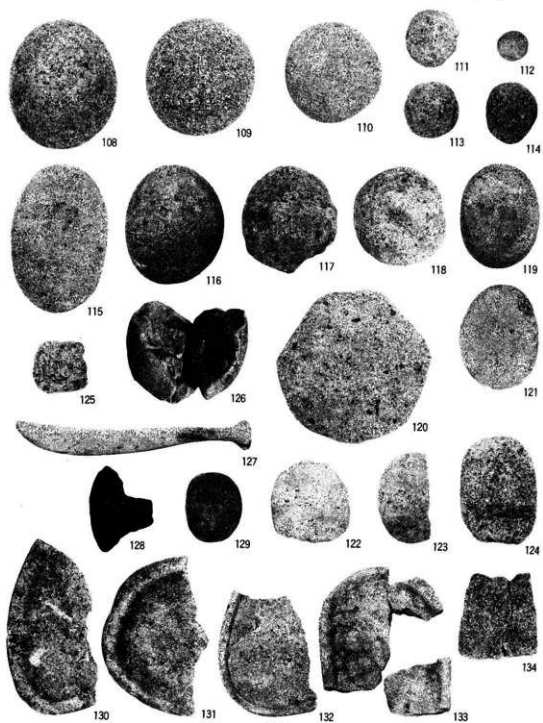
写真図版60 遺構外出土遺物 石器(1)



写真図版61 遺構外出土遺物 石器(2)



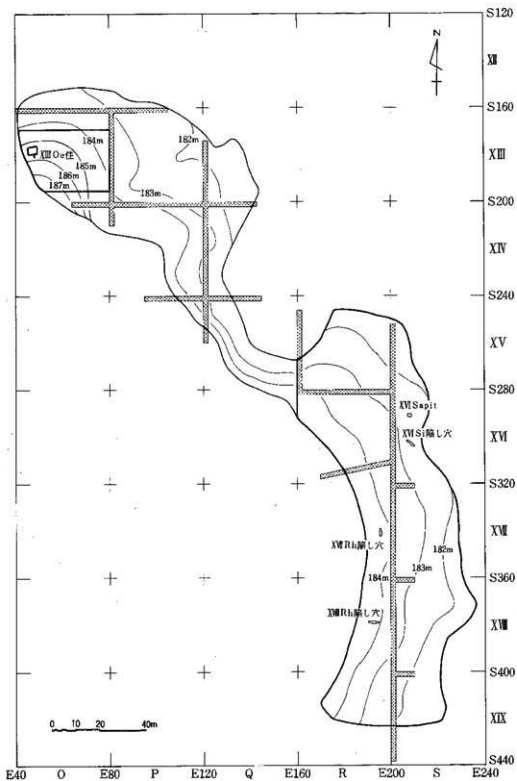
写真図版62 遺構外出土遺物 石器(3)



写真図版63 遺構外出土遺物 石器(4)

9 区

略号	YH 9
調査面積	6.700㎡
調査機関	(財)岩手県埋蔵文化財センター



第1図 9区遺構配置図

I. 調査区地形概観

本調査区は、湯舟沢遺跡の最も南側に位置しており、調査面積は6700㎡に及ぶ。西側は丘陵の裾にあたり、東側は南流する沢と湿地帯に面している。丘陵と沢の間には細長い段丘が形成され、調査区はこの上に載っている。段丘崖と沢との比高は1.5m程である。沢を挟んだ対岸北東側に6区と7区が、また、北西側には小沢を境に10区が続いている。遺構は北東部と南東部の段丘縁の2地域に分布している。

基本土層は地質対比図（第1分冊）に示す通りで、遺構検出面はI層淡黄褐色火山灰からII層暗褐色土中にかけてである。

II. 検出遺構と遺構内出土遺物

1. 平安時代竪穴住居址

XIII Oe 住居址（第2図・写真図版1）

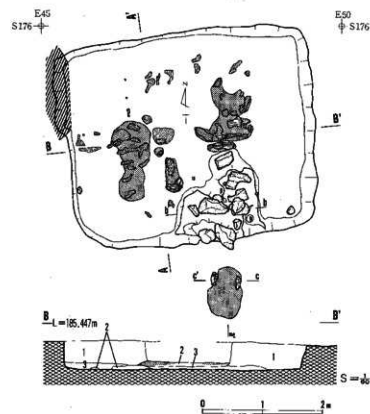
位置 9区の北西隅付近に位置している。北側約10mの所に比高1m～1.5mの段丘崖があり、崖下には小さな沢が東流する。本遺構は焼失家屋である。形態・規模 北西隅付近は木根によって攪乱を受けているが、ほぼ長方形の平面形をなし、南壁にカマドを持つ。軸方向はS2°Eである。規模は東西方向3.6m～3.8m・南北方向3m～3.2mである。壁 壁高は35cm～60cmで南壁の方が高い。壁はほぼ直立するが70～80度で外傾して立ち上がる部分もある。

埋土 主に黒色土で構成され、下位に灰黄色火山灰のブロックが混入している。床面直上には厚い焼土層があり、焼土の下位には炭化材と炭化物が多く見られる。また、焼土の上位には火熱を受けて赤味がかかった火山灰のブロックが認められる。炭化材の樹種はサワコナラ・ケヤキの老木・ナラの老木・樹種不明の広葉樹と鑑定され、ナラ老木の割板材らしいものもある。焼土の最大厚は15cm位である。住居址の周囲にも焼土や炭化物が検出されている。

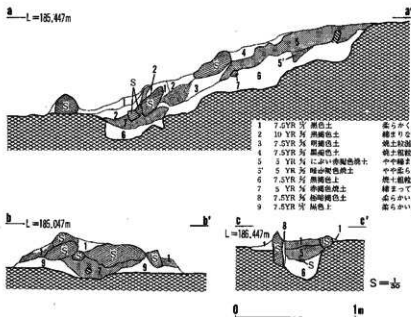
床 床面はほぼ平坦で締まっている。柱穴と周溝は検出されていない。

カマド 南壁の中央東寄りに1基構築されている。袖部は床に軽く盛り上げた黒色土の上に粒径30cm位のわりと平たい亜角礫を並べ、その周囲および上位を褐色土で覆い、たたき締めて造られている。天井石には長めの亜角礫が使用されており、袖石の崩落部分の最上位に載って検出されている。

焚口および燃焼部は床面とほぼ同じレベルで構築され、煙道に向かって緩い上り勾配になっている。燃焼部焼土の下位は掘り込まれた跡があり、焼土や炭化物の混入する黒褐色土が堆積している。煙道は緩い上り勾配で掘り込まれており、煙出し部付近には礫が2ヶ立られている。埋土の上位は焼土層で、下位は炭化物や焼土の混入する黒褐色土である。焼土の部分は煙



1 7.5YR 黄褐色山岳のブロックが埋入する。
 2 5 YR 黄褐色土
 3 7.5YR 黄褐色土
 4 10 YR 灰に多い赤褐色土



- 1 7.5YR 黄褐色土
- 2 10 YR 黄褐色土
- 3 7.5YR 黄褐色土
- 4 7.5YR 黄褐色土
- 5 3 YR 灰に多い赤褐色土
- 5' 5 YR 暗赤褐色土
- 6 7.5YR 黄褐色土
- 7 5 YR 赤褐色土
- 8 7.5YR 赤褐色土
- 9 7.5YR 黄褐色土

赤土が、炭化物・焼土が埋入する。
 焼土が埋入し、炭化物が多く埋入する。
 焼土が埋入し、炭化物を受けわずに赤化する。
 焼土が埋入し、炭化物を受けわずに赤化する。
 赤土が埋入し、炭化物を受けわずに赤化する。
 赤土が埋入し、炭化物を受けわずに赤化する。
 赤土が埋入し、炭化物を受けわずに赤化する。

第2図 XIII O 住居址

道の天井を形成していた粘土やシルトが火熱を受けたものと思われる。煙出し部直下にピットは認められない。左袖の壁際からロクロ使用の環が出土している。

カマドの規模は右袖で長さ70cm・幅50cm、左袖で長さ90cm・幅50cm位である。燃烧部の焼土は径50cm・最大厚10cm位である。煙道は長さ90cm・幅35cm位である。

遺物(第3図・写真図版3-1~3)

カマドから環の完形品と甕の破片が、床および埋土下位から環の破片等が出土している。

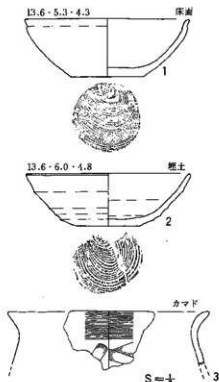
1はカマドの左袖から出土した環である。ロクロ成形で底部は回転糸切りであり、底部は切り離した後、

縁をヘラでナデである。他の部分には再調整の痕は認められない。底部から内湾ぎみに広がって口縁部に続き、内外面に炭化物が付着している。法量は口縁部径13.6cm、底部径5.3cm、器高4.3cmである。胎上には細砂を含み、焼成は堅緻である。

3はカマドの焚口付近から出土した甕の口縁部付近の破片である。口縁部は短く、外反する。器面調整は内外面とも、口縁部はヨコナデ、体部はナデである。法量は口縁部径16cm位である。胎土に粒径3mm~5mmの小礫を含み、焼成は堅緻である。

2は埋土から出土した環で、全体の1/3位の現存である。ロクロ使用で底部は回転糸切りである。再調整は行われていない。底部から内湾ぎみに広がりながら立ち上がり、口縁部外面は薄くなり段となる。法量は口縁部径13.6cm、底部径6.0cm、器高4.8cmである。胎土に細砂を含み、焼成は堅緻である。埋土下位からは、甕の口縁部片と底部回転糸切りの環の底部片が出土している。

本住居址の所属する時期は、出土遺物等から平安時代中葉に位置づけられると考えられる。



第3図 XIII Oe住居址出土遺物

2. ビット

9区では1基だけの検出である。

XVI Sa ビット (第4図・写真図版2)

南東区域の北東部に位置し、南方10mにはXVI Si 陥し穴状遺構がある。東5mには比高1.5mの段丘崖があり、崖下には南流する沢と湿地がある。II層中で検出されている。平面形は不整な円形を呈し、壁は緩く湾曲して底部に繞き、断面形は浅皿状を呈す。規模は開口部径1.2m～1.4m、底部径70cm～85cm、検出面からの深さは25cm位である。

埋土は2層に分けられ、埋土の大半を占める1層は、粒径3mmの橙色のパミスが少量混入する黒色土である。壁際にある2層は砂質の黒褐色土である。遺物は出土していない。

3. 陥し穴状遺構

南東区域で3基検出されている。

XVI Si 陥し穴状遺構 (第4図・写真図版2)

南東区域の北東部に位置している。東側1mには比高1.5mの段丘崖があり、崖下には南流する沢と対岸の遺跡6区・7区まで広がる湿地帯がある。

III層の上位で検出されている。平面形は溝状を呈し、長軸方向の底部両端は開口部よりも奥に掘り込まれている。規模は開口部で長さ4.2m・幅35cm～50cm、底部で長さ4.4m・幅15cm～20cm、検出面からの深さは1.2mである。長軸方向はN47°Eを示す。

埋土は主に黒色土で構成され、やや締まっている。部分的に褐色土や粒径1cm位の橙色の浮石が混入している。遺物は出土していない。

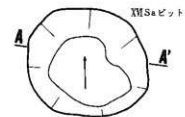
XVII Rh 陥し穴状遺構 (第4図・写真図版2)

南東区域のほぼ中央に位置している。III層下位で検出されている。この付近の地表面までの土層の厚さは80cm位である。平面形は溝状を呈している。規模は開口部で長さ3.1m・幅45cm～60cm、底部で長さ2.7m・幅20cm～25cm、検出面からの深さは70cmである。長軸方向はN4°Eを示す。

埋土は2層に分けられ、上層は柔らかく橙色のパミスが混入する黒色土、下層は褐色土で構成される。底部より水が多く湧出する。遺物は出土していない。

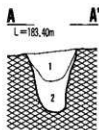
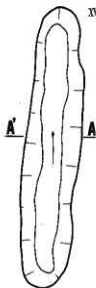
XVIII Rh 陥し穴状遺構 (第4図・写真図版2)

調査区域の南端付近に位置し、III層下位で検出されている。平面形は狭い溝状を呈している。規模は開口部で長さ4.4m・幅15cm～25cm、底部で長さ4.35m・幅3cm～7cm、検出面からの深さは60cm～70cmである。長軸方向はほぼN90°Eを示す。



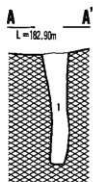
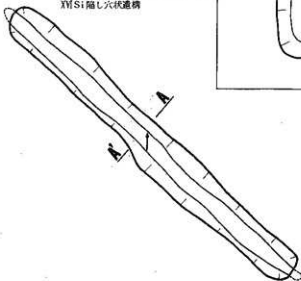
- 1 7.5YR 灰 黒色土 堅く締まっている。
- 2 7.5YR 灰 黒褐色砂質土 やや粘性あり。

XV R6 陥し穴状遺構



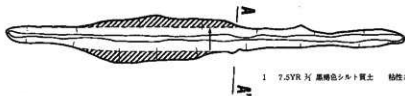
- 1 7.5YR 灰 黒色シルト質土 高らかい。
- 2 7.5YR 灰 褐色シルト質土 粘水あり。

XV Si 陥し穴状遺構

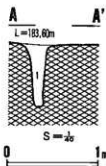


- 1 7.5YR 灰 黒色シルト質土 締まっている。部分的に明褐色土が混入する。

XV R1 陥し穴状遺構



- 1 7.5YR 灰 黒褐色シルト質土 粘性あり。



第4図 ビット・陥し穴状遺構

埴土は橙色の浮石がまばらに混入する黒褐色土で構成される。底部より水が湧出する。遺物は出土していない。

III. 遺構外出土遺物

9区からの出土遺物は土器と石器であるが、他の区域に比較し甚だ少なく、土器はダンボール箱で約1箱、石器は礫石器2点の出土である。

1. 土器

遺構外から出土した土器は、縄文時代前期・後期・粗製土器及び奈良平安時代の土師器である。出土土器は他の区域と同様に時期毎に分類し、それぞれの特徴によって細分した。9区の土器は下記の4群に該当する。

第II群……縄文時代前期

第IV群……縄文時代後期

第VI群……時期の識別しかねる縄文土器（粗製・無文・その他の土器）

第VII群……土師器

第II群土器（第6図13～18・写真図版4-16～21）

本群は縄文時代前期に属するもので、出土点数はごく僅かである。文様の特徴から1～2類に分類した。

1類（第6図13～16・写真図版4-16～19）

横位の結束羽状縄文が施文されるものである。いずれも植物性繊維が多く混入し、器面に化粧粘土が貼付けられる深鉢形土器の口縁部片（13・14）と体部片（15・16）である。羽状縄文施文後、口唇部直下に、13には棒状工具による押引き文が横位に2条、14には不整然糸文が横位に施文される。15には原体の上下を反転し施文したため、X字状の文様が描出されている。いずれも焼成は堅緻で、器厚は8mm～9mmである。

2類（第6図17・18・写真図版4-20・21）

連続状文またはS字状文といわれる絡糸体回転文が横位に施文されるもので、17・18は同一個体と思われる土器の体部片である。胎土には植物繊維や粗砂は混入されず、精選された粘土を用いている。内面は縦位の磨きが施され、焼成は堅緻である。器厚は6mm位で、色調は黄褐色を呈している。

第IV群土器（第6図19～22・写真図版4-22～25）

1類（第6図20・21・写真図版4-23・24）

本類は縄文後期前葉に属し、十腰内I式に比定されるものであろう。2～3条の平行沈線を

用いて帯縄文を構成し、その帯縄文を直線的又は曲線的に描き出すものである。沈線上には細い竹管状の円形刺突文が施される。21は沈線で区画された磨消縄文帯をもつ。20・21は共に内面が良く磨き調整され焼成は良好である。細砂が多く混入する。器厚は7mm位で、色調は黄褐色～灰褐色を呈している。

2類 (第6図19・22・写真図版4-22・25)

本類は縄文後期後葉に属するものであり、山形突起を有する深鉢形土器の口縁部片である。19は口縁部がやや外反りを呈し、山形突起頂部に棒状工具によって2ヶの刻目が施される。口縁部には2条1組とする横位の平行沈線が3組施文される。地文は単節斜縄文(LR横回転)である。胎土に粗砂と小礫が多く混入している。焼成は良好で器厚は6mmほどである。22は台形状の突起を有す土器で、地文はなく横位の平行沈線間に連続する刻目文をもつものである。内外面とも横ナデによって器面調整されている。焼成は良好でなく軟質な感じのする土器で、器厚は8mm位、色調は明黄褐色を呈している。

第VI群土器 (第5図1～8、第6図23・24・写真図版3-4～11、4-26・27)

時期の識別しかねる縄文土器を一括した。全体が復元できたものではなく、凡そ器形が分る程に接合されたものが2点だけである。1は波状口縁を呈する深鉢形土器で、体部は内湾ぎみに外傾し立ち上がり頸部でややしまり、口縁部が外反する器形である。口唇部は平坦に調整され、内面は縦ナデによって丁寧に調整されている。地文は無節斜縄文(R/斜回転)が施文される。焼成は良く、器厚は約8mmで色調は褐色である。2・3は壺形土器で、2は複合口縁をもち頸部に磨消し手法が施されるものである。地文は斜行、横走の単節縄文(LR)である。内面調整は丁寧であるが、胎土に粗砂と小礫が多く焼成は脆い。色調は明赤褐色である。3は無文で、胴部上半に浅い一条の横位沈線が巡るものである。焼成はやや悪く、軟質な感じのする壺である。色調は暗灰黄色を呈している。器厚は2が約8mm、3は5mm～7mmである。

4・5は同一個体と思われる平縁の深鉢形土器である。4は破片が少なく部分的に接合されたもので、本来の器形より口径が大きく復元されたようである。底部からの立ち上がりはやや丸味をもち、体部はほぼ直線的に外傾し立ち上がる。頸部で僅かにしまり口縁部が積み出すように外反する。文様は口頸部に5条の横位平行沈線が施文されるのみで、体部には単節斜縄文(LR)が施文される。胎土には粗砂が多く混入する。焼成は良好で器厚は7mm～8mm、色調は暗褐色を呈している。6・8は深鉢形土器、7は鉢形土器の底部片であり、上げ底状を呈している。

23は鉢あるいは壺形土器と思われるものの口縁部片で、口縁に平行して縄文原体圧痕が施文されている。24は深鉢形土器の口縁部片で、強く内湾する形状を呈している。地文は単節斜縄

文 (LR) で、粗砂が多く混入し焼成は悪い。器厚は約 6 mm、色調は明褐色である。

第Ⅷ群土器 (第 5 図 9~12、第 6 図 25・写真図版 4-12~15、4-28)

9 は手づくねの浅鉢形土器である。底面が僅か上方に湾曲し、体部へ口縁部が肥厚し断面形は二日月状を呈し、強く内湾する器形である。器面調整は、外面はヘラナデとケズリ、内面はヨコナデとヘラナデで、一部に粘土積上げ痕が残る。胎土には粗砂や小礫が僅か混入する。焼成は脆く、全体的に粗雑な感じのする土器である。底部は木葉痕がある。器厚は 9 mm~12 mm で、色調は褐色~暗褐色を呈している。

10 はロクロ使用の坏の口縁部片で器厚は 4.5 mm~5 mm で、焼成は堅緻である。25 は高台を呈する坏の底部片で、回転糸切り後高台を貼付けたものである。

11・12 は壺の口縁部片で、短い口縁部が強く外反するもの (11) と、やや外傾するもの (12) である。

底部圧痕をもつもの (第 6 図 26~29・写真図版 4-29~32)

網代痕をもつもの (26・27)、笹又は茅類の葉及び茎の圧痕をもつ (28)、両者の圧痕をもつ (29) がある。26 は経の条の幅が約 2 mm のもの、27 は幅約 3.5 mm のものを 2 条 1 組として用いている。29 は網代の上に茅類の茎を載せたものの圧痕である。

27 は胎土に小礫が多量に混入し焼成が堅緻であり土師器と思われる。他は縄文土器であろう。

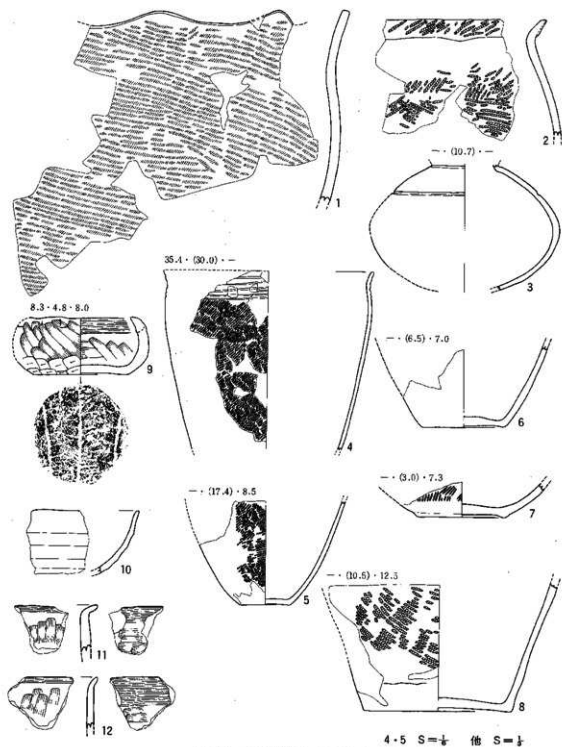
2. 石器 (第 6 図 30・31・写真図版 4-33・34)

遺構外から磨石類が 2 点出土している。30 は三角柱状の自然礫の側面に擦り面を造るもので、所謂特殊磨石と言われるものである。ややザラザラする擦り面は、幅 1.4 cm、長さ 10 cm ほどで、縦方向に緩い膨らみをもつ。擦り面の縁辺部から自然面にかけて、敲打痕と思われる剝落痕が、5~6 ヵ所認められる。石器の計測最大値は、長さ 11.5 cm、幅 4.3 cm、厚さ 6.6 cm で、石質は岡輝石安山岩である。

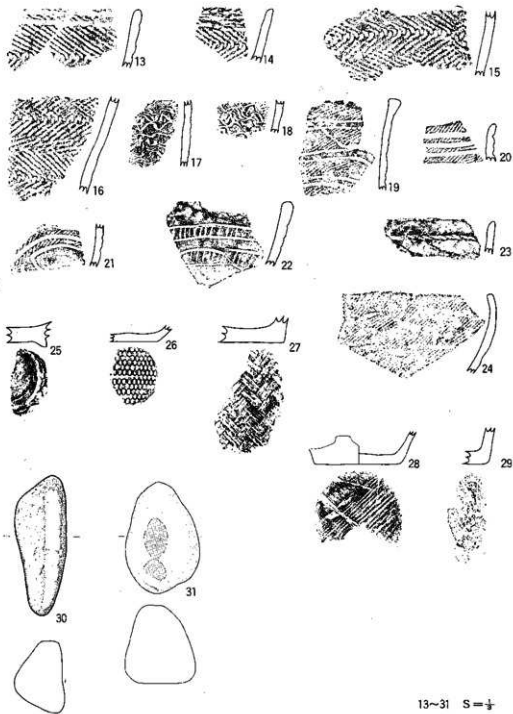
31 は、縦・横断面とも台形状を呈する自然礫の側面に、磨面を 2 ヵ所に持つ磨石である。磨面は平坦で、且つ滑らかである。磨面は 3.5 cm × 2.0 cm と、2.0 cm × 1.5 cm の広がりを持ち、二面のなす角は約 135 度である。石質は岡輝石安山岩である。

表 1 9 区石器一覧表

No.	図版	写真図版	器種	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	産地
1	6-30	4-33	磨石	XV R-遺埋	11.5	4.3	6.6	410	岡輝石安山岩	赤子山・第四系
2	6-31	4-34	磨石	XVII 5m-II (F)	9.0	6.3	6.5	510	岡輝石安山岩	赤子山・第四系



第5图 9区遺構外出土遺物(1)



13~31 S=1/4

第6图 9区遗物出土文物(2)

IV. まとめ

1. 遺構

(1) 平安時代竪穴住居址

9区では、10区に隣接する北西の段丘縁りに平安時代の住居址が1棟検出されている。形態・規模は約東西3.7m×南北3.1mの長方形で、カマドは南壁の中央やや東側寄りに構築される。煙道は掘り込みによってつくられ、斜面上方に緩く立ち上がる。柱穴は検出されていない。埋土の下位から、火熱を受けて赤味を呈した火山灰（十和田a降下火山灰）のブロックが検出されている。住居址は桃矢家屋で、床面から割り材と思われるナラ、ケヤキ等と鑑定された炭化物が多く出土しているが、原形をとどめぬ破片で床材であるかどうかは不明である。出土遺物等から住居址の時期は平安時代中葉と推定される。

(2) ビット

南東部の段丘面で1基検出されただけである。開口部が径1.3m程の円形で、断面は浅皿状を呈するものである。出土遺物はなく、ビットの機能及び時期は不明である。

(3) 陥し穴状遺構

南東部の湿地帯に面する段丘面で3基検出されている。北側の1基(XVISi)は、ほぼ原形に近い形態で検出されているが、他の2基は最終検出時のもので、本来の深さからは大きくかけ離れていると思われる。6区の陥し穴状遺構の形態分類に準ずると、B型（平面形が長楕円形～やや幅の広い溝状、断面形が台形～長方形のもの）が1基(XVI Rh)、他の2基はD型（平面形が溝状、断面形は両端が挟れるフラスコ形のもの）と分類される。これら3基の配置及び長軸方向の関係からは、相互の関連性は認められず、それぞれ独立した構築の遺構であると思われる。3基とも遺物が出土しておらず、時期は不明である。

表2 陥し穴状遺構一覧表

No.	遺構名	規 模 (単位m)			長 軸 方 向 (真北からの偏角)	断 面 形		分類	備 考
		開 口 部	底 部	深 さ(中央部)		長軸方向	短軸方向		
1	XVISi	4.2×0.4	4.4×0.15	1.2	N47°E	台形	短冊状	B	出土遺物なし
2	XVII Rh	3.1×0.6	2.7×0.25	0.7	N04°E	逆台形	U字状	D	〃
3	XVIII Rh	4.4×0.25	4.4×0.05	0.6	N90°E	長方形	短冊状	D	〃

2. 遺物

(1) 土器

縄文土器と土師器が出土しているが、出土量は極めて少なく殆どが破片であり、土器型式の判明するものは数点である。

縄文土器

II群1類の羽状縄文土器は前期初頭に比定される織織入り土器の一群であろう。

II群2類の連鎖状文の土器は前期初頭の大木2式に比定されるものであろう。

IV群2類は、後期後葉の新地3～4式に比定されるものであろう。

土師器

住居址からロクロ使用の坏が出土しており、底部は回転糸切り無調整のものである。遺構外からは底部に木葉痕のある手づくね土器が出土している。他は甕の破片である。

(2) 石器

遺構外から磨石2点が出土したのみで、土器の時期に伴うかは不詳である。

表3 9区出土縄文土器一覧表

() は推定値 () は現存品

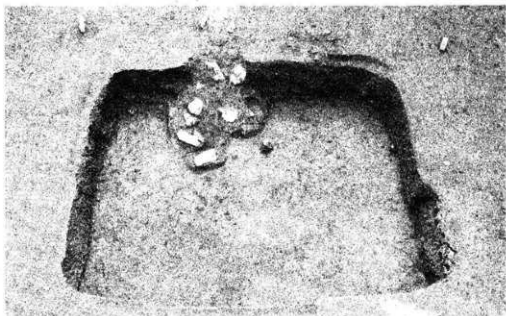
No	器 種	残存部位	図番番号	写真番号	出土地点	計 測 値				文様と施文方法	分類	備 考
						口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(mm)			
1	深鉢	口縁～底部	5-1	3-4	XVIII Sa-III	—	(24.0)	—	8	無彫刻縄文(LR)	VI	表状口縁
2	甕	口縁～底部	5-2	3-5	XIII OI-III	—	(10.6)	—	6~7	連続縄文・ 横位縄文(LR)	VI	糸り返し口縁
3	甕	底部 1/3	5-3	3-6	XVI Sin-III	—	(10.7)	—	5~7	底部に横位砂線	VI	裏文
4	深鉢	口縁～底部	3-4	3-7	XIV Sh-II	35.4	30.0	—	7~8	口頸部に横位平行改線	VI	裏彫刻縄文(LR)
5	深鉢	底部	5-5	3-8	XIV Sh-II	—	(17.4)	8.5	7~8	単彫刻縄文・ 横位縄文(LR)	VI	
6	深鉢	底部	5-6	3-9	XVI Rd-III	—	(5.5)	7.0	5		VI	裏文
7	鉢	底部	3-7	3-10	XVI Rf-II下	—	(3.0)	7.3	5	単彫刻縄文(LR)	VI	外周縁付蓋
8	甕	底部	5-8	3-11	XVII Rp-III	—	(10.5)	12.5	7~8	単彫刻縄文(LR)	VI	底部に茅の茎 跡出石

表4 9区出土土師器一覧

() は推定値 () は現存品

No	器 種	残存部位	図番番号	写真番号	出土地点	計 測 値				器 面 調 整		備 考
						口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	器厚(mm)	外 面	内 面	
1	坏	光形	3-1	3-1	XIII Oe 住居跡	13.6	5.3	4.3	4~4.5			ロクロ使用 回転糸切り
2	坏	口縁～底部 1/3	3-2	3-2	XIII Oe 住居跡	13.5	6.0	4.8	4~5			ロクロ使用 回転糸切り
3	甕	口縁破片	3-3	3-3	XIII Oe 住居跡	—	—	—	5~6	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	
4	丁すくね	～底穴	5-9	3-12	XIII Oe-相模	8.3	4.8	8.0	—	ヘラナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ	底部に木葉痕

9 区写真図版



実態



断面



炭化物出土状況

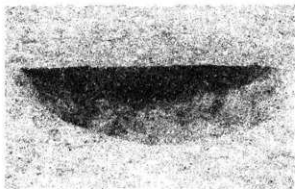


カマド

写真図版 1 XIII O 住居址



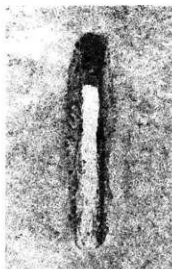
XIV Saビット



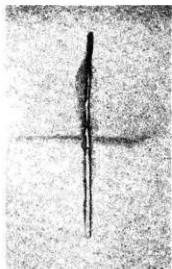
XIV Saビット断面



XVI S:陥し穴状遺構



XVII Rh陥し穴状遺構



XVII Rh陥し穴状遺構



断面

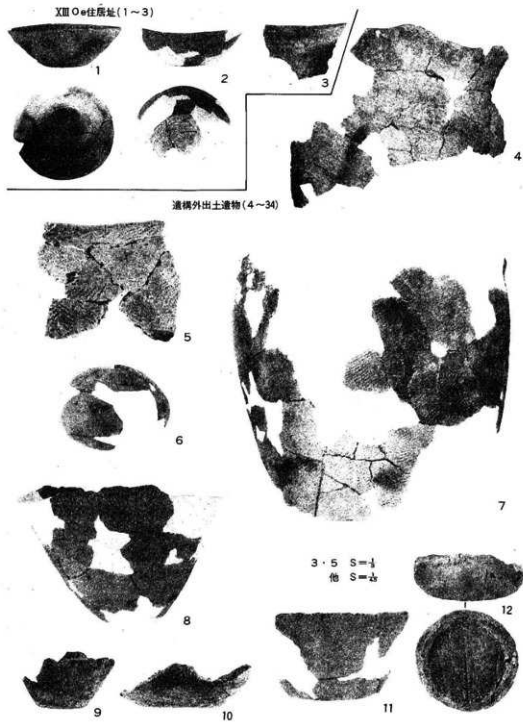


断面

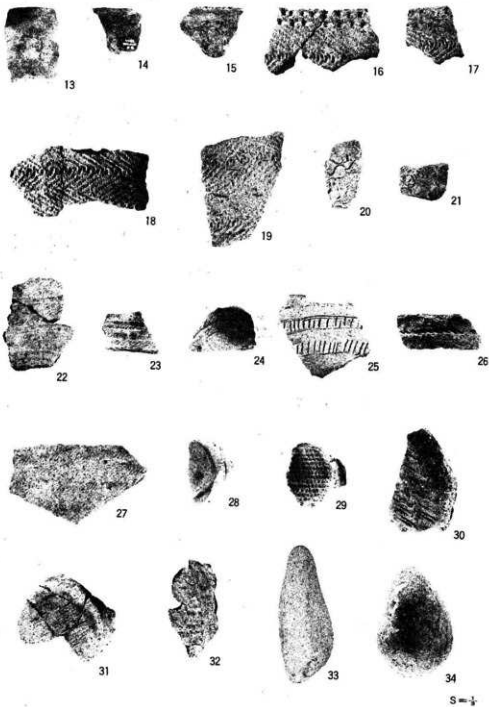


断面

写真図版2 ビット・陥し穴状遺構



写真図版3 XIII Oe 住居址出土遺物・9区遺構外出土遺物(1)



写真图版4 9区遺構外出土遺物(2)